

---

# スタンド使いもリリカルマジカルッ！

怪人紳士サノブ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スタンド使いもリリカルマジカルッ！

### 【NNコード】

N9864W

### 【作者名】

怪人紳士サノブ

### 【あらすじ】

スタンド使いもリリカルマジカルしたっていいじゃない！なんてよくわからん発想から生まれたこの作品 オリジナルスタンドやらなんやらたくさん出でてきます ご都合主義もたくさん出でます 矛盾とか誤字脱字が含まれる恐れがあります 以上を踏まえた上で閲覧してください

オリジナルスタンド募集を感想欄ではなく活動報告の方にまとめる  
ことにしました よろしくお願いします

それは一人の転生者から始まつた（前書き）

一番煎じもあるだらう

うはここつめえとか思うだらう

話についていけませんとも思つだらう

…………そりや深く考えず書いたもの

他の作品があるのに節操ないサノブの本作品、飽きたら回れ右すればいいわ

といつあえずお試しで短く数話作つただけ

期待しないで読んでいいでね！

それは一人の転生者から始まった

辺りが真っ白な円卓のような空間

なものもその一色しか許さない無機質な空間に突如3人の

否、3柱の存在が現れる

神々しさを滲ませた淡い光にうつすらと包まれていた彼らの表情は  
優れなかつた

それはある一つ問題が原因である

「これからどうしましよう…」

「どうしようもなにもやるしかあるまい…」

「そもそもあの新入り……事の重大性がわかっているのでしょうか

？」

それぞれ頭を痛める問題

それは新たに彼らの同胞に加わった後のことだ

あるときにその若き同胞は漏れだした魂に力を与えて転生させた

かつてある者が送り出した魂が突然変異を起こした混沌とした世界をあるべき道筋にたどり崩壊を食い止めた話がある

それを知る若き同胞はそれを「」の娯楽にせんとし、一つの世界に魂を送り出したのである

だが、若き同胞は魂に過剰なまでに力を注いだせいで魂の次元を凌駕してしまったのだ

その魂は世界の修正をはね除けてしまい、世界の次元が無理矢理引き上げられていた

これは下手をすれば数多の命が無差別に神に至りうつとしていること

バランスが崩れかねない愚行を犯した若き同胞は再び格を下げられたが問題の解決法に今は彼らは悩まされているのである

そんな彼らのもとに新たに1柱：

老いが見えるが他の3柱よりも存在感が溢れていた

「ふむ…よくあつまつてくれたのう…先にこの問題の解決法を述べておござい？」

「ま、待ってください！解決法があるのでですか！？」

「簡単じゃぞ？破滅と秩序と楔を持たせた魂を送るんじゃよ

「……は？え、ちょっとそんな魂を簡単に送つていいわけがないで  
しゃつーっ？」

「まあ落ち着け……俺達にその詳しい説明を」

「つむ、楔は魂がそこにあるだけじゃ……これ以上の次元が  
高くならぬように引き止める為のをな……秩序は不安定な世界をある  
べき形に落ち着かせ、元の平行世界に同調させる」

「となると……破滅は？」

「問題の魂の築き上げたものを壊すんじゃよ混沌を正すためには相  
手の食指を潰さねばならんからな」

「これでは以前のアレに匹敵する大事件ですね……とにかく故郷を  
を？」

「他の連中が忙しいのと……実はわし慌てて既に魂を送つちゃつ  
てあるんじゃ」

「 「 「 .....」」

「 .....まあ、そのなんじや？ただわしの好み丸だしに世界を同調させてしまふたし...魂がその力を生かすためにも仕方ないんじや」

（絶対に嘘だ）

「とにかく送つたのはいいんじやが、1人だけで押さえられる相手じゃないのは明白。わしの好みを知るお主らの力を借りたいのじやなに、お主らもそれぞれ力を与えてやつてくれればいいんじやよ」

「わかりました...ただ相手のポテンシャルは高過ぎて魂一つでは無理でしょ？？」

「我々は複数送る」とこしますよ」

「まあ敵対して互いに潰し合つかもせんが魂が磨かれればそれだけ標的を倒せるかも知れませんしね」

「よかろう...では、始めるところどうかの？」

「そしてまた静寂だけを残した白になる

分を超えた魂が世界を歪めてしまうのか

それとも修正力に代わり、世界を正すのか

彼らは魂がいかなる思惑を巡らせているのか把握せぬままに想いを託してしまう

それが行き着く結末は…

それは一人の転生者から始まつた（後書き）

オリキャラたつぱり出ます

オリジナルスタンダードたつぱり出ます

原作スタンダードはたぶん出ます

とりあえず今あるだけ投稿して続きが読みたい方がいるなら続くかもしれません

話は短くしあやうので長い話はきっと来ないかも

ああ、第5部読みたくなつてきた

藤城譲一は静かに暮らしたい（前書き）

やつといひの作品に上義はないかもしない

かつての俺はそりやすさまじいほど救いようのないクソガキだった両親を早くに亡くしていた俺は寂しさの反動というか、恥ずかしいくらい被害妄想の激しい中、一病まつしぐらに暴れるガキになった

気づけばお陰で札付きの不良になつて恐れられた

警察だれつとなんだれつと俺を止める「ことなんてできやしねえ

そう考えていた

だから俺は最悪の事態を招いたのだ

あんまりにも暴れすぎたらしくぶちギレた組長の部下が集団で俺をフクロにした

で、俺は限度つてものを知らんバカだつたせいで反撃

結果一人を誤つて殺害

お仲間は皆ぶちギレてさりに凶器持ち出す始末

ただの不良が勝てるわけなくあえなく俺はリアルにコンクリ詰めにされてどつかの湾に沈められた

とまあ俺は死んだはずなんだがなんかやたらジョジョ好きの神らしこじいさんによつて無理矢理転生させられた

正直嘘みたいな話だが、今度は両親という厳しくも暖かい存在に大切に育てられてるんだから嘘じやあない

だからこそ俺は決めたのだ

前世のようなアホみたいな生き方ではなく静かに、穏やかに生きるのだと

ごくごく普通の人生だ

神のじいさんがスタンドあげるとカリカリカルなんたらだかの世界に送るだとかそんなことはどうだつてい

喧嘩ばかりやつたりスタンドなんて貰つて強くなつたつて疲れるだけ

そう、この何気ない平和がどれだけ素晴らしいか俺は理解したッ！

小心者の如くひ弱に腰を低くツーへいこらするツー！

俺の琴線に触れない限り極力争い事はバスする！

あまり目立つことなく、他人を盛りたてて俺は影でこそそちまちますのだッ！

転生して9年、聖なんたら小学校の3年生になつた俺は今日も地味に静かに過ごす

学校の名前? んなものは覚えんッ!

クラスが変わるということ... ますすべきはよりよい友人作りだらうこれに関してはクリアだ

去年の友人がそのまま居たのでいつも通りの振る舞いでいいだらうただこのクラス、一つ懸念事項がある

「なあ譲ーい...俺、正直今年外れだと思つんだ」

「まあ... そうですよね...」

友人のおつ君とヒソヒソ話すのはある人物の話題

視線の先の席にはキザつたらしく座つて いる少年が

窓際の方に無駄に背の高い、小学生にしてはおつかない雰囲気を出  
す少年

二人とも正直言つて俺は仲良くなつと思えん

キザな方は富出 廉

なんかやたら優秀で一部の女の子に「執心な変態だ

天才というのかテストは満点、運動神経も高く、ルックスも良し、カリスマ？みたいなのがあるのかある程度の人望を持つ

態度というかいろいろと気持ち悪いというか俺は嫌いだ

他者を何処か見下したような印象が強いし、一部の女子に嫌がられてもへこたれない変態っぷり

というかストーカー

もう一人は矢口 優

精悍さと幼さの混じつた変なやつだが芯はしつかりしてる

不良予備軍みてえな奴だが困つてる人とかを黙つて助けたりするお陰か地味に回りから好感を得ていて

俺からしちゃあ近寄りがたい雰囲気もあるがまあ一番の原因是単純に仲が悪いような感じなんだよな…

去年一回喧嘩しあつて謝りなつたが、あれから何回かしてあつたから、  
の罰だつてか？

男子の騒ぎの種は奴らだが女子を見れば学校内で有名な美少女が揃つていて、きっと厄介事に困らないな

と、見てる先でこきなつた矢口の喧嘩が勃発

だが矢口が逃走、追いかける富出

「はあ……最悪です……」

俺はそのまま静かに生活出来んのか？

先行き真つ暗だ畜生

いや、小学生だから仕方ない……のか？ガキは元気に走り回れ

俺は授業が始まるまで寝ることにするのだった

「おー……おー讓——！」

「…ん？」

なんか延々と体を揺さぶられて困が覚める

いつたいなんなんだと思つたらそこには先生が

回つの状況を見るともう授業が始まつていた

居眠りしていた俺に注目の視線が突き刺さり肩身が狭くなるビリビリ  
かサーと血の気が引いてしまつ

俺はやつてしまつた…最悪の形で立つてしまつたのだ

お決まりのよつて席を立たせて小学生にしては難しい問題をわざと  
解かせようとする先生

わざと間違えればクラス中から笑いが来るし、正解を言えればなんか  
嫌な予感がするのだ

だが笑われるのは嫌なので俺は正解を言つた言つたやつた

で、やつぱり一部の視線が強烈に痛くなるわけで

畜生ッやぶ蛇かッ！？

くそつたれめ…気分が少し悪くなりながら俺は席についた

…ちょっと先生が悔しがつてゐるのが見えたときはいい気味だったが

「…す、ご、い、ね、藤城君」

「ん？ああ、あれくらいなら僕じゃなくとも解けますよ…バーニングスさんとか」

隣にいる円村すずか女史にヒソヒソ話しかけられたので俺もヒソヒソ返す

円村とはよく話すというか俺の数少ない女友達だ

ただ話すたびに富出からすげえ殺氣のこもった視線を叩きつけられて不愉快だ…

俺が何をした？

まあ今日もなんやかんやギリギリ平穏な日常を過ごすのだった…

「と、綺麗に終われたらす、」い楽だったのだが僕の日常はあつさりぶつ壊されるのでしたまる

「あはは…」

「「「「？」」「」」

親から許可を貰つて泊まりに来た友人の家

とりあえず誕生日らしかつたので一泊して行ってあげることにしたのだ

友人の名はハ神はやて

出会いに關しちゃ、図書館で本をとつてあげたのが切欠でそこから  
グダグダ仲良くなつた

とこうか仲良くなりすぎたとこうか、はやての前ではあまり猫を被  
らないぐらいか

騒ぎまくつてゲームしてアホみたいにへらへら笑つて寝たはずだつ  
たが突然家のなかに違和感を感じてはやての部屋に直行、気絶した  
はやてと4人の男女がおろおろしてた…

まさか、こんなところで厄介事に出くわすとは…

車椅子の少女、ハ神はやてと友人だったスタンド使いの転生者藤城  
譲一

俺の平穏は約束されないらしい

くそつたれめ

藤城譲一は静かに暮らしたい（後書き）

どうでもいいがシグナムあたりが好きだ

ポニー・テール萌え

おひおろあたふたしてくれればさうにいい、サノブ的に

もしかするとこの作品の吐き氣を催す邪悪はサノブ本人かもしれない

矢口亮は書く（前書き）

「このヒロインはどうなつてしまひのだらつ

## 矢口亮は考える

俺の名前は矢口亮

運悪く車に跳ねられた筈だったが何だか小柄な男性に妙な頼まれごとをされて転生者だ

世界を守るというよりバカが招いた尻拭いの代行をさせられているような感覚があるにしてもだ

人間全員が神になるとか恐ろしい事態を防ぎたいのは同意する

別にいいんじゃないのか?と思つていたが

「全知全能な外道が溢れるかもしねりいよ?」

とのことで、転生を決意した

それに何も戦わずともただ生きているだけで充分らしい

それでもこの手に入れた力がある以上戦いからは逃れそうにないがな

他にも転生者がいるらしいがよつぽびのことが無きや初見は分から  
ない

漠然と俺達と同じ力があるのは分かるのだが己の欲望むき出しで襲  
いかかるアホもいるから仲間を簡単に増やせないし…

何より俺は少し人見知りしやすいし、そんな性格が祟つて藤城との  
喧嘩した後の和解が出来ないまま過ごしてきた

そんな中、俺に人生の転機がやつてくる

高町なのはとフェイト・テスタークロッサ

この一人の邂逅だ

確かこれはリリカルなのはの世界…ならばこの物語に問題の相手が  
現れるのでは？

そして読みはある

原作はあまり知らないがいくらなんでも奴は存在していなかつた

富出庵

高町なのはに馴れ馴れしく関わろうとしたのを見たときいつものバ  
力な転生者かと思われたが強さの次元が違うこととスタンンドが無い  
ことに気付いた

一度目の生の為にめちゃくちゃにする奴を倒さなければならぬ

だからもう一人の魔法少女、フェイト・テスター・ロッサと協力したのだ

もしものためにと神より貰つたデバイスを駆使して何度も挑んだ

が、結果は全てが惨敗

後で友人になつたケロノには何度も命を助けて貰つたな……

加えて、原作を搔き回さないとするたたのバカやバカ富出かなのはや  
フェイトに手を出そうとする

## こいつは変態だ

どもなにほどの

原作はなんとか俺の知る流れに進んだ

たた一一の誤算が富出の力た

## フレシアが生存したのた

病を治して評価をあげようという魂胆が丸見えで回りの反応は大したことがなかつたのは唯一の救いだろう

しかし、ますます富出を倒せるかわからなくなつてきたな……

「……」は勇気を出して他のスタンド使いを引き込むしかないな……

転生者全ては富出を倒す力が宿っている……その形としてのスタンドだろう

そしてここには富出を倒す鍵になる……何故ならスタンドはスタンド使い以外には見えないという特性がある

一度俺のスタンドを使つたが奴は気付かなかつた

奴にも見えるのではないかと思ったがそれは以前の戦いで分かつて  
いる

問題はいかに攻撃を通すかだ

正直、吸血鬼並の頑丈さと大量に張られたバリアが生半可な攻撃を  
打ち消してしまつ

俺のスタンドはダメージを『えるに至つていな

「ままならないものだな……」

「?どうしたの?」

「なんでもねえよ」

「む……なによ!その態度、人が心配してるので!」

「……わらい」

「やつやつて素直に謝ればいいのよ 最近、しかめつ面ばつかで何かあつたか心配になるじゃない」

「しかめつ面つて…うん、大丈夫だからアリサ ありがとう」

……アリサが毎回突っかかると疲れるから嫌なんだよな  
アリサによつて疲れるんじゃない

心配されてるのは別にいいんだが、必ずバカも突っかかるときやが  
るから

「おい矢口！-！」

「ああ？」

正義感（笑）に触れたのか憤慨しながら「ちへんべるのバカ富出

ドン引きするアリサ

嗚呼、頭がいたくなる

「俺のアリサに色田使いやがつて！死ねッ！」

「ちゅつ！？」

正義感（笑）ですらないしなんなのこいつも

魔力のこもった腕を振り上げてくるバカを見てギョシとする

お前、こりでスプラッタ起こす気か！？

回つの皿とかちゃんと専用クソロロウ！

机を蹴飛ばして富出の出鼻を挫いたあと、アリサとすれ違う瞬間に  
小声で話す

「ちよひへり逃げてへる

「はあ……頑張んなさこよ」

「待てホシ一矢口イツ！」

やれやれ、世界とか秩序とか歪みとか抜きで個人的にぶつとばして  
やりたいよ

今日もいつものように富出を倒す為の計画を練りながら俺は逃げる  
のだった

そつこえぱフヨイアト達はどうしてこるのだろつか？

ビデオメールをこつそり俺のデバイスに送つてくれているが最近は  
プレシアに甘えてる日々のようだ

今まで出来なかつたことが出来てはしゃがれやうだらう

クロノが根回ししたお陰で引き離されることが無くなつたのもあるからか?

さて、やつやとこの馬鹿を撒いて俺は俺のすべきことをせねばな  
しかし気持ち悪いくらいズルい身体能力だな

か？ それと誰か馬鹿なスタンド使いがちやっかり殺してくれないだろ？

まあ皆素通りして俺ばかりに挑んでくるスタンド使いばかりでそんなことあり得ないか

次は確か闇の書に関する話だつたか？

出来れば始まるまでに奴を仕留められるといな

その為にはある程度暗躍するしかないな

たとえフェイトに嫌われることになつても

矢口亮は考へる（後書き）

譲一、亮のスタンドは決定します

両者ともオリジナルスタンドです

後は敵キャラにオリジナルスタンドや原作スタンドをあてがつてやる予定です

余談だけはやても好きだ

シグナムと一緒にいられる彼女に嫉妬もするがそれでも好きだ

たぬきかわいい

たとえなのはとおはなしすることになつたとしても譲れないのです

チンクもちつちゅにお姉さんとかもいine

シグナム、はやて、チンク

節操のないサノブは小指を角にぶつけて死ぬに違いない

こんなカミングアウトしてるのは仮面ライダーのゲームのデータを  
誤つて消しちゃったからなんだ…くそがつ

富出庵ッ！俺こそがこの物語の主人公ッ！（前書き）

人は他人の物語の主人公にはなれない

富出庵ツー俺じやがここの物語の主人公ツー！

やあ諸君

俺の名前は富出庵！

この物語の主人公さつ！

いや、ちゃんと言えば転生者のオリ主<sup>イレギュラー</sup>か

かつて惰性で生きていた俺は家でいきなり強盗に襲われて死んでしまったはずなんだ

だが、神を名乗る人物にかつて神々の間に流れる話のような伝説を打ち立てたいといきなり言われて転生しないかと言われた

しかも出来る範囲でならいろいろと力を授けてくれるそうだ

これはよく一次創作のテンプレとこりやつじやないかツー！？

だとしたらこの条件を飲み込まないわけがないじゃないか

転生先も自由に選べる…ならば俺はかつてないほどの幸せを手に入れるのだ

転生先は魔法少女リリカルなのは…

身体能力、魔力を最強クラスにして動体視力も人間離れしたものに

ついでに黄金律、幸運をMAXにしてやる

少し俺の隠し札としての能力を2つ加えて、最後に神様謹製、俺専用のデバイスも作つて貰つた

さあ、俺の物語ハーレムが始まるッ！

と、思ったが最初は四苦八苦した

仲良し3人娘のアリサに蹴飛ばされたり、すずかに逃げられるし…

なのはと出会い、俺も協力するぜっ！みたいになのはの頭を撫でたらまづユーノにバインドされ転がされた

で、ユーノのせいで振られた俺はフェイトと仲良くしようとした

こつそり確保したジュエルシードを手土産に行けば行けるッ！

なのにいきなり戦闘とか

あの、フェイトさんすごい強いんだけど

このチートボディがなければ5回くらい死んでた  
といつかアルフが本氣で殺しにかかってきてマジビビったなにあれ  
こわい

結局、糸余曲折あってなのはサイドについたのだ

俺に足りない戦闘能力をなんとか養いながらその時が来た

……なんとフェイトに悪い虫がついたようだ

フェイト、アルフと共に居ない筈の紅い少年がいた

剣のような斧のような槍のデバイスを携えているフルフェイスメントの少年が

俺と同じイレギュラー…まさか奴もハーレムを狙う転生者?

フェイトやアルフが警戒しないのはまさか奴がなにか洗脳まがいのことでもしたのだろう

だとしたらなんて外道なんだ

俺が彼女を守らなくてはならない

生憎と奴の魔力は俺には及ばない

いろいろと戦闘経験をつんだ俺の敵では無いわ

お陰で圧勝した

が、依然として正体は分からず、時間稼ぎになのはフェイトと弓を離されたりなのは達を無視して俺に挑んでくる

少しずつ強くなっているが俺の敵ではない

そしてどうも奴は俺を殺そうとしていることに気が付いた  
何故殺されねばならん？俺は怒りに任せて痛め付けていく  
だが奴は諦めずに挑んでくる

「貴様あツーやはりハーレムの邪魔になる俺を殺す気かツー！」

「ハーレム？ そんなもの知るか」

槍を叩きつけてきたので負けじといちもデバイスを振り上げる  
つばせり合いになり腹を蹴り飛ばして吹き飛ばす

そこに大剣と銃が合わさつたデバイス、カオスキャリバーで追い討ちをしようとしたときだ

何か黄色い影が紅を連れ去り、攻撃を避けられた

「大丈夫！？」

「…肋骨を折られたがまだ…」

「ダメだよっ！無理に動いたら骨が内臓を傷付ける…だから一度退  
こう？」

「……だが、ジュエルシードは」

「それならフュイトが手に入れたよ…こんな化け物に構つてないで  
早く行くよ…」

アルフも庇うよつに合流すると少年を労るよつに転移して逃げられた

馬鹿な…フュイト達に受け入れられていのだと？

いや、きっと何かあるはずだ

俺の時のように異物は排除されるに違いない

やはり洗脳か…許さない…

俺はいづれ奴を殺して見せる

そのあとも、ぶつかり合って、やがてクロノと田舎つ

しかしまあ紅い少年がフォイトを逃がしたのはいいがあつさり奴の  
交渉に頷きやがつて

紅い少年を殺すチャンスを失い、奴は投降

武装は解除したようだがメットは外さないらしい

ふざけんのかあいは

「…君も、殺傷設定でさつきから彼を殺そつとするな」

クロノ…お前覚えてるよ？

いつかお前の未来の嫁さん寝とつてやる

そしてだいたい原作通りの流れに進んだ

馬鹿な…俺達イレギュラーがいるのこりんな簡単に進むのか

……「…そり確保したジュエルシードの時は俺に対する抑止力が働いたくせに彼女らが行くと原作の強さか

そして最終決戦プレシア戦…といきたいが

通信の時は原作通りにならずになんかすんじこ穏やかなんだけど…?

フェイトはそれでも心が壊れかけたが、プレシアの一言に再び立ち上がつた

「彼に伝えて…私は行くと…」

「ダメっ！行かせない！」

え？なにこの展開…

…あいつの仕業か！

崩れかけたフェイトを慰めてポイントを稼いだとしたのに台無じにされた…

待てよ？まさか奴はこれを見越してプレシアを改心させたか！？

どこまで邪魔をする気なんだ奴は！？

いや、まだ俺のある力を使えば…

俺はフェイト達に続いて時の庭園に向かつた

プレシアは確か病でそう長くはない…

元々はなのはが怪我で倒れる時のために得たがこんなときにも使えるとはな

「プレシア…娘を置いていくなぞ俺は許さん！」

「な、なんなのあなたは…」

虚数空間に落ちかけたアリシアとプレシアを引き上げて無事な足場に逃げる

そこで俺は俺専用の回復魔法を使つ

「アヴァロン！」

名は某騎士王の鞘からとつた！

黄金の輝きがプレシアを包み体を全て治して一度アースラに帰還した

アヴァロンは俺の魔力を大量に使う奇跡だ

魔法で対象の生命力と免疫力を上げて回復させる

原理は知らんがそう言う効果だ

対象は完全に回復する…死んだものは無理だが木つ端微塵になる手前だろうとこの奇跡の前には無意味よ

魔力をじつそり使ってしまったせいで眠つてしまつのが欠点だがな

…………その欠点のせいで結局、最後の別れのイベントに参加できなかつた…畜生

聞いた話によると紅い少年にフェイトが抱きついたとかなんとか

…………次に出会つたら奴はぶつ殺してやる

全ては俺のハーレムのためにな！

さあ今日はアリサにフラグを立てようかな？

次の闇の書の前に出来るだけフラグをたててハーレム計画を推進することにした

クラスメイトの矢口がなんか紅い少年に被つて見えて思わず魔力込

めてぶつ呂きそつになつたのは余談だ

## 富田庵ツー俺の物語の主人公ツー（後書き）

ここには出来れば愉快書かせたい

ここには馬鹿にしてくつてくれ強いけど

まだ悪に染まりきっていないけれど、黒く染まっていく予定

ただどこかギャグキャラ感がするんだ…なんでだろ？

ここへの性格上譲一、亮と相容れないと思います

独善的な思考があるので自らが悪と眞づいてません

ブツチ神父タイプかもしません

あまり役に立たない人物紹介

静かに生きたい転生者

藤城譲一  
ふじしろじょういち

スタンド使いであるが他人にその本体を見せたことはない

やんちやばかりしてた日々と決別して静かに生きようとする

小学生ボディでも身体能力が高く、前世の喧嘩の経験があるため本体 자체が強い

デバイスとか無いから魔法に関しては素人、原作知識も無い

普段は柔軟な笑顔を浮かべて優しいしゃべり方をしているが、実際はチンピラ

作者の脳内イメージはブレイブルーのハザマに近い

若干吉良吉影っぽい

名前は城、譲でジョジョとしてるが別にジョースターの血統じゃない

でもこの作品の主人公

考え方続ける転生者

矢口亮  
やぐちあきら

背が高く精悍さと幼さの混じった感じがするスタンド使い

他に大槍型デバイス、ブルーブレイズを所持

紅いのにブルーブレイズなんていうのは青い炎というより地獄つて意味だから

槍は半ばからばっくり開いて相手を挟み込みバラバラに出来るといふえげつない隠し機構がある

なんかフェイトとフラグをたててているのは薄々感じて居るもののが目的の為なら傷付けることさえする

きっとなのはとフェイトによつておはなしするであろう

むしろするなこいつは

合掌

弱くないんだけど富出がチートだから勝てない

スタンドの可能性に賭けるしかないね

原作知識を少し持っているが、A・Sの次があることは知らない

この作品一の苦労人になるかもしれない

名前はノリで決めた

主人公その2

主人公であろうとする転生者

とみでいおり  
富出庵

天才だけどバカ

スタンドは居ないが人間離れした身体能力、魔力チート、視力最高  
に黄金律、幸運MAXの変態

勘違いとかどこか考えが抜けてたり、思慮が足りなかつたりと天才  
なのか疑わしいのだが天才なんだ許してやってくれ

まだ小学生のなのはに欲情してゐかもしれない危険人物

いつか真っ黒なシスコン兄貴に切り捨てられる気がする

大剣型デバイス、カオスキャリバーを所持

剣の中心に砲身がつけられている

デカイので盾にしたりすることは可能

本人は大量のバリアと魔力が壁になつており基本的に盾にすること  
なんてスター・ライトブレイカーぐらいしかあり得ない

原作知識を持つてているため大分危険

ラスボスになる…かもしね

名前は出、庵のでいおからディオと読めなくもないというかなんと  
いつか

既に高町なのはという主人公が物語に据えられているのに物語の主  
人公になると本氣で信じている

見るに耐えないだろうが、とりあえず彼は生暖かい目で見舞つてや  
ればいい

これにて簡単なプロローグは終わりです

静かに生きたい譲一

強者の抹殺を企む亮

欲望のまま力を振るう庵

転生者の戦いは彼らを軸に動きます

続きがあれば、ですが…

で、気付いた方はいるかもしませんが

庵が転生者した後に何故、他の転生者が物語に滑り込めていく?  
リリカルなのは

とこう謎現象があります

話に絡まないのでここで説明します

本来は庵がただ述る話を神々が巻き戻し、庵が生まれるのに合わせたり、庵より1、2年早く生まれさせています

スタンド使い達はバイツア・ダストのよつに時を吹つ飛ばされて生まれているのです

転生者達はその事実に気付いてないので庵が生まれて間もないうちに殺すことが出来ないのです

とこうか神々よ、出来ればもつと前に生まれさせろよ

が、庵によつて歪んだ世界は転生者達に修正力として牙を向き、結局原作の年代を生かされる羽田になります

そんなことより俺達も原作介入だうへへ

そういうた転生者は矢口亮がことじとへ撃退します

よつて転生者達の間では亮つて抑止力じやね？なんて噂も

強さでは上位にいるので転生者達は以前よりは喧嘩を売つてないのが現状

そんなことを露知らず庵は今日もなのはやアリサ、すずかの尻を追い掛けて

譲一はおつ西一江、おへやすす君と子供、ひじく遊ぶ…

闇の書はそんな日々を変える

そんな感じなんですかこれ続き期待する人いるのか?

## 吸難の始まり（前書き）

藤城譲一編?・スター・

ラッシュの掛け声じつよひへ.

## 受難の始まり

SIDE 謙一

突如、はやての部屋に現れた4人の男女

部屋に飛び込んできたらピンクのボニテねえちゃんに斬られそうになつたり、幼女にハンマーでぶん殴られそうになつたり、はやてが氣絶したり部屋の中は大混乱になつた

なんとか事態を治めて居間に移動して4人を見る

その時ある一点に俺は視線が止まつた

「……いぬみみ？」

「……狼だ」

いや、だつてさ、ガタイのいいにいちゃんの頭に獣の耳があるんだぞ？

触つてみたが、なにか危機感を感じやがつたかさりげなく距離を

とられた

「なに「アホな」としようとしたの? まずは話聞かんとな……触るのは後や」

はやてには俺の行動がばれていたらしく

そしてけもみみ男はさりに距離を置かれた

はやてが質問していくとなにやら魔導書やらなんやら書つたが俺にはそんなもの知らん

わかつたのはこいつらはその魔導書なんでものから生まれた守護騎士、ヴォルケンリッターとこいつらしい

こんな異常な現象を見ていてふと考えを巡らす

……確かに俺が転生した先つてなんかの物語の中なんだよな?

まさか俺は結構大事な部分に頭突っ込んでるんじゃないよな?

だとしたら俺の平穏な生活に支障が出てしまつ……ビリしたもんかな……

「どうひーー。」

「ぐはつーー。みぞおちがああ……」

いきなりはやての鋭いボディーブローが突き刺さる

畜生、なかなかいいパンチ持ってるんだじゃねえかはやて

顔をあげると何故か私、怒りますよ?といつ表情が

「え?と…なんかしたか俺?」

「せつときからぶつくを抱えてばっかでウチの話聞いとひりんもん!」

「わ、悪い、すまんかった」

「譲一君、せつときも言つたんやけど新しい家族の為に明日買いたい  
こつな?」

新しい家族?ああ、ヴォルケンリッターね

確かにせつとき家族に迎え入れるって言つてたしな

はやてには両親を早くに亡くしたから彼女らの存在が嬉しかったんだな

ん?」

「あの、はやてさん?その言い方だと僕まで行く」とになつてしま  
ん?」

「せうやよ？なにボケとるん？あ、譲一君の御両親には暫く借りるつて連絡したんやけど〇〇へ貰つたで？」

おこまでお袋に親父！

いつたい何してるんだあの一人はあツ！？

携帯を開いて文句の電話をかけようとしたら新着メール一件と画面に映つていた

差出人は藤城譲治

「親父…ま、まさかな…」

固まつた俺を見てはやてが後ろから覗きこんでいることすら気がしない

恐る恐る読んでみる

『譲一、パパとママはちょっと旅行に行つてくるぜ！

たぶん来年辺りにや帰つてくるからお土産とかあつたらメールくれよ

あとはやじりやことは末長く幸せになこのコア充野郎

追伸

孫は出来たら3人くらいほしい

『

「あのくそスケベ親父がああツー？ド畜生ツー？なんでいきなり旅行なんだ！？訳がわからねえ！つうか孫つてなに！？小学生になに期待してんのだ！？」

有り得ねえ、いつもながら厳しく優しい反面、頭に虫がわいてんじやねえかと何度も思つたが確信した

こいつ、俺が平穏な生活を望んでいることを知つてやつてんのだ  
確信犯、俺の日常を脅かす敵はもつと身近にいやがつた  
…

追伸とかマジいらねえし

はやてが俺を借りるということとは彼女の家に居候しきつてことか？

そもそも旅行とか馬鹿だろあの野郎め…

いろいろと憤慨してこむときて後ろにいたはやてに袖をくっく引  
つ張られる

「…譲一君…

不束ものですがよろしくお願ひします

「はやてエエエエーーッ！？なにこいつてるんだお前はアアッ！？」

顔を赤らめ、上田遣いで言つ破壊力は高かつた…

じやなくてだ！

俺は貰わないからな！？

百面相を見せる俺

顔を赤くするはやて

俺の叫びにビッククリするヴォルケンロッター達

場はせつかく治めた筈の混沌に再び包まれていたのだった

翌日、早朝に血便に帰るとマジで親がいないことメールの内容が本当なのだと理解してしまつ

とにかく財布と俺宛に残された小遣い、学校の道具その他もひきを纏める

旅行に行かれたのなら殴ることも出来ないので俺は大人しくはやての家に厄介になることとした

「はやて、これからはあんなことを言つてはいけませんよっそもそも僕らそんな年齢じゃありませんからね」

「うーーー譲ー君が説教しとるー譲ー君の癖に

「とにかくまず最初は服ですね…」

ヴォルケンリッターをいつまでもあのインナーみたいな姿で生活させるような鬼畜じやない

ましてやはやてがデザインしたあの服のままで生活できんわ

一先ず、はやての両親の服が残っていたのでボニーテネえちゃん、シグナム、金髪のシャマルはそれで事足りた

ハンマー幼女ははやてのお古を着せている

残るはザフィーラなんだが姿が見当たらない

皆で今から着るための服とかを買いにいくの去哪儿に行つた?

「ああ、ザフイー『ア』なら

「呼んだか?」

「つおおおお～しゃべる狼だ…」

「…守護獸だ」

ソファーの影から青い毛並みの大きな狼が現れた

しかし、ホントに狼なんだな

毛並みフサフサ撫で心地いいなおい

「ザフイーラは普段はこの姿でこいつて言つてへくるんや

「ふむ、はやてのお父さんの服とかあるから問題ないのですが…」

……黒い話をするとその分お金使わなくて済むんだよねえ

まあ、ザフイーラはそれをわかつて言つてそつな氣もする

でもひょっとかわいそだだからこいつそつ買っておいてやるか

「それじゃあ、買こ物にいきまですか…はやで、ヴィーター、ちやんとハンカチは持ちましたか? ティッシュは?」

「持つてるでー。」

「おこー! 子供扱いすんな!」

「向こうに行つたとき余つはしやがないでくださいね? 今からこへ場所は広こので迷子になつたら探すのが大変ですから」

「譲ー君、まるで保護者みたいですね」

「……やつだな」

シャマルの葉の受けたえに変な間があつたな

「シグナム? どうかしましましたか?」

「こや、なんでもなー」

??.変なの

しかし、昨日せべりなるかと迷つたがなんていとなかつたな  
が、何せともあれせびつせびと重い物をすませりまつといつが

はやてが氣絶したときに担当医の人には遠い親戚とか大分無理して話してしまったがなんとか押し通した

変に騒がれるような真似をしたら最後、本当に平穀が終わつてしまつはやてが家族として迎え入れるなりそのまま生活してりやなんの問題はないんだから

はやての口癖が明るくなつた

ただそれだけのことだ

シャマルがはやての車椅子を押して、ヴィータと仲良くなつてゐる  
うん、はやてめいに顔で笑う。 うねえか

暫くははやての家に厄介になるんだから彼女の笑顔を絶ちたくない  
うてしないこと

そんなことを考えながら歩いているとシグナムが歩幅を小さくしながら俺の横にならんだ

「どうしましたシグナム? はやて達と話をしないのですか?」

「今は、ヴィータとシャマルが話しているね…それにしておのしゃべり方に違和感があるぞ藤城」

「まあ、意識してこんな柄じゃないしゃべり方しますからねえ…  
他人にはさらに猫被りますよ。」

「疲れないのか？もつと自然なしゃべり方をすればいいだろ？」

「僕のは他人に喧嘩を売るような汚いしゃべり方なんで、無駄な争いを起こさないようにしてるんですよ。学校じゃ素のしゃべり方で因縁つけられましたし」

「なんだか大変だな…余りにも違和感がありすぎて気になつたのだ」

「自覚しますよ、僕らしくないしゃべり方の違和感ははやてには素の自分を明かしたあとに笑われましたから」

あれは酷かつた

指差して大爆笑とか失礼にも程があるだろ？がよ普通

今でも内心笑つてそうだよなほんとに

「藤城…なにかお前のあとをつけてるような奴がいるぞ？」

昔話に和氣あいあいとしてたらシグナムがぼそりと呟く

ちりりと近くのショーケースに写る街並みをみて確認する

一人の少年が何かこそそししながらついてきているのが見えた

また、か…

「シグナム、彼は僕の友人です 先にはやてと行つていてください」

「友人なのか？」

「きつと見かけた僕をビックリさせたいのでしょう 大丈夫ですよ 今からいく場所は僕もわかつてますから… さ、早くいかないとはやて達とはぐれてしましますよ?」

「……そつか、では、な」

シグナムが先に行くのを見て俺は横の路地に向かつて歩き出す  
そして俺は走り出した

「ついてきているな? そうだ、こ…くるんだ 思う存分振るえ  
る場所に行つてやるからよオ」

走つて走つて出た場所は少し開けた空き地

回りに人の気配は無いな…ならここいらでいいか

足を止めて後ろを振り向いた先には

視界を覆つように田の前をドライブ缶が高速で飛び込んでいた

SIDE out

こないだ野良猫見付けて転がして撫で回してやつつけたら靴で爪研がれそうになつた

貴様、  
反撃があああああ！――！――！

プロローグは短くしようとああなつて

本編だと普通に3000文字を越えるのか

欲張つて5000文字以上をいつも書けるようになりたいです

中身がスカスカだつたら意味ないんですけどね……

次回にはスタンダードバトルをば

この作品もしかしたら間違つてザフィーラの一番たくさんでるかも  
しません

そのうち主人公の座をザフィーラにとられたりして

アルフとザフィーラの子犬フォームを転がしたい

オリジナルスタンドとか敵転生者とかただの日常で普通に出会う転生者とか募集します

敗北、または敗死の様子も考えてあるなら書いてくれるといいです

どうでもいいけどメタリカ使ってみたい

風景と同化するとか覗きに最適じゃないかッ！

あ、なんだかエアロスマッシュがこっちに飛んで……

## 傷だらけの魔王？（前書き）

スタンダードバトルって書いてみてわかつたけどすげい派手にはいかないな

ところがこれはスタンダードバトルじゃないな  
予告しておいて申し訳ございません

前後編に分かれるよ！

## 傷だらけの青玉？

「どうだ？ やつたか？」

空き地に少年が一人

土煙の上がる場所を見守る

少年は転生者だ

神々に力を与えられ遣わされた使徒

だが、彼は己に課せられた使命など生まれたときから放棄していた

その身にある黒い想いを内包した彼は物語に介入しようと動き出した

しかし、彼はある一人の転生者と戦いになり、破れ、目が覚めたときには真っ白な天井を最初に視界に入れていた

介入することはできずに終わつた

第一の生を受けて、使命を捨てて、想いを叶えるべく奔走した彼はなにも成し得なかつた

「くそつ！何が失せろ外道だ！許さねえ……あいつは許さねえ！」

彼は考える

己を打ちのめした相手を倒すための手段を得るために

そこで彼は気付いたのだ

「そうだ……八神はやて……守護騎士達に任せれば奴を、奴を確実に始末出来るッ！クククッ！よし、早速行動開始だ」

だが、彼は見てしまうのだ

街の中を仲良く歩くハ神はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル

藤城譲一を

「なんだ、なんだ？誰だあいつは？いや、あいつ、確かのは達のクラスにいた気がする……あんな地味な奴がなんで一緒にいる？……まで、なんであんなに親しく歩いていやがる？あいつはまさか……」

シグナムが先に行き、藤城譲一は横に歩いて行つた

どうする？ただのモブキャラかもしない…あいつは帰るのかもしれない

だが彼の中の不安が譲一を追い掛けると命じた

追えば彼の存在に気付いていたのか、譲一は駆け出す

やはり奴は転生者だ！

しかもはやて達に近付いたのはやはり欲望のままに生きようとした  
からに違いない

結論付けた彼は立ち止まつた譲一に殺意を沸かせた

（先手必勝！死ねッ！）

「フライングジャズッ！」

少年の傍らより現れた羽毛を生やした小さな人型が近くのドラム缶  
に触れると凄まじい勢いで譲一に目掛けて飛んでいく

当たる直前にこちらを振り向いていたが対処するには遅すぎた、  
逃れようがないだろう

砂塵をあげるほどの轟音をたててドラム缶は落ちた

そして冒頭のセリフである

（飛んでいったドラム缶は高速を走る3セトラックに引かれるのと同じ威力だッ！後ろを向いていたお前が今さら振り向いて何かしようとしても遅い！だが、俺の心は奴が死んだと納得していない、さあ早く死体をさらせ！）

「こきなつドラム缶が飛んでくるなんて…怖いですね

「…」

土煙が晴れた先には、バラバラになつたドラム缶の上に座る譲一の姿があつた

傷も汚れもない彼は一目で無傷だとわかる

そして余裕とでも言わんばかりに不適な笑みを浮かべていた譲一を見て少年は舌打ちした

その態度に怒りを沸き上がらせていると譲一は少年に話しかけてきた

「いや、やつけていたようですが、何のようじょくつか？」

命を狙つたのになんともまあ白々しい奴だと不快感が走る

「…何のよう？攻撃したところからわかつてんだろが」

「言ひ方を変えましょく？はやて達に何か用があつたのでは」

「それはお前を始末してからだ　俺の明るい未来の為にな！」

少年がポケットから取り出したのはパチンコ玉

ひとつやふたつだけでなく複数のパチンコ玉を手に彼は宙に放り投げる

これらは少年の武器なのだ

「蜂の巣にしてやるゼエエッ！ フライングジャズ！」

パチンコ玉は全て高速で飛来する

その速さは人間を簡単に貫いて肉塊に変えてしまつだらつ

それを見ていた譲一は

「…………」

なんの戸惑いもなく、右手をパチンコ玉に振り上げた

「バカかお前は？生身のまま受けれるつもりかアツ！」

次の瞬間には右腕をパチンコ玉が粉々に粉碎する光景しか映らない  
だろう

彼はそんな光景しか思い付かない

普通ならばだが

視界の端に青い傷だらけの右腕が譲一の体に被つて見え、気づけば  
パチンコ玉は音もなく砕け散つていった

「…」

「やれやれ…対話の余地もあつませんね…少しさ落ち着いてくだ  
さいよ」

あれだけの速さを飛んでいた筈のパチンコ玉が当たる直前に砕け散

つたなんておかしそう

（奴も何かしらのスタンンドを使ったな？だが姿も何もなかつた…情報が少ない…ただあんな芸当が出来たとしても俺がまだ無事ということは近接型か？）

少年は冷静に分析しようとする

一概には言えないがスタンンド使いの戦いは自分の射程内にいかに相手を入れるかで大きく左右する場合が多い

少年のパチンコ玉は人を殺害する事の出来る破壊力はあっても実のところまともな攻撃手段がそれだけなのが問題だ

少年はまだスタンドによる戦闘経験が浅い

自分の能力をもつと工夫すればいいのだが、彼には未だに頭の中にはパチンコ玉を当てるこことしか考えていなかつた

相手を分析しても彼は自分の攻撃手段が一つだけと考えていたから

「仕方ありませんね…」

「譲一の攻撃が届くということを

避けなければならぬことを

頭の中からその可能性を除外してしまった

直ぐに結論付けた為に

「スカーサファイアツ！」

「来るかツ！」

「ちよつとあなたの動きを封じさせてもらいますね」

「あ？ 何を言つて」

少年は何か、変なものが見えた

譲一の右腕によく注目する

なにか、何か黒い線のようなものが走っていないか？

それがどんどん広がつている

「憑依型か？ なら能力が強力と言つわけか！」

「まあ、自分で言つのもなんですが強力ですよ？」

譲一は一歩前に駆け出す

少年は内心ほくそ笑む、自ら完全必殺の間合いに飛び込んできたのだと外さないし、防げないはず！

腕から放たれたパチンコ玉は真っ直ぐに譲一の体に行くがパチンコ玉は何もなかつたかのように消えていった

先程は碎けたはずなのに今度は何も無かつた

攻撃に飛んでいた筈のパチンコ玉は一つ残らず消失したのだ

「は？え？」

「痛いのいくぞ？歯ア食いしばりな」

田の前の現象に理解できずに振るわれそうになつている一撃に

「オラアツ！」

「ぶげエツー？」

避ける暇なく顔を殴り飛ばされた」となった

顔に痛みが走つたと同時に地面を無様に転がる少年は奇妙な感覚がすることに気付いた

同時に何かがひび割れていく音が頭の奥に響く

「な、なんだ？思つたよりも威力が低い？」

「そりゃあ、俺の中に引っ込めて押されたからな…さて、と」

顔を動かすと髪の毛をかきあげて、開いているのかわからない目が開かれその雰囲気が変貌した譲一がいた

いや、元の譲一に戻つていたのだ

逆立てられたような髪型に鋭い目付きは先程までの柔軟な笑みを浮かべていた譲一とかけ離れている

もう勝負は決したといわんばかりに悠然に歩いてくる譲一に反撃しようとしてもがく少年

「な、なんだ？体が動かねェ？」

「テメーの体よく見てみ？」

「？？な！なんだこりやアアツ！俺の体がツ！ひび割れてツ！粉々になつているツ！？いつたい何がどうなつてやがるツ！？俺はツ！俺は一体どうなつちまつてんだアーツ！？」

少年は己の砕けた体を見て絶叫するしかなかった

ハツとして自分のスタンドを見るもスタンドも同様にひび割れて砕けていたのだった

普通なら即死のはずが頭だけになつても生きていることに気が付いた

よく見れば血も骨も内臓も全てが一切吹き出でていない

これは奴の能力が行動不能にしたのか

しかも丁寧にスタンドまで封じて

そこで少年はあることに気が付く

「お、俺はただ行動不能にされたんじゃない……俺がこんな姿になつても生きているんじゃない……俺はこいつに生かされているんだ……こいつのスタンドに……俺の命はこいつが握っている……！」

「バカなりに考えたか……おめでとう正解だ……俺はテーマをわざわざ生かしているんだ……ちょっと能力を解除すればお前は文字通りここで肉塊になるが？」

生かすも殺すも俺はこいつの判断に委ねられてしまった……

あつさりと己の敗北と生死がかかつたことに自分が格上の相手に挑んだのだと悟ったのだった

## 傷だらけの青玉？（後書き）

スタンンドに関しては本格的に闇の書事件が始まる前にまとめます

闇の書事件が始まつたらたぶん他の転生者はめんどくさい事件には絡めないと思つので

事件に関係ないとこはちょろちょろ出ますが

あとは空白期にはオリジナルの事件とラスボスを掘えようつと思います

あくまで予定ですが

ノートーリアス・BIGって完全撃破不能つていうけど振り返つてはいけない小道とか無限の回転とかG・E・レクイエムで攻略できな  
いのかな？

せつまつ海に沈むるべりこ?

## 傷だらけの魔王？（前書き）

一応ジヨジヨなんだからラッシュの掛け声はオラオラにしました

無駄無駄も譲一には似合つてゐるんだけど…まあ、察してください

オリジナルスタンド、転生者、引き続き募集します

## 傷だらけの青玉？

SHIDE 讓一

弱い

その言葉が俺の頭を占めていた

いや、純粋に相手のスタンンドは推理からして応用の効く便利なスタンドだ

しかもなかなか優秀なタイプのが、だ

俺が使っていたらいくらなんでもここまで盛大に負けはしないだろう

といふか相手が原作に出てくるスタンンドでも打倒してみせるね

そもそも普通なら自ら突然突っ込んでくる奴は相手のスタンンド能力を攻略しつると判断した方がいい

もしくは能力が通用しないとも判断できるはずだ

些細なスタンド能力も使い道さえちゃんと考えりゃ強力なものになると俺は常に考えているんだが…

こいつ、まともに自分の能力の全容を把握しちゃいないビックリかス  
タンド使い同士の戦いも理解してねえな

強大な能力を手に入れてはしゃぎやがってアホが

聞合いとかもちゃんと考えやがれ

ま、そんなことは今となつちやん関係ない

「お前のスタンド、フライングジャズだつてか？大方、本体とスタ  
ンドが触れたものを吹き飛ばすんだろ？」

「な、なんでわかるんだ？」

「はあ…適当に推理して鎌かけただけなんだけど？」

「なッ！」

ああ、ダメだ

こいつバカもいとこだよほんと

自分でイエスとか言うなよ

「普通ハイとか言わねえぞ？」

「こいつううツーテメヒそなんなんだこのふざけた能力は！」

「大人しく言うと思うか？お前みたいな奴はスタンンド使いにや向いてないな…テーマの持ち味も生かせないアホがいっちょまえに喧嘩売んじやねエ」

名前も知らんガキの頭を掴み上げて俺と同じ視線に合わせる

「で？テーマの明るい未来の為に俺に始末しようとかほざいてたよなあ？」

「う…」

「俺はな？静かに穏やかに生きたいんだよ　ただただ1人のクソガキとして平和に過ごす…だから俺は自分から喧嘩は売らねえし、普通の喧嘩とかならこいつちから額を地面上にすり付けてやるさがな？俺の日常を俺と同類（スタンド使い）が侵すつてんなら話は別だ…」

「だ、だからなんだよ…」

「悪いがてめえがはやてに下心丸出しなのは丸見えだぞアホめ」

「……」

「何をいきなりなぜわかつたみたいな顔してんだこいつ

なんか会話するのが嫌になつてきた

「いたんだよ　お前みたいに、はやてこむけい出そうとする  
ドアホがな　はやはては俺の友人で日常の一部だ　クソみたいな  
考えではやての日常を歪ませよつとしてるてめえは俺の敵だ」

「うげつ」

頭を落つことした後に面のすぐ横を殴り付ける

地面はひび割れ、陥没し、その光景に完全に顔を青くしていた

「殺そうなんて思つちやいない…だが調子にのつたら病院送りにしてやるから覚悟しな?あ、あと俺の存在を誰にも語るな　スタン  
ド使いは引かれあうとはいえ…俺は一般人として生きたいからな  
余計なことをするんじやねエぞ?」

「は、はいいいつ」

とりあえず反抗したらボコボコにしてやるが今はいいか

能力を解除してやるか?俺は放置しておくほど鬼畜じやねえしな

散らばつた体の一部が全てくつつき元の少年の肉体に戻した

「も、戻つた…」

「一度と俺の人生の邪魔すんなよ？じゃあな」

まつたく…余計な時間を食つたじやねえかよ

はやて達の向かつたデパートに早いくかないと俺だけ昼飯食えなくなつちまう

はやてのことだからシグナム達以外にも自分の服とか買つてきそつだ  
荷物係になるんだから腹になんか入れておきたいんだよ

昼飯といやあ、なに食わす気なんだはやてのやつ？まさか新しい家族のために高い店とか行くんじゃねえだろうな…

だとしたら除け者にされるわけにやいかねー

俺はそのまま立ち去るつとするんだが…

背後から来る怒氣

まだ、立ち上がるか…わかつちゃいたんだが…なんだかなあ

「くそっ！クソッ！くそがッ！お情けのつもりか！？自分が絶対に有利だと信じて疑つてないのかお前は！？どいつもこいつも余裕ぶりやがつて！俺はスタンド使いだッ！俺はツー俺はあツー！」

フライングジャズが羽毛から先が鋭い触手を複数出し始める

ひょろい触手だな？スタンド自体にやパワーは無さそうだが、この  
つの飛ばすという能力で振るわれるんだね？

わざわざのドーム缶やパチンコ玉を考えりや相当な速度で来るな

「まだやるんだな…つーかよオ、そのスタンド鳥なのかクラゲな  
かはつわつしるよ 気色悪い」

「う…ーべたぱりやがれヌヌーーツー」

一気に打ち出されられる

このまま木偶の坊でいたら一瞬にして粉微塵だな

だが残念、俺のスカーサファイアにはそんなものは届かないんだよ  
バカが！

両腕に黒い線がひび割れのように次々浮かび上がる

まるで憑依しているかのように見えるが実際はまったく違つ

俺の中にスタンドを出しているだけに過ぎない

そして腕のひびから薄く、

細く小さなひびを次々に手の先に集め、

腕を全力で振る「ツ！」

ひびは空間を走り、触手に殺到して一瞬のうちにバラバラにした

「ば、バカなツ！」

「オラアツ！」

「うぐつーー？」

直ぐに狼狽えたバカに俺は近付いて、腕のひびが集まつて出来たスカーサファイアの腕で殴る

「俺がせつかくやつたチャンスをこんな下らん」と使いやがつて

…

「う、ううつ…く、来るな…」

「病院で反省しな」

「来るなアアアーーツーー！」

再び現れた触手

せつきてよつせりに増やした本数は数えるのがめんどいくらいの物量で来た

ザシヒ100本くらいか？

そんだけありや マゾをシバくにゃ 苦労しないな

ま、俺はマゾじゃないからシバかれんのはじめんだがね

能力を使って目の前で瞬間移動するように避けながらゆっくり、ゆっくりと近づいていく

「あ、当たらない！？ 時を操ってるのか！？」

「んな高度な」と出来るかよアホ… テメーは黙つて殴られりやいいのセー！」

両腕のひびを集めて出したスカーサファイアの腕を俺はほんのちょっとだけ本気出して

しかしたぶん死なない程度に振るつた

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラオラオラオラオラオラ

殴つてるとかよつと聞こえちゃいけないような音もしてると、結局  
俺を亡き者にしようとしたらんだ

これぐらい許容してくれるだろ？

アップカットで打ち上げたあとに右腕を捻りを加えて打ち出す！

「オラアッ！！」

ぐしゃり

と、いつた感じな具合に拳が顔面に決まり、盛大にぶつ飛ぶ

鼻血とか色々出してるけど、ちょっとだけ本気出したこと以外一応  
は手加減して殴つてあるんだから死なねえだろ？し再起可能だろ？

まあ当分は不能、だな

このまま死んでいかれても不味いから救急車ぐらい呼ばうかね

なんか腕とか折れ曲がってるかそいら辺のチンピラにリンクさせましたって言つときやいいか

馬鹿正直にスタンドで殴られました何て言つても信じねえだろうしな

「ふう… やれやれですねえ」

テキトーに携帯で通報し、かきあげた髪をおろして痙攣してゐる馬鹿を尻目に俺は走り出した

はやてがへそを曲げる前にサクッと行きますか

ああ、街中でスタンド使いにめぐらや早く、「Nんたかなあ  
でもそんなことすりゃ近くにスタンド使いがいりや近づいてきそう  
で嫌なんだよな

しかもさつきのああいうバカみたいなやつが

まつたく：神様よお

素質ばつかで魂集めんなよな……

無駄に諦めの悪いスタンダード使いが騒ぎを起したりしてんだからしつかりしてほしにせ

シグナム達がはやての家族として迎え入れられてなんだか厄介事が  
来そうな予感がしてるんだ

全うな平穏を過ぎじしたいよほんと

とりあえずオラオラしてみた

なんかフライングジャズの少年は小物とはいえスカッとした

「めん少年、サノブの都合で再び病院送りにしちゃった

譲一は腕や足ぐらいは出しても本体はまだ出できません

譲一の能力も群を抜いて強力です

どんな能力かはまだ判明しません…

といつより譲一が戦っている相手に解き明かしてもらいます

はやてと譲 | ~ (福井や)

彼は、平穏のために見て見ぬふりをする懸か者である

SHIDE 謙一

「遅い！なにもたくわじてんねん！」

「す、すみませんはやて…ちょっと友人が鬱陶しくて…」

だいぶ近道して走ったんだがやつぱり遅かったみたいだ

あのバカの相手をしたせいで怒られちまつた

以前も似たようなことで怒られてるし、どんなことがあれつてハイを待たせるのは悪いことは、なぜての談

そうですが、俺は、はやてには頭が上がつませんよー畜生

シグナム、シャマルは苦笑こじてるし、ヴィータは回つの珍しそうそわそわじてる…

ただ、昼食は皿で食べたいとはやてが待つてくれんだから仕方な

いし優しさだからな、甘んじて説教を受ける

闇の書なんて非日常に片足突っ込みかけてんのに守護騎士達を逆に  
田の当たる場所に巻き込んでんだからなあ

家族のいない寂しさがあるとはこえほんとこじつかりしてると

くべりべて、俺は平穏の生きよつとしてのこだまざのじてのじてだ

スタンンド使には引かれあう

どれだけなるべく地味に田立たず生活していくも俺も転生者でスタン  
ド使はといつ事実からは逃げられないし隠しきれねえだろつ  
いつ、ボロを出すかわからぬかヒヤヒヤする毎日を送り続ける  
今、俺がいつまでもこの平穏とこひ足場に立つてこられんだらうかね…  
ん、暗に考えはやめてはやて達のために奮發しますか

「はやで、実はこないだ美味しいイタリア料理店を見つけたんです  
よ 毎食代は僕が支払いますから、そんじまじゅう

「おーおーてくれるんか?優しいなあ譲一君はー・ポイント+ーせ

「なんですかそのポイント?..

「さあ?・みつわからん

わからんのかい

さてと、案内したイタリア料理店に二つの間にかつたようだ  
値段がちょっと高いのはイタイが…

普通のガキなら支払えないそれを俺はクリアできるんだよ

ふつふつふー……悪いなクソ親父、お袋が見つけたあなたのへそく  
りを使わしてもひりひぜ？悪く思つなよな？

小さな茶封筒に畳まれた5枚の諭旨さん！

一日、家に帰つた時に俺の部屋にもじものためとお袋がこいつそり  
おいていたからな

「はやでちやん……譲一君が良くない笑みを浮かべてるわよ

「あれはあかん…シグナム、ヴィータの日塞にござ  
見せられへんもんや

「わかりました

「ちよー！シグナムー前が見えねえー！」

あれ? なんでみんな引いてんだ?

あ、じりー離れんな!

「ヴィータ、ソースが口の回りについたままですょー今拭いてあげますね」

「おーー自分で拭けるからーーいつてーんぐぐー」

諭<sup>アド</sup>さん<sup>アド</sup>さんが2枚犠牲になつて料理店から出たときに自分のハンカチでヴィータの口回りを拭いてやる

いや、やつぱりす<sup>アド</sup>い美味しかつたなあ

ところが店長は世界各地で修行した見たいで若この日本<sup>アド</sup>にす<sup>アド</sup>る

「あれではまるで兄妹だなシャマル」

「やつですね…はやてちやん?」

「んんー…イタリアンなのに日本人好みに味付けされとつた…す<sup>アド</sup>い店長さんやつたな…」

「やついえばはやて、買い物の続きをするんぢやないんですか?」

「やつやつたなー! せ、みんないくでー!」

車椅子を操るはやはそりやもつパワフルなこと

いろんな場所に皆は引っ張り回される形になる

あのちつこじ体の何処にあんなスタミナがあるのか未だにわからんね  
えー…

そしてたどり着く女性専門の服屋

男である俺は何度か外で待たなくけやならんから暇だな

だがはやての生き生きとした姿が見れてよかつた

家族を持つたことでこんなにもいい笑顔が出来るんだな

俺は前世でまともに笑った覚えがねえからきっと昔のはやはみたい  
な寂しい笑顔だつたらうつ

そんなことをぼけつと考えていると、着せ替え人形にされてきたシ  
グナムが少し顔を赤くしながら帰つてきた

ちらりとみると今はヴィータがはやての標的になつてんな

ただ、シャマルまで一緒にになり始めて味方が居なくなつてやがつた

しつかし、結構ノリノリだなシャマルのやつ…

哀れヴィータ、合掌

「少し顔が赤いのですが、どうかしましたかシグナム？」

「い、いや…なんでもない」

「なんでもないと黙って胸を押さえていたらだいたいはやでが何をしでかしたか把握した

まつたく…あの助平子狸め…

大変興味はあるが、セクハラになるから俺は触れない

「隣に座つても？」

「どうぞお構い無く」

シグナムが隣に腰掛けて来て、一緒に手を小さく振った

黙っていたがふと、はやてと田が合い手を小さく振った

「仲が良いのだな」

「友人でもあります、が妹にも思えるんです。昔はどこか寂しい笑顔をばかりでしたが、新しい家族が出来て良かつたです…」

シグナムに視線を会わせると訪ねたくなつた

「まだこの平穏に心惑うこともあると思いますが、どうですかこんな生活？これがこれからあなたの日常になるのですよ烈火の騎士シグナム」

「…………昨日の約束には驚いたし、主の考へている事が最初はわからなかつた。だが昨日のやり取りと今日の主を見て素晴らしい主に出会えた。私は戦いばかりだったのだがな、今日のよつたな日常は悪くない…………いや、幸せだ」

「そうですか……」

「藤城？」

「…………俺は、いつかはやてを悲しませることをするかもしけねえ…………友達だけじゃ繋がりが薄いんだ。シグナム、はやての家族として彼女を頼んだ。皆で支えてやつてくれな」

「それはいったいどういふことだ？」

「……いつか、話しますよ」

そう、時が来たら

それは、やがて見えない異能を持つもの達が「じぞう」と集まるだらうから

先刻、負かしてやつたやつは、はやてに接触しようとしていたのだ

同じ異能スタンダードを持つ俺としてはいつか、話さなきやな

下らない考えを持っていたあいつとおんなじような奴が現れたら俺は、はやてを守らなきやならん

血塗れの争いにはやては巻き込めない

ばれてもダメだ

俺にはある秘密がある

それがバレれば嫌われる

その時は俺は去らなきやならぬからな

今ある平穏をぶち壊す最大の爆弾は俺の中にある…

そのまま黙りこんでしまった

ああ、空氣重い

「藤城……」

「いやあー買つた買つたーいい買い物したわあ

暫くして、シグナムの心配そうな声をかき通すよつやはやては隨分とほつこつとした顔で戻ってきた

…心なしか、ヴィータがほんの少しづつれてる気がする

「まつたく…はやはては自分の分を多く買つてませんよね?」

「大丈夫やつて、譲一君が潰れないギリギリの量や…」

「…拷問ですか?」

「冗談やつて」

少しマジな気がしたのは俺だけ?

とつあえずあとは少しの小物を買って帰りますかね

服屋からすぐ近くの雑貨屋でパッパと必要なものを買い物かごに入れていくとはやでがそばにやって来ました

「譲一君」

「なんですか？」

「今、すいじい幸せや 譲一君が友達になつて、シグナム達新しい家族が出来た 前は親がおらんから寂しいし、足がこんなんやからなんで神様は意地悪ばつかするんか思てたけど、素晴らしいもんも手に入れたんや……まだ幸せになれる それを知ることが出来たわ……」

「わつとはやてだから、手に入れられたんですよ 幸せと感じてこるのははやてで、その幸せははやてだけが感じられる特別なものじやないですかね」

「わつなんかなあ……なあ譲一君

「は?」

「これからも、友達でこいな?」

「当然ですよ」

「これからも、わつとはやては笑えるよになつた

これからも、わつとはやては笑顔になる

はやての幸せ、わづかずつと続いてくれよ

କବିତାକବିଦି

「どうでヴィータ、それは？」

ヴィータが随分と嬉しそうに抱き締めるぬいぐるみ

うさぎのようなんだが、ウイータはやっぱり見た目相応の性格といふかなんといふか…

「ヴィータ、人形がほつれたりしたら譲一君に頼むんやで？」

「なんでだ？」

「讓一君、中身がチソピラ?なのに特技が裁縫なんやで!前着けたエプロンとかミトンに、家にあつた猫や子狸のぬいぐるみとかは讓一君が作つたんや」

「なんつーか、女の子っぽいんだな譲一のやつ（子狸…？）」

「女の子っぽい…ですか？」

前世からよく裁縫やつてたからな…

元々暇なときにチクチクやつてたら出来ただけなんだけど

とにかく裁縫やつてたら女の子っぽいのか?んんん?

「なんか考えこみ始めたな…もしかして悪いこと言つちまつたか?」

(ヴィータは何も悪い ただ、ティベアとかぬいぐるみのパートナーと可愛いのレベルが高すぎる…頭んなか結構メルヘン図鑑ちやうか?)

何故かヴィータに謝られ、はやては裁縫で食つていけるんじやとか  
言われた

そんなんに裁縫の技術高いのか俺つて?

後、チンピラとか言つんじやねえよはやて…

## はやてと譲一？（後書き）

ちょっとした交流

ダメだな…シグナムをヒロインにしたくなる

でも我慢だ

猫草飼いたい

でも我慢だ

次話にて原作に登場したスタンンドを出します

いや、厳密にはオリジナルになつてしまふんだけど能力が変わらな  
いです

譲一チームが出来るみたいなもんですね

それに応じて亮チーム、庵チームが出来ます

あとはラスボス転生者が数人ですかね

ラスボス転生者の中には原作に出た強力なスタンンドを操ります

ただしラスボス転生者の一部はスター・ライトブレイカーとかスター・ライトブレイカーとかスター・ライトブレイカーとかでぶち抜かれるかもな！ザマアツ！！

あ、恥知らずのパープルヘイズを貰いました

まだ全然読んでないからネタバレしないでね！

ついでにサノブはシーラEがツボに入った

早く読まねば！

……実はクロノチームもあるよ……



青玉と金剛石と立方体？（前書き）

タイトルで原作に出てきたスタンダードがなんのまわるわかり

金剛石で…金剛石つて…

## 青玉と金墨石と立方体？

SHIDE 謙一

守護騎士達がはやての家族になり1ヶ月たつた

皆、生活になれてきたのか随分とのびのびとしている

そんなハ神家で俺ははやてを探し回っていた

「はやてー？ ビーじですかー？」

「びひした藤城」

体がなまつちやいかんからとさつきまで組手してたザフィーラが人間態でいた

「ザフィーラですか 今日はヴィータと散歩に行かないのですか？」

「ヴィータは近所にゲートボールをしにいった

マジか？ヴィータのやつ老人に混じつてそんなことしてんのか

なんかここ数日居ねえときがあると毎日たらたら二つことなんだな

「それと、#なら図書館に本を借りに行くと言つてこた

あ～、はやで本好きだしなあ…………ん？一昨日かなり本借りてなかつたか？まさか全部読み終わつたつて言つのか！？早すぎだろ！

……#あ、いい

この際ザフイーラでいいか

「ザフイーラちょっと留守番を頼まれてくれませんか？冷蔵庫の食材が減つてきたので今から買い出しにいってきます。はやてが帰つてきたら#えておいてください」

「任せられた」

「それでは、行つてきます

買つのに必要な食材をメモして財布をポケットにいれしていく

おっとエコバッグを忘れちゃならねえな

そういうや天気予報は晴れとか言ってたけど降つそなぐらこ曇つて  
やがる

これで予報が外れて雨だつたら最悪だな

一応折り畳み傘を持つて家を出た

「ん？」

なんか視線を感じるとそこには一匹の猫がちょこんと堀の上に居座  
つている

何故かよく見かける猫なんだよなあ……この堀が気に入つてんのか?  
でも今日また同じような口は差してねえし……

「お前も物好きですねえ?こんな口にも律儀に堀の上なんかにいて

「二元あーん」

頭を何度も撫でて、気持ち良さそうな声をあげる猫

やつぱねこーいな

.....

見てて癒されるわあ… つてこなん」としてる場合じやねえや

「今日は少し、天気予報が外れそうです　お前も雨に濡れる前に  
帰るんですよ?」

「うにゃあ～ん」

最後にあいをマッサージしてやった後、商店街に走った

うーん、道行く人を見てりや皆、傘を持つてやがるなあ

こりゃ確実に降るね、いい加減な天気予報しやがって

「痛いよお～ママアアア」

「ん?」

道の途中で足を押さえて泣いてる小さな男の子がいた

ちょっと大袈裟な感じがしたから気になつて仕方ねえ

「うわあああああん!」

「…………」

つーか道行く人もなんかしてやれよな…あんな冷てえ大人にならな  
いようにな

俺は近付くと、声をかけよつとして

「君、大丈夫?」

「ヒック…ぐすつ…足が痛いよお」

「どつちの足?私に見せてくれないかな?」

なんだかポニー テールにぱつつく前髪の女の子が先に男の子のもと  
に来た

なんというかなのはやアリサ、すずかみみたいな美少女と呼べるよ  
うな姿の女の子だ

柔らかく優しい笑みを浮かべている彼女を見て少し落ち着いたのか、  
男の子は押さえていた足を見せた

そこは、転んだ拍子に何処か角に刺さったのか血がだらだらと出で  
いた

おいおい、ありやあ確かにいてえぞ?

大人でも結構痛そうに見える怪我だった

流石に見て、ぱっかじやダメなので俺も男の子のもとに駆け付けるか

だがそこに俺は信じられないものを見た

「うふ、今からお姉さんが治してあげる！」

「ぐすり…ほんと？」

「任せて任せて！泥船に乗ったつもりでいなさい。」

「すずつ…それって…沈みそうだよ…？」

男の子の通りだ

なんで泥船なんだよ大船だらふつー

「痛いの痛いのあーぶつ飛んでいけー」

「…」

「あ…治つた…」

女の子が怪我をしている部分に手をかざすと、あれだけ流れていた血はなく、傷口はきれいさっぱり治っていた

だが、そんな異常な現象よりも俺は彼女の背後を見ていた

彼女の背後に佇む一體の大型…

首の部分には鉄のパイプのような部分が生えていた

ハートにも見える一部の装飾、一瞬にして直し（治し）て見せたその特異な力

俺は、それを認めたくないが、だが、間違いない…あれは…

「ク、クレイジー…ダイヤモンド…」

嘘…だろ？あの原作に出ていたスタンダードを使つていうのかよ…

ヤバい、ヤバいぞあれは…

俺のスカーサファイアはダメなんだ…こいつには、クレイジー・ダイヤモンドには絶対に勝てない…

戦いどころか、接触も回避しよう

なんでスタンダード使いは引かれあうなんて厄介な性質があるのか、今日始めてその事實に怒りが沸き、同時に元気になつた男の子に手を振る彼女を怖いと思つてしまつた

後ずさりつとして

「おい、お前… さっきのあれ見たな? いや、見えていたな?」

「…」

俺の後ろからかかる声に「キリ」として、首を動かすだけでその方向を見る

「おいおいおい…もう一人いたのか! ?

「ちと…冷や汗をかきまくってるーの! 」

パーカーを着た一人の少年がそこにいた

だが、目を見りやわかる…

見た目と中身の伴っていない、眼光

「俺の姉さんのアレ、見ちまつたんだよな? てーことはよ~お前、  
転生者だろ」

「…なんのことですか? 僕にはさっぱり」

「とほけんなよ、姉さんはかなり強力だし、あの人は戦いもまと  
もに出来ないような優しい性格しててな? 騙されやすいから誰かが

知れば利用するなんて目に見えているんだよ……で、テメーが見ち  
まつたからせつかぐバカどもから隠してる情報が漏れちまうかもし  
れねえ」

「こいつは弟か…？」

確かにクレイジー・ダイヤモンドは応用の出来る「テタラメな能力」に  
加えて、スタンドのポテンシャルもずば抜けてやがる

バカども…なんかの物語のこの世界に介入したがるやつがいたから  
たぶんそいつらの事か？

確かにクレイジー・ダイヤモンドを味方につけりゃそういうのを出  
来るかもな…

勘違いされてるとはいえ「こいつも十中八九スタンド使い

戦いたくねえー…なにか、なにか戦いを避ける手段が欲しいッ！

俺のスタンドを使えば遠くに転移は可能だが、クレイジー・ダイヤ  
モンドの能力を使われれば

簡単に戻されちまう

ヤバい、詰みそうだ…下手に会話もできねえぞ

「……光！人様に迷惑かけるんじゃありませんっ！」

「うげエッ！？」

「……は？」

打開策を練つていると光と呼ばれた彼をさつきの女の子が頭を殴つていた

突然のことにしてポカンとしてたが、今この瞬間は隙だらけになつた相手を見て俺は直ぐ様走り出した

「あ、こらー待ちやがれ！」

「待つのは光！簡単にガンつけちゃいけません！」

「ちよー！姉さんッ！こ街中ッ！ぐああああつ！」

……何が起つていいのかすゞい気になつたが、そんなものに振り返る勇気はねえ

逃げるよひに俺は食材を買いに戻るのだった

まったく！光ってば簡単に喧嘩売るんだから！

相手は完全に無抵抗だったのに仕掛けることないじゃない！

「ね、姉さん…わかつてくれよ…クレイジー・ダイヤモンドは強すぎるんだ…下手すれば利用されたり、姉さんを再起不能にするか殺されるかもしれないんだよ？」

「大丈夫だよ！私は強いもん！光はわかつてるでしょ？」

「わかつてる、わかつてるけどさ…スタンダードはとてもないくらい強力なのは皆一緒なんだよ？中には問答無用の皆殺しにする奴とか、完全撃破不能な奴だってあるんだから、迂闊に能力は使わないでよ？」

「う、でもさつきのぐらに見逃してよう」

「はいはい姉さん」

あ、あれ？おかしいなあ、なんだか私が怒られてない？？

もう…光の癖に生意気な

姉さんに説教なんて十年早いんですからね

あ、それよりも

「ほら光！早くしないとバーゲンセール始まっちゃうよ」

「本当にわかつてゐのかあ～？」

光の手を引いて駆け出す

私達、姉弟は一度目の生を受けた

いきなり生まれた矢先に親に捨てられるとは思わなかつたけれど、前世の記憶を頼りに生活することでなんとか生き長らえてきたのだ

スタンンドといつ望まぬ力があるとはいへこれからも変わらないのだ

だけど、さつきまでいたおそらく自分達と同じだらう少年

彼に出会つた事がこれからのはじめを変えるのだと

「すいません、これぐださ…………あ」

「「あ」」

買い出しに来ていたスーパーでたまたま同じ商品売り場でもう一度出くわした時に私、柊　由香は確信したのだった



青玉と金墨石と立方体？（後書き）

誰がサザンミーティングだアーッツ！

しかし、譲一が見たものが本当にクレイジー・ダイヤモンドだったのだろうか？

答えは「」の後の戦いで

今回は話を二回くらいに分けますかね

どつかの鳥かクラゲかはつきりしない小物と違って戦いは少し激しくじょうかと

次回は譲一VS光です

青玉と金匱石と立方体？（前書き）

讓一光

青玉と金剛石と立方体？

SHADE 謙一

買い物を終えた俺は少し暗い気持ちで帰宅した

ドアに出て迎えてくれるシャマルとヴィータ

ヴィータはアイス皿を持ってだら

「あら、譲一君お帰りなさい」

「ああ、シャマルとヴィータですか？すみませんがちょっとこれを  
冷蔵庫の中に入れておいてください」

「わかったわ」

「なあなあ、アイスはないのかよアイス！」

「ちやんとありますよヴィータ　ちやんと冷やしてから食べるの  
と食べ過ぎない」とですよ　皿の分も残さないと一週間アイス買  
いませんからね」

「うわ、わかつてるよー子供扱いすんじゃねー！あと頭撫でんな

「！」

と言われても撫で心地がいいんだから仕方ないだろ  
髪の毛をひきらしてるし…今度、シグナムの髪もこいつそり撫でよつ  
かな…

そんなことよりシャマルに食材を渡すと俺は靴を履き直す

「ん？ 譲ーお前、どうか出掛けんのか？」

「ちょいと野暮用ですかね？ 夕飯には帰りますから… そんな捨てられた子猫のよつな顔しないでくださいよ、ヴィータ」

「してねえよー！ そんな顔ー！ お前にまだどうひつてんだー！」

「ああ？ シャマル、どう思っています？」

「え？ え、ヒ… 私にはちよつと… って譲ー君、ヴィータで遊ぶじゃダメですよー。」

「譲ーー。」

はつまつまつまつまつ

「いろいろ表情を変えるヴィータは弄つて楽しいんだよな

はやてに前、怒られたけど簡単にやめられたかっての

………… わて

「………… それじゃ、行つてきますね」

「?? あ、おお」

「? 行つて、いらっしゃい讓一君」

俺は家を後にした

歩いている間、思案する

何故、何故静かに暮らせない？俺はただ平穏に暮らしたいだけだと  
いつのに…

あにつらも戦いは望まないよつ性格をしてい

向かつた先は人気の少ない空き地

そこには今日遭遇した姉弟がいた

「待たせましたかね？」

「いいや、全然 わつき俺たちもここに来たばかりだ」

「あのですね…やっぱり別にこんなことをしなくてもいいんじゃない  
いでしょつか？」

「無理だね、お前が秘密を守ってくれる証拠は無いんだからな

シスコン野郎め…心配性にもほどがあんだけが

頼むから姉は見守ってないでなんかいってくれよ」

「そもそも俺にはわかるぜ？あなたのやの田…

人殺しの田だ…」

「ツ…」

「何人殺した？」

「…言ひと思ひつか？」

髪の毛をかきあげて相手を睨み付ける

光とか言つたか？はやてにすら秘密にしていろ」と…その一端に触  
れやがつた

「そうさ……俺は人を殺した事がある

転生して数えで10年……もうこの両手で数えられない人数をな

仕方ないだろ？」

お袋が裏で請負人のような仕事をしてきて

だから、ガキの俺が何処かの犯罪組織に何度も命を狙われたんだ

初めは返り討ちにするためだったのに、町の人間を巻き込み始めた奴らに手加減しなくなつた

そして両親を手にかけようとして来た奴らを……

犯罪組織は高町士郎なる人物が警察と一緒にになつて滅ぼすまで命を狙い続けた

振り返ると日常を平和に生きよつとして非日常でやりたい放題殺した事から目を背けてたな……

「お前は何処か危うく危険な感じがするんだよ……何て言つて勘みた  
いなもんだ……平穀を望んでいるのはお互い様だが、俺はまだ信用できねえ……テーマの平穀を守るから俺達の情報をくれと言われたらあつさり渡すかもしね」

「ちよつと光……」

「姉さんは黙つてくれ……俺は逃げねえ、どんなことがあろうと今ある平穏を命をかけて守る！お前は平穏を命をかけて守る覚悟はあるかッ！？平穏の為に敵であらうと他者の命を蔑ろにしないと絶対に言えるかッ！？」

「俺は……」

「どうだらうか？一度数多の命を犠牲にしたのだから

俺が胸を張つて絶対に言えるのだらうか？

「戦え！藤城譲ーー！」この俺とキューーブと戦い、覚悟があるか示して見せろオッ！

光の回りに四角い立方体が大小問わず浮かぶ

あれが奴のスタンドか？

見た目ではあまり能力は分かりづらいな……

だが、俺は覚悟を示さなければならぬえ

秘密と向き合い始めなきやならぬえ

両腕にひびが入る

平穏の為に回りを廻るにせずのせまいぱりダメなんだよ

他者から奪うな

自分が、守るんだ

両腕のひびがさらに深く、深く入つていった

SHDE out

キューブと呼ばれたスタンダードー見群体型のよつに見える

だが意思を持つてるように見えないしまとまつた動きはない

とつあえず譲一は様子見で挑む」とこした

一対一、しかも相手はさつきりこつてフライングジャズの少年と違  
い、強い

まず適当な隙がないのだから

とにかく間合いに入つて牽制を仕掛ける」とした譲一は駆け出す（血迷つた…って顔はしてない…真正面から来るにはどんな能力にも対抗できる手段があるところ」とか）

「キューーブ！」

何かが軋むような音が響く

それはキューーブが動くと必ずなる、いわば駆動音のよつだつた

手のひらに収まるよつた四角は回転しながら不規則な軌道を描きながら接近していく

そして急激なスピードを上げてそれらは譲一に襲いかかった

緩急がつけられタイミングも數もバラバラな立方体は足を止めてしまつた譲一を攻め立てる

軋むを音をBGMに冷静に避けて、無理なものはスカーサファイアで叩き落とす

（動きが早え…ど）から襲い来るのが、どのタイミングで突つ込んでくるのか、計算が間に合わないッ！）

「 もうもう…増やして…べん…」

光はさらに人の頭ほどもある大きさの四角い凶器をいくつか追加していた

そしてその大きさは小さな凶器を隠すには最適だつた

高速で動く物体に譲一は対応を追われてこると同時にその事実に気付いた時はもう遅い

死角から迫る攻撃は譲一の腹部に突き刺される

「 ぐわー？ な、こ…こつまこつたいじこから…」

一度対応を止めればどうなるか

それはかわさなければならぬ攻撃を一身に受けふことになる

次々に譲一を蹂躪していく、痛みに悲鳴をあげたくてもあげられない

額に強い衝撃が来たかと思えば血がドロリと流れ落ち、口のなかも切つたが、血の味が広まつて鬱陶しくなる

「 み、光！ なにもそこまでしなくても…」

「悪い姉さん、これは必要なことなんだ」

（チツ… ょゆーかましやがつてよオ… クソッタレが…）

譲一には元々負けず嫌いな面もある

情けなさから来ることもあったが、先程からなすすべもなくワソサ  
イドゲームを強いられていたことが一番あったからだ。つい  
その性格のせいでもなく後悔ばかりするそれが、今回は彼にとつて吉  
となつた

譲一に、火がついた

「ツー！ オラアツー！」

1つの立方体を思い切り殴り飛ばした

狙い済ました一撃は立方体を明後日の方向に吹き飛ばしていく

そこから彼は反撃を開始した

「！？ まだ元気があるかツー！」

光は立方体を再び向かわせてなぶろうとするのだが

拳を振るつても届かない位置にあるはずの立方体にはまるで瞬間移動のように瞬きひとつで近くに現れて殴り抜いた

——は能力の出し惜しみをやめたのだ

あれだけ譲一を苦しめてきた立方体は「こと」とく弾かれていく

ひとつ立方体が光めがけて殴り返される

それを紙一重で避けるとさらに何か黒い線が迫っていることに気付く

それらをなんとか状態を反らせる」とかわい

「ぐあつ！？」

「光！？」

あらぬはずが、肩をぱつくりと弓を裂いた

「痛みはあつた…だが、血が出でいない…？そしてこの黒い線…」

未だに残る黒い線

それはまるで

「……おいおい、こいつはなんの冗談だ？姉さんのクレイジー・ダイヤモンドもそうだが、お前これって…」

空間そのものをひびを入れて壊しているのか？」

光の言葉を受けた譲一は、返事をするかのように腕のひびが浮いていた腕と背後へ集まつていく

腕だけだつたそれはやがて人型へとなつていった

青い肌に様々な傷跡が刻まれている

顔にはまるで目隠しのよつたベルトと鎖が巻かれていたが、鎖は砕け散り、ベルトの隙間から瞳を覗かせた

「成長……いや、元に戻ったのか……」

「いちいちグダグダと悩んで自分にとつての平穏を失うなんてバカらしい…………秘密を隠すために友人達と無駄に線引きしてその実、一番平穏から遠ざかっていたなんてのもバカらしい…………俺の秘密は今は友達やその家族には話せねえ……だが、いつか話す……俺は罪を隠すのはやめた……いくぜ光とやら、今の俺は手加減しないッ！」

言つて、そこには譲一は居なかつた

光も由香も何が起きたかまつたくわからなかつた

「消え、た……？」

その瞬間すらわからない悟らせない

由香の咳きが静かに響いた

光は嫌な静寂が訪れたなと警戒する

そして、

「後ろから！」

オラアッ！！

「シルバーハウス...！」

僅かに感じ取れた譲一の気配、そして拳の嵐が来ることを察知した光の行動は早い

自身の回りにあつた立方体をすべてかき集めて白い壁が守るようこ  
固められる

拳が立方体にぶつかる音が暫くなり続け

再び静寂がやつて来る

「氣配が無い！？そこにいないと…ツ！」

「フンシ……」

右、いや左、果ては斜め下から青い拳が、光に襲いかかる

今度は、譲一が光を追い詰め始めていく構図へ変わりだす

「様々な方向から、同じタイミングで拳が現れるッ！？こいつッ！空間を移動できるのかッ！？しかも、なんの時差もなく！こいつは、空間を破壊するのが能力なんじゃないッ！」

光はとんだ化け物を起こしてしまったと少しばかり後悔していた

なんとしても防ぐべく、拳の先に立方体を回して間一髪で防いでいく  
だが、動搖と焦りが精神力をすり減らし、光はミスを犯す

ひとつ立方体が拳の一撃に踏ん張ることができずに弾かれてしまつたのだ

その小さな隙間を通り、拳はついに光を捉える

「がアツ！？」

「ハア…ハア…外したか…今まで決めようとしたんだがな…」

吹き飛んだ光は立ち上がるうとして血を突然吐きだす

「ゴブツ！？ ゲホツ！ ゴホツ！ ぐあ……なんだこれは……骨は折れてねえ……だが、全身が割られるような衝撃が来やがった……」

「ハア……クツ……そりゃスカーサファイアは顔以外を殴つちまつと発動する筈の、相手の体を割るという効果が不発して……そのお前というひとつ空間を揺さぶったからだ……顔以外殴られつとすげえ痛いぜ？」

「ゴホツ……どうりで遠心力を内側から受けたような感覚がするわけだ……氣分悪い……」

「言つておぐが……体を割るのも、ひびを入れて壊すのもどつちも本当の能力からこぼれ落ちたおまけだ」

「だとすると……あの拳を出したり、お前が消える方が本当の力かもまるで、扉を行き来するような力……空間や、お前のそのひびはその扉を壊した刃物もどきに過ぎない……參つたな……能力がチート過ぎるぜ」

光の殴られた箇所、右腕には、ひびが入ったように薄く赤い傷が走り、血を流していた

ここに来て互いは体をボロボロにしつつも五分五分になる

譲一は能力の多用により多大な精神力を消耗している

光は油断した結果、一発の攻撃が体力を奪つていった

（どうやら、空間に作用する能力はデメリットも多いらしいな…スピードもパワーもキューブと同じぐらい…これ以上の消耗を奴が望まないことは明白…ならば真っ向からの殴りあいか）

（キューブというスタンド…群体型にしかや手応えが無さすぎる…まるで暖簾を殴り続けるようだ…能力を使ってもひびひとつ入らないし門も開かねえ…絶対的な無効化能力…だが、奴は俺を見て決着を仕掛けるはず…なら小細工なしだ…ぶつ倒すッ！！）

「キューブッ…！」

立方体もまた集まり、人型になる

光もまた能力によつて戦いを繰り広げていたに過ぎなかつたのだ

角張つた白い巨人と傷だらけの青い巨人を携えた二人の戦いは決着のときを迎える

一瞬の間を置いて

「「オオオオオオオオオオオツッ！」

「オラアツ…！」

二人は拳を繰り出した

拳は少年達の互いの頬を穿つた

二体のスタンンドも互いの頬を撃ち抜く形で

## 青玉と金匱石と立方体？（後書き）

うつと…まだ、まだなか描[写]を追加してきれいにまとめられそう  
な気がするんだ…

まともな戦闘と譲一の過去をカミングアウト

光はシスコン

なかなか力オスなことになつてんな今回の話…

ど う し て こ う な つ た

次回で姉弟の話は終了

そのあとから大きく物語が動き出します

で、一旦藤城譲一編？は終わり、転生者目録を挟んで矢口亮編？が始まつていいくと……流れはこうなります

もしかしたら案を頂いたスタンンドや転生者達を早くに使う可能性が

ありますね…

それにしてパープルヘイズ面白かった

パープルヘイズつええ…

短かつたけどよかつたよかつた

では次回にてまた

青玉と金剛石と立方体？（前書き）

ナンテコツタイ

青玉と金剛石と立方体？

「ぐ…」

「あ…」

二人揃つて彼らは倒れそうになり、膝に力を入れて踏ん張つた  
口からは血がこぼれ出す

「ハア……ぐ、しぶといなおまえ…」

「おまえ…こそ…な…」

虫の息なのに一人の顔にあるのは笑みが張り付いている

だが、確かに決着はついたのは分かつていた

勝敗は分からぬけれど戦いは終わったのだと

「俺は…前世じゅうじょうもないクソガキだつた…親もなく、ただただクソ以下の生活を過ごして…死んだ…生き返つてさ…す

つげえ当たり前の生活が、すっげえ幸せだつたんだ……だから、小心者のように他人にへーこらしてもバカみたいに生きてみたい……強いのは疲れるだけだ……スタンドなんてもの持つてても俺は今の生活にいらねえ……黙つて静かに平穏に生きる……そう決めた……これからも変わらない……なのにいつの間にか、誰かを排除して無かつたことであれと目を背けて蔑ろにして忘れて生きようとした……汚い生き方だ……こんなので平穏に生きても、いつか、最低な人間と言われる……前世と根っこが変わんねえ生き方をするとこだつたぜ……

譲一は息を吐き、その場に座り込んだ

瘦せ我慢するのもめんどくさくなつたのか光も同様に座つていた

「その根っこが変わらない生き方をしてるんだつたら……俺あんた手段使つても確実にぶつ殺してやるといだぜ……

「おつかねえの……なんかお前に認めてもらひはずが、随分と世話になつちまつたなあ

さつきまでの争いは嘘のよう二人は長年の友人のように笑いあつたのだった

そんな一人の影に忍び寄る者がいた

そして背後から現れた巨人は一人を思い切りどつく

「ハハ」あつーー?」

「いたああつーー?」

完全な不意打ちになり二人はどつかれた箇所を押されて転げ回る

犯人は光の姉、由香

そしてそのスタンンドの仕業であるのだが

クレイジー・ダイヤモンドのパワーは非常に強い

殴れば車なんて数秒でスクランプに変えるぐらいいである

そんなパワーで、小学生ボディの、しかもさつきまで戦ってボロボロになつた少年一人をどついたらどうなるか

言わずもがな悶絶ものである

何故こんなことをしたのか

答えは簡単、由香が怒つてゐるからである

「二人ともそこ直りなさいーー!」

「「せ、せこ……」」

しかもかなりマジで怒っていて、クレイジー・ダイヤモンドが見下るとしているのすごい威圧感である

まるで「ガガガガガガ」と擬音が出てくると錯覚するほどの迫力に光は涙目になつながら素早く正座を、譲一はかきあげていた髪をおろしてただの地味で氣弱そうな少年に早変わりしていた

「光、あなたは私のためだと少しもやりすぎです!」

「だ、だけじゃれば必要な」とつて……」

「私を免罪符にしない!ぶつ飛ばしますよ!」

「「」」めぐなさ」

「それと……」

「え?あ、じょ、譲一です」

「うそ、譲一君も手加減しないにも限度があります!」

「セレは……男と男の決闘ですから……」

「そんなこと知りません!婿に行く前に傷物にしたら至んだ形にしてやりますよ!」

「調子に乗りすぎですこませんでしたあーーツーー！」

光速の土下座を繰り出す譲一

先程、低姿勢な生き方をすると聞いていた光はその素早さに少し引いていたり、さつきまでチンピラみたいな奴がここまで変わったと驚いていたのだった

その後の少年達はたつた一人の少女に延々と説教をされる

言い訳しようものならクレイジー・ダイヤモンドに殴られるのは目に見えていたから

そんな拷問のような、嵐のような時間は過ぎ去り唐突に説教が終わる

「反省してくださいね…？一大事になられるのは嫌だから

「本當にすみませんでした」

そつ言つて、クレイジー・ダイヤモンドで撫でる

それだけであれだけ戦つた一人の傷も汚れも何一つなくなる

当然痛みなどない

この世のどんなことよりもやさしい能力と称された直す力を体験して譲一は内心感動していた

ふと、譲一はおかしなことに気が付く

「……胸？」

なんか、レバ、クレイジー・ダイヤモンドにはないはずの凹凸ある胸があるとこいつが、ぶら下がってるとこいつが、なんとこいつか

譲一は手を擦り、しつかりとクレイジー・ダイヤモンドを視界に收める

胸だけではない

全身が女性らしく丸みを帯び、逞しさは微塵も感じられないほど何処か可愛らしい印象を譲一に与えた

そう、それは見間違いではない

クレイジー・ダイヤモンドが、女性になっていた

「…………？」

もつ一度、田を擦る

クレイジー・ダイヤモンドが、女性になっていた

「おーまこじつび……

いきなり混乱しあじめた譲一に由香も首をかしげる

譲一が何故混乱しているのか光は気付いて話した

「それは確かにクレイジー・ダイヤモンドだが、本人（東方仗助）のとは違う姉さんだからだよ こいつを俺はシー・クレイジー・ダイヤモンドって名付けた」

「ああ…でもめんどいですよその名前、普通にクレイジー・ダイヤモンドでよくないですか？」

「まあな、俺も姉さんも普段はまんまクレイジー・ダイヤモンドって呼んでるし、フルネームで呼ぶ必要はないよ」

「??」

何故驚愕を「」えたのかまったく分からぬ由香は一人、首を傾げて  
いるのであった

そんな由香を見ながら光は譲一に話しかける

「姉さんはいろいろと甘いから、何処の誰がよからぬことに利用  
しようとするとかわからねえ……しかも、俺が言うのもなんだが姉さ  
んは美少女だから変態もにじりよつてくるに違いない……絶対に、  
絶対に姉さんのスタンドがクレイジー・ダイヤモンドってばらさな  
いでくれよ?」

「わかつていますよ……どんなことがあってもこの情報は漏らしま  
せんよ」

いくら姉の為といえ、過保護すぎるのと光の鬼気迫る表情に譲一少  
し引くのだった

ついでに心のなかでもう、お前が変態だと譲一は呴いたのだった

日が暮れる手前まで三人で話して友達になり、解散することになつ  
たとき光はあることを思い出して譲一を引き留めた

「譲一！」

「なんですか？」

「最近、スタンド使いに片つ端から戦いを挑んでくる紅いスタンド使いの噂を聞いてないか？」

「紅い、スタンド使い？いいえ？なんなんですかその、通り魔みたいな方は」

「何かを探してるみたいでよ、スタンド使いの強さを測るようなことをしたりするらしい」

「こいつがえらしく強いらしくてな？デバイス持ちで、魔法とスタンドを使って反撃する間もなく相手を倒してしまつんだ 現に俺の友達も何人か襲われてあっさり倒されちまつた」

「彼らは無事なんですか？」

「一応な、再起は可能だが……話から聞くにスタンドの特徴がバラバラなんだよ……腕や足だけに襲われたとか、デカいカラスとか、ムカデの大群だとかな……直接戦つとてスタンドのタイプがまったく分からんんだ」

「不気味……ですね」

「たぶん、転生者（スタンド使い）の中で最強かもしないぜ……気を付けるよ」

「わかりました」

お前が心配なんかじゃないんだからなー！勘違いするなよー！と正直、勘違いしたくなる捨て台詞を残して姉弟は譲一に背を向けた

一度、戦った相手を忠告（心配）するとは、光は随分と優しい性格をしている

やはり光も由香も姉弟なんだなと譲一は思い、

「由香さん……か……髪の毛……触りたかったな……」

前世から続く悪癖を漏らしてしまった

スタンドのおかげで五感が普通の人より鋭敏になっているため譲一の言葉は聞こえてしまったわけで

ボソリと聞こえたその言葉に光は姉ににじりよる変態は案外近くにいるのかもしれないと若干警戒し、その由香本人は、自分の髪を触つてそんな触りとなるような髪なのかな？とあまり自分に危機感を感じていなかつた

「た、ただいまー

ね、眠い！

クレイジー・ダイヤモンドで傷は治せても疲労はなくなる訳じゃないといつのを考えて無かった…

少し休めば平氣かと思ったが、小学生でしかない俺にはまったく無意味だった

とにかく今すぐ眠りたいのだが、居間の方向より漂ういい臭いがなんとか意識を繋いでくれていた

「む、藤城か」

「ああ…シグナムですか…」

居間に向かってあるいていくと、風呂場の方よりシグナムが現れた上がったばかりか、顔に赤みを帯びており、湿った髪とマッチし

て凄い色っぽい

「大丈夫か？えらく疲れてるみたいだが……」

「もう見えます？」

「あまりにも霸気が無いのでな」

正直ヤバイんだよね……頭が考えることまだまともにかこない  
居間にしつづいて、ヴィータとシャマルがはやての夕飯の準備を手伝つて  
るみたいだ

……ヴィータがいるのはシャマルが余計なことしないよなって  
に頼まれたに違いない、そーに違いない

「お、譲一君おかえり……ってなんやねんやねんやねん？」

「……眠い」

「あはは、なままだ出来るまで時間あるからソファーで寝とれ」

「おやすみー」

「寝るの早いこなー」

ヴィータの突つ込みが聞こえたのを最後に俺は一度、深い眠りについたのだった

……目を覚ましたら何故かシグナムに膝枕されたり、そんな俺をはやてやシャマルが荒い息で写真を撮っていた

寝顔が可愛かったとか寝言が可愛かったとか焼き増しするで…とかお前らいつかひでえめにあわせてやるから覚悟しやがれよ

シグナムも顔を赤くするほど恥ずかしいなら膝枕しなくてもよかつたのに

ヴィータも今食つてんの俺のアイスじゃね？ねえなんで目をそらすの？

あといつも思うんだけどザフィーラもダッグフード食わされてるけどお前はそれでいいのか

そのあとは何事もなく夕飯を食べて風呂に入り、就寝

今日の光との戦いが嘘のように静かに一日が終わる

俺はこれから先もこの日常が続していくものだと信じていた

はやてが倒れるまでは



青玉と金匱石と立方体？（後書き）

ナンテコッタイ、ナンテコッタイ

譲一、重度の髪フェチ

女性版クレイジー・ダイヤモンド

これが予想できた人はどれだけいたのでしょうか

姉弟は譲一パーティに入ります

あと1話で藤城譲一編？が終わり、矢口亮編？スタートです

矢口亮のストーリーにて募集して貰ったスタンダード案を少し使おうと思います

亮君はラッショウの掛け声とかどうしよう

WRYYYYYYYYにするわけにはいかんしね……



約束を違えてでも（前書き）

藤城譲一編？エピローグ

そして次の矢口亮編？プロローグ

なのでぶっちゃけ短いです

約束を違えてでも

建物の屋根を渡る影が一つ

桃色の髪を靡かせて夜の町を駆け抜け抜けていたのはシグナムだ

格好も私服ではなくバリアジャケット…騎士服になつた姿でだ

彼女の表情も戦士のものに戻つてゐる

そんな彼女はある場所に辿り着く

その視線の先には、守護騎士全員が揃つていて

いや、正史ではないこの物語の中にさうにまつ一人いる

紺色のパーカーを着た一人の少年がその場にいた

逆立て、後ろに撫で付けられた髪

普段は見せない鋭い眼光を覗かせ、いつもの笑顔は微塵も面影がない

「無事に集まつたな」

「……時空なんたらの田を掻い潜るためとはいへ、小学生の俺には夜中の活動は堪えるぜ…」

「譲一君、無理しなくてもいいのよ」

藤城譲一がその場にいた

時は遡る

滅多に使わない念話といつ魔法を受けた譲一は学校を早退した

はやてが倒れた

ただの立ちくらみだとはやはては言つが、その日以降から守護騎士達の様子がおかしくなつた

変わらない日常に見えるが違和感を感じた譲一は暫くして守護騎士達を集めて問い合わせし、彼女らがはやてと交わしたはずの約束を破つていたことがわかつたのだ

はやてと譲一の二人と過ごした日々が闇の書によつて壊されようとしている

だから彼女を唯一助けられる方法を、約束を違えてでもやうねばならないのだ

それを聞いた讓一は何を思ったか

「テメーら…はやてとの約束を破つてでもとか言つたが…聞けば犯罪行為つていうじゃねえかよ？それで、もしあ前らの誰かが傷付いたりしたら悲しむのは、泣くのは、はやてなんだや？ちゃんとわかつてんのか？わかつてねえよなあ？はい正座！お前ひざになおりやがれえッ！」

守護騎士達を全員正座させた

ついでに何故か髪の毛を触られた

ヴィータに限つてはもつと丁寧に髪の毛を洗いなさいなどと忠告までされた

話は脱線したが、讓一は少し考えた後に

「決めた、俺も共犯者になつてやるよ」

「なーまで藤城！考え方ー！」

「やつよ譲一君！危険な事なのよー？」

「譲一お前、デバイスを持つてないし、魔法だつて念話しか使えねえんだぞ！」

「こくへり組手をするとほこえ、無謀すがむる

「ああ～やうだな…」

譲一は頭を搔くと、おもむろに服の袖を捲し上げる

いきなり向をしてるんだと舐な想ひと信じられない光景を見た

ビシリ、ビシリと腕に次々にひびが入っていく

「ハハ、これは…」

「お、おー…譲一お前それ…」

「生憎と俺もシグナム達みたいに普通じゃねえぞ？むしろバケモンだよ俺は

すでに譲一の腕は叩き潰されたガラスのようなひびが入り、肌色より黒色の比率が上がっている

なんでもないよつと譲一は言つが異常すがむる

「い、痛くねえのか？」

「全然痛くねえよ？俺は空間そのものをぶち壊して門を作ることができるんだよ……ひびは見えるが、スタンドは見てねえみたいだな……」

ヴィータの問いかにあっけらかんとしてる讓一は手のひらを上にすると、ひびの間にからアイスが突き出していく

そのアイスをヴィータにあげると腕のひびが瞬く間に塞がり、少年相応の腕に戻った

「……こんな風に、俺は俺専用の空間に物を仕舞つたりもしてるんだが、そこの中に闇の書を入れておくぞ？時空……なんだかにばれても俺が取り出して持つてりやあ、はやてが持ち主つてばれない寸法だが……どう？」

「どうつて言われても……」

「……藤城は我々が思つてこるよりも強い……協力してもらおう」「ザファーラお前まで……」

「安心じる、俺はそんじょそこらの奴にや負けねえよ」

それに……0秒の戦いができる奴なんて魔法を使おうがそつそつといだる「うへ」

彼の言葉に首を傾げつつもシグナムらは譲一の説教を受けて、じり押しされて共犯者の仲間入りを認めるのだった

ヴィータが譲一から貰つたアイスをちゃんと食べ、正座の説教曰以來髪を丁寧に洗うようになったのは完全な余談である

さらに慣れない正座に、ウォルケンリッター一同、足のしびれに悶絶していた（特にシャマルが）のも余談である

夜の町並みを見下ろしながら譲一は今回の方策をそしてこれからの方針を練る

「…………今の蒐集のペースじゃあけつとばかしやバイよな……」

「藤城のこつ通りだ……少し対象を増やすか？」

「それもいいんだがなあ……そここやヴィータ、わつきいい獲物を見つけたみたいだが」

「ああ、ヤンナの奴が」

「…………ひとまずは蒐集するぞ?……後、蒐集の対象を増やすつてザフィーラの案も検討しようつて手に別れると思うが編成は考え付いたら念話で伝える」

譲一はフードを深く被る

それを合図にするように、ウォルケンリッターが動き出す

「…平穏を侵すはなにも人だけにあらず…ってか? やれやれだぜ」

一人だけになつた譲一も風が吹いた瞬間には跡形もなく姿を消して  
いたのだった

誰もいなくなつたビルの屋上にある貯水槽

その影から一体の異形が現れる

真つ黒なシルエットに背には卒塔婆を背負い、まるで生ける死者の  
如くゆらゆらと体を揺らしていた

「フム…ドウヤラ物語ハ始マツタミタイダナ…コチラモイソイデ  
計画ヲ進メネバナラナイ…大人シカツタ奴ラモ動ク…カ…」

その四肢をついたような姿勢のまま歩み寄った場所は先程まで譲一達が居た場所だ

この異形は彼らを見ていたのだ

「藤城譲一……マツタクノノマークダツタ……スタンドノ全容  
ガ捆メズトモ能力ガ強スギル……ココハオレモ直接出ナケレバナラ  
ナイ……恐ラク奴ニハ流レヲ変エルホドノ力ガアル……シカモ、  
発展途上ノヨウニモ感ジラレタカダ……物語ニドノヨウナ支障ガ出  
ル力読メナイナ」

異形は闇にドロリと溶け出す

影に吸い込まれるようにそれは消えていく

「藤城、譲一……フツ・サシズメ、コノ歪ンダ物語ノ『ジヨジヨ』  
ト言ツタトコロカ……ヤハリ、オマエハ主人公ノ座ニスラ座レナイ  
ンダヨ富出庵」

完全に闇に溶けて静寂が訪れる

そしてその場に人気は今度こそ無くなつた

物語は加速していく

## 約束を違えてでも（後書き）

まずは藤城譲一の「紹介みたいなもんですね藤城譲一編？」は  
またスタンンド使い達の原作裏での「ざいざいぐらい」です

まだ転生者達は小学生三年から五年くらい

大きな事件はまだ、なんです

次回より矢口亮編？なのですが先に転生者目録を挟んでからになりますね

矢口亮は強者を倒す策略を巡らしますが…果たしてどうなるのか？

フラグが立ちかかってるフェイトとの関係は？

そしてOHANASHIはやつぱりされるのか？

…………それるんぢろいづなあ合掌

それと矢口亮編？でオリジナルスタンダードの案を一部採用します  
案をくださりありがとうございました

あまり役に立たない人物紹介2

とスタンド紹介

藤城 謙一

主人公

色々力ミングアウトしたが、実は若くしてたくさん人を殺めてた事が発覚

平穏の為に戻るにして、誰にも話さないように秘密にしていた

光との戦いで、奪つてきた命から田を背けたまま平穏の礎にしていた自分を戒めた

実は柊由香が気になつてしかたがない

ついでに髪フェチ

はやてはすでに毒牙にかかってる

小物な少年

スタンドを手にいれたことでいい気になつた結果、痛い目にあつた

矢口亮にギタギタにされた転生者の一人

矢口を始末するためとハ神家の女性陣を自分の女にすべく行動

一緒にいた譲一に普ツツンして挑んだら再び病院送りにされた

今は入院先の女性看護師にセクハラする日々を送る

再起可能でも、原作介入は諦めた

柊 光  
ひいらぎ みつる

柊姉弟の弟

どうあがいてもシスコン

譲一同様、静かな人生を送りたい

姉と共に一人だけで生きてきた

姉に頭が上がらないように見えるが女性なら誰にでも頭が上がらない

キューブというスタンド操るかなりの実力者

立方体に変えて戦うのが主なスタイル  
ブロック

人の目を見て内面を見よつとする癖があるが、ぶつちやけ一種のセクハラである

姉には恋愛感情を抱いている節も

柊 ひいらぎ  
由香 ゆか

柊姉弟の姉

弟思いなだけでブラコンではない

ポニー テール前髪ぱつ つん大和撫子な美少女

おつとりしてたりおてんばしてたりするがどっちなんだお前は

あたふたする様を見たいが為に譲一に弄られるようになる

やや人見知りしやすく、争いを好まない、何処か小動物っぽい、譲一曰く天使

ただ、大切なものを傷つける相手には勇敢になる

転生前はジョジョをあまり知らず、唯一知っていたクレイジー・ダイヤモンドが欲しいと言つたらマジでもらつた

譲一の気持ちには薄々とだが感づいている

## 登場スタンド一覧

### スカーサファイア

近接パワータイプの大型スタンド、本体は藤城譲一

普段は譲一のからだの中に潜んでいる

青い肌に全身に大量の傷がある

全身の傷は譲一が前世で実際に受けた傷跡なのだが譲一は気付いてない

顔にはベルトが巻かれ、その隙間から目が覗いている

戦闘中に目を塞いであつた鎖は目を背けていたために存在していた

現在は鎖は消滅している

持続力	A
破壊力	B
スピード	B
射程距離	C

精密動作性 A

成長性 B

能力

空間に門を生み出せる

門は壊すことで空間を切り裂くひびとなり、そのひびの入る方向を定めることも可能

ひびはあくまでも攻撃ではなく空間にひびが入つただけである

このひびは質が悪いことに射線上に何があろうと切り裂いてしまつ

つまり防御不能の災害である

人を殴るときに顔を殴ると何故か相手の体は砕け散る（この攻撃では死はない）

さらに顔以外を殴ると不発に終わった能力の行き場を失ったエネルギーが衝撃となつて体内から襲う（ダメージの加減は可能）

能力の性質上、クレイジー・ダイヤモンドが最大の天敵

門も厳密には空間を壊して作ったものであり、ひびも直せてしまうため

## フライングジャズ

意味不明型のスタンド

本体は小物な少年

鳥のように見えるがクラゲのようにも見える

全身は羽毛だらけでもふもふしている

先端に刃のついた触手を隠しており、その数は本体も把握できない量

破壊力 無し  
スピード 無し

射程距離

持続力 A  
精密動作性 A

成長性

A

## 能力

本体、スタンドの触れるものを飛ばすこと

本体がダメダメだったのでその真骨頂を發揮できなかつた不遇のスタンド

飛ばすものは何も触れるものでなく自身達を飛ばせ、扱いがわかれ

ばフェイト達並の高速戦闘をも可能

さらに飛ばす能力の恐ろしさは相手の空気を飛ばして真空状態にしてやることも可能という点にある

気付かなかつたというか能力を理解しきれていない少年は宝の持ち腐れもいいところである

## キューブ

近接パワータイプの大型スタンダード、本体は終光

初登場時は能力によつて全身を立方体にバラバラになつた姿

実際は白い角張つた大型の姿をしている

成長性	C	破壊力	B
精密動作性	A	スピード	B
射程距離	C	持続力	B
持続力	B	精密動作性	A

能力

立方体になる

全身を大小様々な立方体に変えて操ることができる

空中の足場にしたり、盾にしたり、突撃したり応用が効きやすいのでもっぱらこの立方体の姿である

この状態のキューブは一切ダメージもスタンンド能力も通さないので防御に非常に特化している

この性質を使った防御力はスターライトブレイカーでさえ防いで見せるたぶん

人型時は、殴った箇所を立方体で閉じ込めることが可能

心臓を殴れば血が供給されなくなるのでえげつない戦いかたになる

姉、柊由香を守りたいという想いが防御に比重を置いた能力になつた

非常に強い想いが形になつたが姉弟の過去に何があつたかはいつか明かされるかもしれない

シー・クレイジー・ダイヤモンド

近接パワー、人型スタンド、本体は柊由香

スタンドというものをあまり知らない由香がたまたま知っていたクレイジー・ダイヤモンドを望んだ

が、本人（東方仗助）ではないためにクレイジー・ダイヤモンドが女性化した

命名は光、たじしめんぢくさいので大抵はクレイジー・ダイヤモンドで通している

見た目は非常に変わつており、可愛らしくなつてている

クレイジー・ダイヤモンドの面影はほんの少ししか残つていない

ステータスも能力もクレイジー・ダイヤモンドのまま

感情が何かしら高ぶると歪んだ形に直してしまつ点も一緒である

最近忙しくなつてきた…

更新はもともと不定期でしたがさらに不定期になりそ�です

そんな不安を抱えつつ今日も今日とてモソモソ書いてます

リリカルなのはにいかに人間讃歌を入れようか模索中ですのでもつと自由な時間が欲しいものです

強者へ挑む者（前書き）

時は遡つて矢口亮編？スタート

SIDE 亮

大きな一軒家の一室に転移していく

そこでバリアジャケットを解除してデバイスをベッドに放り投げる

「クソオツ……何故だッ！？何故勝てないッ！？何故、倒せない  
んだッ！？」

何度も何度も俺は壁を殴り付ける

今回こそはと挑んだ

相手は作戦にはまり、死んでくれるはずのものを余計な闖入者によ  
つて無駄にされたのだ

「高町なのは……何故……庇つた……？人の死ぬ姿を見たくないためか？」

トライップにかかつた富出庵をあと一歩で首をはねる」とが出来たのに  
横から現れたアクセルショーターによつてそれはなされなかつたか  
らだ

「どうして…？今、非殺傷設定を解除して斬ろうとした！貴方に何  
があつたのかわからない！けれど簡単に人に傷付けちゃいけないよ  
！」

「どけ！高町！どんな理由があれ、そいつは倒さなければならぬ  
んだ！」

「どかなことよ！そんなことわせやしない…！」

「く…高町なのはアアツ…！」

はあ…結局俺は彼女を退かせることもできなかつた

紅い魔導師、その正体をなのは達は知らない

だからこそ、たつた今届いたビデオメールを見て胸が痛む

『なのはと、戦つたんだつてね…あのね…私には何があつたかわ  
らないけれど、あまり、無理、しないでね』

フェイトは、正体を知つてゐる

アルフ、プレシアも知っているんだ

富出庵を殺害しようとする」とも

早速、フェイドを悲しませてしまったな……

暗い気持ちに落ちる俺は携帯を開いて日付を見ると6月1日になつていたのに気が付いた

「むすゞ、6月4日……間に合わなかつたな……」

それはある少女の誕生日

そして物語が再び始まるきっかけ

出来れば、その前に富出庵を殺すとしてやつたかったんだがな

とにかく、なのほどの戦いと復帰した富出の攻撃で傷付いた体を治さなくては……

「マスター……」

一匹の山猫がベッドの上に座っている

わつかの声は彼女が発したものだ

「…リースか

「少しほお休みなさつてください…何度も怪我を負われてはたまりません」

「善処しようつ…」

やはり、個人では限界がある

プレシアの事件に糺余曲折あつて俺の使い魔になつたリースのバッカアップだけでは無理がある

なら、俺の仲間を増やすしかない…か

スタンド使いの仲間をな

スタンドには可能性が多くある

奴がスタンドを知らない、見えないといつのは最大のアドバンテージだ

それを生かしてバリアを抜き、察知されないまま倒す

難度は高い……が、この札を今切るしかない  
確か、学校にはスタンド使いが何人か入っていたな……そいつらから  
選別するとしようか

その為にまずはリストを作るとしよう

「リース、少し手伝つて欲しいことがある

「なんなりと」

俺は紙を取り出すと作業を始めるのだった

暫く役に立ちそうな人物のリストを上げていると『デバイスに連絡が  
入る

相手はクロノからだった

内容はミッドチルダで騒がしていたある事件の犯人が地球に逃げた  
ということだった

「…………デバイスイーター事件……」

犯人と思われる、浮浪者のような人物

その写真を見続けていた

SHDE out

6月5日

夜の街の中をじりじりと歩き回る浮浪者が一人

全身をボロ布を何枚も纏つて、擦りきれた靴をならしてよろよろと歩く

隙間から除く青い瞳はまるで何かに怯えていたように動いている

とりあえず、浮浪者は休める場所を探していた

一文無しの浮浪者は路地裏に曲がり、奥へ奥へと進む

少し開けた空き地に出ると回りの目を気にしながら何故かバラバラになつているドラム缶を過ぎて廃材などの置かれたビニールシート

の場所に腰を下ろした

「やつと…やつと帰つてきた…でも、どうしよう…」

ぼそり、ぼそりと紡ぐ言葉には不安が混じつてゐる

その瞳からは今にも涙が溢れそつた程に

「…………ミッドチルダから逃げ出して、よくもまあこゝまで逃げお  
おせられたなデバイスイーター」

「…つー?」

顔をあげるとそこには顔をフルフェイスメットで隠された紅い少年  
が巨大な槍を肩にかけて佇んでいた

こんな近くになんの気配も無く現れるのは異常だ

いや、気付けば回りが結界に覆われている

（こんなことにも気付かないなんて……いや、気付けなかつただ  
けか…）

「ふむ、もう逃げる算段をたてているか…それとも、こいつを喰う

算段の方をたててているのか?」

「…………」

「…………だんまりか?何かアクションぐらいしてほしいんだがな」

紅い少年が肩を竦めると同時に少年は咄嗟に後ろにバックステップをとる

そこには大量の魔力球が撃ち込まれたからだ

立ち上っていた土煙が、少し晴れると浮浪者は座つたままだが手をあげると次々に魔力球が増えしていく

「おいおいなんだこの魔力球の数は?冗談であつてほしいんだがな

もはや幾百もあるその球が並んでいくその光景は圧巻ではあるが、動こうとすると身動き一つ出来ない

何事かと見れば大量の多種多様なバインドが少年の足を縛つていたのだ

それだけでなく腕ごと槍にも地面から伸びるチーンバインドが絡み付いて振るうことが出来ない

その動けない様子を確認した浮浪者、デバイスイーターは魔力球全

てを叩き付けた

あれだけ魔力球を叩き付ければ並の魔導師では立ち上がりがないだろう

（あとは……あいつのデバイスを……）

しかし、デバイスイーターには相手が悪すぎた

土煙の中から異様に細く、巨大な腕がぬうっと伸びたかと思つてバイスイーターの小さな体を驚撃みにした

さらにもう一本現れた腕が虚空を掴む

「か……はつ……」、「これは……」

「……暗闇は俺の影を強くしてくれる……」

はつとデバイスイーターが声のする方を見るとそこには少年が埃を払うしぐさをしながら歩いてくる

彼は身動きが出来ない状態であれだけ魔力球を浴びたのに無傷だつたのだ

「魔力球の数は見事だつたが種類も構成も威力もバラバラだつたな？あんなものでは俺は倒せない……それにしても」

デバイスイーターをとらえていない腕に妙な生き物がいる

目と思われる部位は渦を巻いたような目をしており、手なんか足な  
のかわからない部位がぶらぶらしている

デフォルメした何かの怪物のようなそれの一一番の特徴はギザギザに  
裂けた大きな口だ

「…たしか、何も居ないところからデバイスが何かに喰われていく  
という証言だつたか…残念だつたな？俺にはこいつは見えてる」

「そん、な…」

「次々にデバイスを喰らつて、魔法を学習…転移魔法を覚えて地球  
に来たということか…被害にあつたデバイスは67機、違法改造さ  
れたものや廃棄されたデバイスを合わせれば何機になることやら」

「ぐ、うう…クリエイトブルース…！」

デバイスイーターが最後の力を振り絞るように咳く

その時に捕まえていたはずの珍妙な生物は口を大きく開いたかと思  
うと中からたくさんの杖が現れる

そのそれぞれの先端に魔力が集まつていく

デバイスイーターがやつてているのは、曲がりなりにもなのはの魔力  
収束に似ていたのだ

放たれたのは巨大な腕に

「ぐつ！？」

少年の腕にも衝撃と痛みが伝わる

拘束の緩んだ腕から落ちてきたデバイスイーターは地面に叩きつけ  
られながらも這いながら脱出しようとしていた

しかしそれすら叶わない

デバイスイーターを挟むように何かが地面に縫い付けた

その時にいくらかボロ布が破けてしまつたが少年はお構いなしだろう

少年は痛みを我慢しながら槍を彼女に投擲していたのだ

しかも槍は4つの爪に半ばから別れてデバイスイーターが身動きできないように

「収束砲何てものを使うならせめて非殺傷してくれっての……」

文句をいいながらやつて来るその姿にさらに恐怖を感じたのかデバイスイーターは、クリエイトブルースを動かそうとした

しかし、なにも反応を示さないことに顔をあげると撃ち落とした腕がクリエイトブルースの口が開かないように押せえている

「やめておけよ　お前はもう詰んでいるんだ…　余計な真似をすればお前をこのままバラバラに出来るんだぞ？」

ガリガリと地面を裂きながら迫る爪を見てビクリとする

デバイスイーターはもう敗北したのだ

「ところでお前を捕まえといてなんだが、このまま管理局に引き渡されると俺と一緒についていくの…　どうがいい？」

雨が降りだした中、少年は訳のわからなことを訪ねるのだった

強者へ挑む者（後書き）

フルフェイスメットって正直不審者感バリバリだよね  
亮そのうち通報されそうだ

亮のスタンドはたぶん次話で紹介すると思います

デバイスイーター事件なんてオリジナルですが、正直都市伝説みたいもんですね

被害者も管理局員じゃないです

こちらは本編を進ませます

亮達やなのは達から見た譲一を見ることになりますね

ついでに言つておくと矢口亮は腹黒いというか灰色な人間です

冷徹になりきれないのに冷酷であるうとする

善人にも悪人にも成れない中途半端な最低な奴なのがどうかわからん変人

そんな彼はどんなことをやらかしていくのか

あとは矢口亮にはサポートとしてリースを連れてます

たぶんキャラ崩壊しますすんません

## デバイスイーター？（前書き）

前後編に分けました

生暖かい田で見守つてください

## デバイスイーター？

普通の年相応の男の子の部屋と分かる中に場違いな者がそこにいた

ボロボロの布を纏つたデバイスイーターだ

デバイスイーターは今現在どうじつになつたのか訳がわからない

あのフルフェイスメットの少年がした選択

前者が嫌だつたから後者にしたのだがなんの拘束もなく、転移に次ぐ転移で連れてこられたのだ

デバイスイーターはつくり地球まで裏の組織が自分を狙つてきたのだと思つていたのが…

キヨロキヨロとしていると部屋に人が入つてくる

「そんなに俺の部屋が珍しいか？至つて普通だと思つんだけど」

一匹の猫？と共にラフな格好をした少年が現れる

フルフェイスメットの下の精悍さと幼さの混じつたその顔を見てさ

つきの選択といふことなん變な奴だとテバイスイーターは思った

「うーん……いつまでもその格好は悪いな……」

「？」

「……」

「……」

「まあいいか……ほら、着替えあるからそっちを着なさい」

「……」

ボロ布を捕まれた瞬間必死にボロ布をとられまいとするテバイスイーター

だが少年、矢口亮の方が力が強いのかあっさりとそれは剥ぎ取られてしまう

しかし、それがいけなかつた

「あ

「……は、……あう……つー」

手入れの一切されてないボサボサの膝まで届きそうなくすんだ金髪  
あまり日を浴びてないのか病人のよう肌が白く腕は細い

そして

服どころか下着も一切身に付けていない産まれたままの姿

言つてしまえば、裸だった

しかも少女の

「へへへッ！－！」

呆然としている亮を他所にボロ布を引つたくつたデバイスイーター  
は体を隠すように纏つた

亮も見た田は少年でも中身は前世と合わせればおっさん手前のいい  
大人である

だが、精神は身体に引っ張られるというのであるうか

男子子相応にその裸体をマジマジと見てしまったわけ

「……お前……女、だつたのか……」

「……」

デバイスイーターの少女の少し隈のある青い瞳は羞恥からなのか怒りからなのか、わからないが今にも涙が溢れんばかりに潤ませている

顔も同様に真っ赤に染まり、恨めしそうに亮をにらんでいる

……この沈黙が痛い

亮は亮でどうすればいいか思考停止している

カチコチと進む時計の針の音がはつきりと聞こえるほどその場は静まり返っていた

「……」

「……」

「……ヘンタイ」

「つー」

「……セクハラ」

「つづー」

「……ロココン」

「それはないだろーー？」

「…マスター？」

「ハツ！？違うんだリース！これは何かの間違いなんだーー！」

ドスの利いた声が亮を呼んだ

錆びて壊れた人形のようにギギッと首を動かしてそこを見るといつの間に人の姿になつたリースが、鬼がいた

がつしりと襟を掴むと部屋の外に連れていかれる亮

「……ドナドナ」

その様子を見ていたデバイスイーターはそう呟いた

その直後になにかを引っ搔いたような生々しい音と、亮の悲鳴が聞こえたのだった

「セツキは済まなかつた」

「わの別に……」

顔に残る引っ搔き傷をリースに治療されながら、未だにボロ布を纏うテバイスイーターの少女に謝る

とこうか女の子なんてわかんなかつたんだよ」  
「ほんにリースときたら本気で引っ搔くなよ

ジロリとコースを見ればやり過ぎたのをわかっているからか苦笑い  
俺が悪いのはわかつてこねかどやられた」  
「ほんまつもんじやないつての全く

「……っくしゅん」

「……服、着替える前に風呂入るか…リース、風呂を沸かしておいてくれ」

「わかりました マスター、セツキみたいな」としおりやこけませ

んよ?「

「わかつてゐよ」

部屋を出たリースを見て、改めてデバイスイーターを見る  
随分と布を大切にしているみたいだきゅううひと抱いているな

しかし細い、細すぎる

まともな食事すらできてないのか

「デバイスイーターなんて通り名じやなくて名前、教えてくれない  
かな」

「サリィ…サリィ・マレイヤ」

「うん、俺は亮、矢口亮」

「あ、きらっ。」

「そう亮、よろしくサリィ」

クロノから貰つたデータの詳細はこうだ

元々、クロノが別の事件を起こした犯罪組織を追つていたのが奇妙  
なこの事件の始まり

クロノが他の局員と一緒に検挙しに行つたときに何故か連中の持つていたはずの違法デバイスが根こそぎ無くなつていたのだ

クロノは隠したのだと思っていたが、組織の構成員はデバイスを見えない何かに喰われたと証言

そんなことあるわけないと思つていたが、クロノと同じ捜査チームに入つて了一人の局員がデバイスが何かに喰われるという流行りの都市伝説みたいだと漏らした

クロノは気になつたのか独自に調査

結果、これまでにさまざまな場所でデバイスを喰われている場所が固まつてしていることと決まって喰われる時間が決まつてている

都市伝説で片付けることは可能だつたが、試しに現場を特定してみたところ、一人の正体不明の浮浪者が関わっていたのが分かる

映像も洗い直してみると確かに何かにデバイスが喰われている映像を発見した

直接追つてみたが捕らえることが出来ない

そして正式に被害届が出たことでデバイスイーターは指名手配になり、これは都市伝説ではなく『デバイスイーター事件』となつた

それを勘づいたのかどうかは分からぬが転送ポート等がある施設付近にて目撃情報多発

そしてついに違法な転送ポートのデータを改竄し使われた形跡を発見

監視カメラにどうやってか侵入してきたのかまでは分からなかつたが、件の浮浪者は転送ポートを使用したのがバツチリ映つていた

詳しい座標は分からずとも地球に飛んだという記録だけを残して

こっちには転送ポートが無いのによくもまあ無理矢理転送してきたなサリイは

クロノがもつとも気になつたのがデバイスが喰われるという現象

彼は、クロノ・ハラオウンは、プレシアの事件で俺が使って見せたためにスタンドを知つていた

見えなくとも起つる不可解な現象

レアスキルにしては片付けにくいこの能力を

「サリイ、君にはこいつが見えるだろ?」「

俺の影からずるつと這い出てきた細く巨大な右腕

これが、俺のスタンド

「うそ、見える」

これで確証を得られたな

ミジドチルダにもスタンンド使い達は生まれているところの事が

「ここはアンブラー、君のクリエイトブルースと同じだよ」「うの子と…」

サリィの後ろから覗くように現れる珍妙な生物

この小さなスタンンドがたくさんデバイスを喰っていたとは見かけによらずともない能力を抱えている

しかし「の子、の様子じゃスタンンドの」とか知らないんじゃないのか？

「ここはスタンンドと呼ばれるものだ Stand by me (傍らに立つ者)とか Stand to up (立ち向かう者)って意味なんだが…わかんないか

「？？」

「まあとにかく、俺は君が起こした一連の事件が気になつて保護し

たんだ」

「わるいことなんてしてない……ただ、かえりたかつた……お家、  
さがれないと」

「//シードチルダ出身だろ？……だつたらなんで」

言いかけて、口を閉ざした

スタンンド使いは転生者だ

ミッドチルダではなく地球に帰りたいところのは前世に暮らしてい  
た家を探しているんじゃ ないか？

考えが幼い、ところの前世は、まだ幼いままに亡くな  
つたんじや……

神様め、本当に節操なく転生させやがつて……

どう説明すればいいんだかなあ

元々、利用してやううとこう考えだつたがいつも幼いとそんな思い  
は霧散してしまつ

「とにかく、これまでデバイスを喰つてきただけど」

「かえるために、いろいろ知らないといけなかつた……だから食べ

た

「知識の吸収も可能、といふわけか

デバイス要らずなスタンダード能力なこと

仕方ないな、クロノには悪いが勝手に事件解決にさせとおくかな

「でも、食べてたら黒い男の子においかけられた……とってもこ  
わかった」

「クロノ……」

「あの子もヘンタイさんなのかな……？」

「……」

なんだか俺の友人がロリコンだとか一瞬考えてしまった

仕事熱心なのは分かるんだけど、なんだかなあ

「サリィは何にも悪いことしてないって、俺が皆に言つておくよ  
それと君の家探しも手伝つよ

「ほんとー?」

「ほんとだよ」

「もうこわいことない?」

「ない」

サリィは皿を潤ませながら唐突に俺にダイブしてきた

不意討ちだつたんで頭を打つたがとりあえずサリィの頭を撫でる

「」の子はミッドナルダのスラムを一人で生きてきたんだ

そのせいにどれだけ寂しい思いをしたのだろうか

クロノとこいつそりやり取りをしていたんだが、どうやら親は管理局員で両者殉職、家や財産を親戚に奪われて追い出されたらしい

それが前世の家探しのきっかけになつたと見ていいか

とりあえずサリィは俺の保護観察下に入れることを申請した

それにしても家探ししか

俺も全く気にしてなかつたな……前世の家があるかどうか俺も探してみるかな

「マスター、お風呂の準備が出来ました…」

ガチャリと開いたドアの先にいたリースが俺の状態を見て固まつた  
持っていたバスタオルなどがバサリと落ちていく  
何を固まつているのだ、と思つてハツとする

自分の今の状態は全裸の少女を抱き締めるよつた形になつてゐるわ  
けで

サアつと一気に顔の血の氣がひいて冷や汗が出る

リースを見れば無表情で見下ろしてゐるわけ

「あの…リースさん?これは深いわけがあつてですね?」

次の瞬間、俺の目の前に使い魔の人影がそのまま飛びかかってきた  
のが見えた

「ちょ!?なんで飛びかかってくるんだお前は…?やめつ…やつ…  
アツーーー!」



## デバイスイーター？（後書き）

亮はロリコンじゃない

たぶん

そして「いつも女性には強く出れないのか

譲ー共々情けない奴め

シリアルアス固めしないでほのぼのできる話を持つと入れなくては

本作品のスタンダードの由来は3部の傍らに立つ者と7部の立ち向かう者どっちも混ざったようなもんですね

意味合い的には終由香、デバイスイーターは3部、譲ー、亮は7部  
みたいな

亮編は本編の並びまで進めよつかな…

あ、富出庵編とかそんなもんありません

富出は図々しく主人公の話に割り込まれます

富出だから勝手に仲間が増えたりするんでしょうが  
ろくでもない手段で仲間を増やしそうですが

## デバイスイーター？（前書き）

情に流れやすい男、矢口亮

デバイスイーター？

S H D E 亮

「もくもく

「.....」

「へせへせ

「.....」

「もくもく

「.....」

「へせへせ

「.....」

「こさかおか

「.....」

「アキラ?」

「あ、ああはいはい、ちょっと待つて」

今日は親の帰りが遅いのでリースと一人で夕飯の準備をした

ただ、いつもの一人分ではなく三人分だが

少し癖のあるくすんだ金髪を後ろに束ねて、サイズの合わないブカ  
ブカなシャツを着る少女

デバイスイーターこと、サリイ・マレイヤ

風呂から上がった彼女はお腹を盛大に鳴らしたので俺達もご飯を作  
つたわけだ

やつぱりスマート時代はろくに食べてなかつた見たいでご覧の有り様、  
あつといつ間にご飯を食べていく

ちょっと後で両親の分を作り直さなきやな

しかしながらこの可愛い生き物は

いちいち一生懸命頬張る姿にハムスターとかリスとか小動物を彷彿  
とさせるのは

「ま、マスター…お味噌汁あつついです…」

で、視線をすらせばリースが熱々の味噌汁をチロチロ飲んでいる

ああ、猫舌か

なんなんだろ「」の癒しの食卓

サリィはサリィで同様にチロチロ飲んでいる

大きなお友達の皆はきっとこの光景に萌えとか言いつただ

とこつか俺も言いかけた

今ならその気持ちが分かつてしまつなあ

と、一人で和んでいるとリースとサリィの箸が一つの唐揚げに当たる

その時になにやら思うことがあるのか動きを止め、にらみ合ひを始め出す

「」れは… サリィの…

「…」れは私が後で食べようといつておいたものです

「む…」

「むむむ」

そして弾き飛ばされる唐揚げ

それをとりうと箸でチャンバラし始めてしまった

箸と箸のぶつかり合いで宙を舞い続ける唐揚げ

とにかく急にお行儀悪くなつたね君たち

苦笑いを浮かべながらサリイの分をよそつたご飯を置いておく

その時にサリイの皿が一瞬輝いた気がした

素早くリースの箸を弾くと宙の唐揚げに箸を突き刺す……！

つて箸でそんなことしちゃいけませんから……サリイなにドヤ顔決め  
てんだよ

だが勝ち誇ったサリイは気を抜いてしまつたのがいけなかつた

そのままリースが食い付いたという光景が皿の前に広がつたから

……リースお前、そんなに食い意地張つてたつけ？

まさか自分の箸に刺さつた唐揚げをそのまま食べられると思わなかつたのか、サリイは愕然とした表情で咀嚼される唐揚げを見つめていた

「……はあ、サリイ、俺の唐揚げ食べていいぞ」

「！」

「マスター」

「ただしリース、テーマはダメだ」

「な、何故ですか！」

「だって大人げなかつたもん 反省しなさい」

…リースが何故か俺の揚げる唐揚げが好物になつたのは分かつてたけど、子供相手に本気で奪いに行くのはいただけない

思わず俺は笑い、つられて皆笑いだしてしまつ

そういうえば、フェイトとアルフの家でもこんな感じだつたな

短かつたがあの日々も心から笑えた

大切にしたいな、この思い出に今の新たな日々を

食後、サリイがバラエティー番組に食い入るように視聴し、そんなサリイの髪を整えていたリース

わざのチャンバラと違つて普通に仲になお前、…

それはさておき、俺はサリィの元にあるものを持ってきていた

サリィも俺が何を持ってきていたか見て顔を明るくした

「洗濯してみたんだが意外と上質な生地で出来てんなこれ」

「ん！」

それはサリィが身に纏っていた布

いざ洗濯してみると赤や青に紫、水色、オレンジと様々な種類の綺麗な布だった

ボロボロになつているがそれすら気にならないくらい手触りがいい

サリィに渡すとすぐにそれこぐらまつて気持ち良さそうに頬擦りしている

嬉しそうな様子から見て相応思い入れがあるみたいだな

ジッと見ていろとサリィと曰がつた

「キレイしてくれてありがとう」

「どういたしまして、とよつぼど大事なんだなそれ」

「うん、これだけはおじさんから守つた……ママとパパがくれたもの」

親戚に全てを奪われた…というわけではなかつたんだな

一度目の生の親との最後の繋がりか

「サリィ、せつかくだから今度それを直しに行くか?」

俺もちょっとブルーブレイズで裂いちゃつたからな…大切なものを傷付けた謝罪を兼ねてだ

「うん」

布にくるまつながら幸せそうな顔で頷いた

だとしたら予定を空けなきやな…

富出を倒すために利用してやつとしたつもつが思いがけない捨い物になつてしまつた

だが、張りつめた心が少しだけ癒された

「の子は戦いに巻き込まれるのやめるか

サリィの頭を撫でていると船をこぎ始めてくるのに気が付く

そうこやじの歳で田元に魔があったのを思い出す

何処かの執務官様に追われたせいでまともに眠れなかつたのか？

と、遂に夢の世界に飛んじゃうサリィ

「もしかしたら相当の疲労がたまつていたのかもしませんね」

「だらうな……クロノが原因臭いけど」

「何を言つているんですマスター　　あなたも彼女と戦つたのも原因ですよ」

「うう……すみません」

アンブラで絞め上げちゃつたりしたからなあ……その様子を見ていたリースに具体的なことは分からずとも絞めていたのは分かるだろうし……

だからジト田で見るのやめてください」とリースさん

とにかく彼女を寝かせるとするか

布を離さないサリイをお姫様抱っこして自分の部屋に連れていくベッドで寝かしてあげると俺はサリイをリースに任せて一度キッチンに戻った

両親もヘトヘトで帰つてくるんだりしね

と、噂をすればドアが開く音が

「亮ああ～飯～」

「ほひ、しつかづしてくだれこよあなた…」

「お帰り、母さん父さん、残念だけどまだ」「飯は出来てないよ」

「「な、なにイイイイーッ…」」

なんだかこの世の終わりのような顔をされた

本当に大丈夫なのか」の両親

「あ～り～コ～スちやんぱづしたの？」

「ああ、ちゅうとね　後でその事含めて話があるから、ほら着替えてきなよ」

放つておくと玄関で泥のようごに眠るからな

わらわとり飯作って話して眠らせよつ

で、サリイがミシドチルダからきたとかそういうことは伏せて話を通す

子供好きだから別に構わないだろつと思つていたが…

「大変だ母さん！亮が女の子を助けたぞ！今夜は赤飯だ！」

なんでだよ父さん、意味不明だぞ

しかも母さん料理出来ないの知つてるでしょつが

「女の子……ならどんなお洋服を着せてあげようかしら？」

あ、母さん服のデザイナーだから、サリイ着せ替え人形にされるかもしけん…………程々にしてもらおう

「でも、フロイトちやんが亮にいるでしょつ、まさか浮気なの亮？」

「ああッ！母さん！僕たちの亮がッ！」の歳で亮がッ！不良を通り

越してプレイボーイにッ！

「なつてねえよッ！あとフュイトとはそんな関係じゃないからなー！？」

暴走し始めると余話がどんどんおかしくなる…

フュイトか…

あのビデオメールを思い出すから今はあまり聞きたくないのかもしれないな俺は

親の馬鹿な話に振り回されること一時間

疲労で仲良くな夢の世界に飛び立った両親を見てから自室に戻る

「マスター」

「コース、お疲れさん…サリィは？」

「よく眠りますよ…それで…彼女なんですが…」

「…………考えが変わったよ…彼女は戦わせない

サリィの頭を撫でながら俺はコースが聞いてくるであらう間に答えた

正直、ここまで強力な力はものにすれば凄まじいだろう

だが、他の転生者と違つて本当に子供である彼女を富出にぶつけていいものだらうか？

なのはやフハイトと違つて意志が固まつてゐるわけではない

無理強いをするとか誘導してやるとか、そんなことは純粹な彼女を兵器にしていくような気がしてならない

リースを見ればホッとした表情を見せていた

冷徹にならなければいけない俺は複雑だが…これが、正しい選択のはずだ

この家庭ならサリィは大丈夫だろ？

富出を倒すには他のスタンド使い達を当てにしようか

「んう…」

サリィの手がガツチリと俺の服を握つてしまつ

これは……脱出来そうに無いな

リースと苦笑いして俺はサリィの横に寝そべる

「ひつして見ると、同じ年とは思えないな」

「マスターの妹か娘に見えますよ」

「ハハハ、娘は言い過ぎじゃないか？」

「ふふふ、そろそろ寝ますか」

「ん、そつだな…リースも一緒に寝るか？」

「「」[冗談…と、言いたいところですがお言葉に甘えて」

ベッドで3人、川の字に眠りこづく

リースはきっとフロイトとアルフを思い出したのかもな  
とか言って俺もアート事件のフロイトのことを思い出してしまったり  
心から安心して眠るサリイの姿にフロイトがダブって見えてしまつたからな

俺も眠気が襲つてきたからアンブラを出して部屋の電気を消した

なんだか今日は久し振りにいい夢を見られそうな気がした

## デバイスイーター？（後書き）

デバイスイーター、サリイを書いてるの結構楽しかった：

亮はサリイを戦いに参加させないいつものようだけれど果たしてそのまま居続けられるのか？

スタンド使いは引かれ合いつつこれを少し甘く見てている節があるんですよ彼は

そもそもデバイスイーターとの接触もそれによるものと気づいていないのだから当然のこと

次はA・S本編、ヴォルケンリッター襲来、ただしスタンド使った  
ちの舞台裏です

そして亮／S讓一へ：

讓一の本気を垣間見せれたらいいなあ

サリイ、リース、そしてまだ再会していないフォイトは亮サイドの  
癒しに出来たらいいと思つてます

今さらリースなんで生きてるん?...といつ疑問については、亮が優れたサポート要員として無理矢理再契約しました

つまり退場済みの人物で富出討伐に利用してやろう!...という気満々でしたが、やっぱり冷徹になりきれずに家族同然の関係になりました

ちなみにリースは消えたと皆思っているため、まさか復活しているなどとフェイトはもちろんフレシアすら気付いてません

フェイトは出会つ機会は来るのだろうか...

## 事件の始まり（前書き）

台詞はないがある人物が久方ぶりの登場  
ついでに今話は荒木飛呂彦先生の作品、デッドマンズQ のネタが  
含まれています

## 事件の始まり

SHDE 亮

『フロイトは囑託魔導師になつたわ 私はまだまだだけれど、もうすゞそつちに行くと思つの……その時はフロイトをよろしく頼むわ』

今朝届いていたプレシアからのビデオメール

フロイトが来るのが…

物語が始まるまでとわづか

学校のない休みのある日、違法駐車される自転車の隙間を縫いながら一人の少女とはぐれなによつに手をしつかり握る

膝まで伸びに伸びたくせのある髪を揺らし、修繕された布をマントのよつに体に巻き付けたサリィを伴つて俺は街中を歩き回つていた何も考えなしだ歩き回つてこむ駄じやなくてサリィの前世の家探し

中なのだ…

まあ、サリィと寄り道し放題の散歩なんだよね今

花屋の前で3分ほど花の香りを嗅いでみたり

本屋に立ち寄っていたりして…

「鼻をなくしたゾウやさ……じゅわやつて草を食べたり、シャワーを浴びたりするんだろ?」  
「

「買つて読んでみるか?」

「え……別にいいや」

別に売れてそうもないような本だしなあ…中の話に好奇心は持ったが…

今は適当に中を見て回つて…

この間にも仲良く手を繋いでたりするのだが、何か微笑ましい田で見られて恥ずかしい

こんなときにクラスメイトに会わないと祈る…

「あれ? 亮じゃない」

出会いました畜生

バッタリとアリサに

で、当然、俺の隣にいる見知らぬ女子のサリィに田が行くわけで

「亮、また女子をたぶらかしたの？しかも外人の」

「違うわ馬鹿、この子は遠い親戚で家で預かってるだけ」

「ふうん…フロイトが聞いたらどうするつもりなのかしら？」

「なんでそこでフロイトが出るんだよ」

いかんな、このままではアリサにいじくつ回されてしまつ

と、サリィが俺の後ろに隠れてしまつた

チラチラとアリサの様子を俺の影から覗いている

なんだこの可愛い生き物は

「……亮、ホントになんのその可愛い生き物は」

ブルータス、お前もか……じゃなくて

「……」「この子はサリィ・マレイヤ　よひじくしてあげてくれ

「よひじく……」

「で、こいつはアリサ・バーニングス……俺が通う学校のクラスメイトで、こいつ見えてお嬢様だ」

「……」「こいつ見えてつらビツう」とよ

ビツうこいつ意味でしょうね？

とまあ、俺としては見知った顔のいないサリィの友達とかになつてくれればいいんだけど

アリサなら問題ないだろう

彼女なら面倒見がいいから仲良くなつてくれればいいな

俺の意図を察してくれたのかアリサは笑顔で話しかける

「サリィね、よひじく

「あ、あう……」

人見知りしやすいのか、恥ずかしそうにもじもじし始めてしまつた  
リイ

顔も赤くなつて余計に俺の影に隠れてしまつた  
ま、少しづつ仲良くなつていけばいいさ

アリサもサリイのそんな様子に苦笑いしている

「私はここのあと直ぐに用事があるから、またね

「おひ、また今度な

「サリイも、また会いましょう?」

「ん

小さく手を振つて本屋の外にいくアリサを見送つていたから、ちやんと友人になれるだろ?」な

友人か…父さんに相談してサリイも学校に通わせてみるか?

考へていると袖を小さく引っ張られた

「アキ!」

「ん?」

「変なのがいる…」

「変なの…？…げ」

サリィの視線を追つと電柱の影から覗く一人の男子

といづか富出だつた

アリサと一緒にいたのを見られたか…といづかサリィを見る視線が  
怖い

「…なんであんな面倒なのがいるんだ…」

「アキラ…」

「あんなのを気にしちゃいけない、行くよサリィ」

気付かれてないと思つてゐるのか、こちらをずっと覗くその姿が気  
持ち悪かつたのでサリィの手を掴んで早足に本屋を出た

俺の正体はバレてないと思つが…向いづから話しかけられることが  
多いからバレたのかとヒヤヒヤすることが多い

「変なのがついてきてるよアキラ」

「クソッ…あいつ早いな」

尾行下手くそなわりによくついてくるな  
とかなんでついてきたんだあいつは  
転移してしまおうか?

と、目の前にバスを見付けて閃く

「サリイ、バスに乗るうか」

「ん」

サリイの手を繋いで俺はバスに乗り込み…直ぐに降りた  
人混みをかき分けて、近くのコンビニに入る

サリイはサリイで?が一杯頭に浮かんでいる

「バスの方見てみ?」

「あ」

そこには発車したバスに乗り込んでしまった富出が俺達を見て何か

言つていのが見えた

バスの運転手さんには悪いことをしてしまったが、富出が乗ったあとにドアが閉まる寸前にすぐ出てやつただけだ

人をストーキングしてくれたんだ、次のバス停まで行つて僅かな無駄金を使つてくれ

いつも追いかけ回すもんだから今回は少しだけ胸がスッとした

「知つてゐひと？」

「知りたくはなかつた奴だな、いいかサリイ？あいつにもし話し掛けられるような事があつたら直ぐに逃げなさい ヘンタイさんだからな」

「そりなの？…こわい

事実、嘘は言つてないからな…俺も正直あの変態ぶりは怖いこと思う

とこつもなく強いからなお悪い

うん、サリイは絶対にあいつごぶつけや駄目だ

教育によろしくない

これから先もサリイは街に出るだらから、気を付けないとな

今日は初日と「う」ともあって家は簡単には見付からなかつたが、  
サリイは楽しそうに笑っていたから良しとする

「サリイ、 そろそろ昼食にするか

「ん！」

昼飯は牛丼を食べに行くとしますかね？安くでガツツリ食べられる  
なら

「アキラ」

「んー？」

「また、 散歩に行きたい」

「おーおー、 家探しはまだつした？」

「家も探す……でも、 今日は楽しかったから…ダメ？」

「普段は学校だから無理だけど…時間が空いたら行こうつか」

「今度はリースも」

「ああ、 そうだな」

笑いながら手を握るサリィに俺は握り返してあげのだった

そして運命の時間が訪れる

SIDE out

街中に舞う黄色い閃光

それを追うは、剣光閃く炎

結界に覆われた街を光が縦横無尽に飛び回っていた

弾ける火花はそのいかに激闘かを物語つてゐる

「はああッ！！」

桃色の髪を靡かせ剣を振るうのは烈火のシグナム

「くうッ！？」

その一撃は対峙していたフェイトのデバイスを切断して吹き飛ばすほどだ

一方でオレンジ色の毛並みの狼、アルフが青い狼、ザフィーラに翻弄され、苦戦している

かつて一人の少女に力を与えた少年、ユーノは鉄槌を振るうヴィータの猛攻に一の足を踏み続ける

結界外に転移を試みようとアルフと念話で絶えずやり取りしていた相手が恐るべき実力者と正体不明の魔法を使うことに戸惑いながらもPT事件を乗り越えた彼女らはなんとか拮抗し続けた

各々が戦いに明け暮れるなか、一人の紅の少年が電波塔の上でその光景を見ている

「……リースのおかげでどうやら富出の参戦は免れたか…」

その体格に似合わない巨大な槍型デバイス、ブルーブレイズを肩に担ぎながら、物語が無事に進んでいくのを見届けていた

（出来れば流れがこのまま行けばいい…このままだ、このまま…）

無意識にフェイトを視界に捉えながら余計な闖入者が現れぬことを祈るように

だが、最後の守護騎士の位置を確認したところであるものを見付けてしまつた

それを見て少年はフルフェイスメットを被り、駆け出したのだった

目指すは癒しが領分の守護騎士の傍らに立つ紺色のパーカーを着た少年

「シャマル」

「何ですか？ 譲一君」

「どうやら余計な奴がいるみたいだぜ？ 僕が相手をしてくるから別の場所でやつてくれ、転移のルートも変えておけよ」

「わかりました… 気を付けてね」

シャマルが転移したのを見届けると紺色のパーカーを着ている少年、藤城譲一も音をたてずに跡形もなく姿を消したのだった

そして

「よつ、不審者…そんな格好して、何処の仮装パーティーに行く気だ？」

「…」

ビルの屋上、目の前に突如彼は現れた

フードの影から覗く獰猛な目付き

彼は逃がす気が無いのは分かっている

やることは簡単だ

「藤城、譲一だな？」

「…なんで俺の名を？」

「答える義理は無い…ただ…お前のスタンドがどれ程の力を持つて  
いるか…」

紅の少年、矢口亮は槍を構え、影から巨大な腕が這い出でくる

それを見ていた青の少年、藤城譲一は自らの背後に傷だらけの巨人を出して身構えた

「絶対強者を打倒しうるのか、歪みに太刀打ちできるだけの力があるのか、俺に見せてみろオツ！！」

正史とは違つ、別の思惑が絡む物語の影でまた一つの戦いが始まった

わかるひとならわかる、シリアンゲンズ。

短編集も面白いです

たぶん短編集のネタはそのうちに使いつて書いてあります

富田も今は早々に退場しましたがちゃんと番があります

▽原作キャラこころの原

赤と青、邂逅（前書き）

第一次主人公バトル

譲一は相手がただ者でないと直ぐに勘づいた

デバイスを持つているため魔導師なのは分かるが、こいつはそれだけではない

スタンド使いだと直感している

そして紅い少年の影より現れた腕がスタンドであろうと

(小手調べと行くか?)

譲一は相手に向かつて走り出した

既に両腕はひびがまんべんなく入り、一度振るえば空間を引き裂く  
だろう

対する亮も槍を構え、牽制の魔力弾を撃ちだし始める

譲一を狙つたそれらは全てスカーサファイアが殴る事で弾いていく

亮はそれを見て数を増し、さらに誘導弾を混ぜた

高町なのは程の精密さは無いがそれでも厄介な動きをするそれを見て譲一は眉をしかめ、舌打ちした

若くして数多の死線を越えた譲一だが、そもそも彼は魔導師と戦うのは始めてだ

ヴォルケンリッターにどういったものがあるのか聞いてはいるが実際に目にすれば話は違つ

しかも相手はなのはやフュイトに匹敵する相手

そこらの雑魚などではない

「せめてスタンドが速けりや対応が間に合つんだが……」ここまで厄介なのが魔法つて奴は「

紙一重、スカーサファイアが弾いて譲一が避ける

彼の歩みは少しずつ速度が落ちていた

魔力弾でさえ、てこずり出す譲一

その様子を見ていた亮も動きだす

「アンブラッ……」

影の腕が譲一の影を、足を掴んだ

その時に譲一はビクリと動きが止まる

「な、なんだ？ 足が動かない？」

ハツと顔をあげると一息に槍を構えて亮が飛び込んできていた

「スカーサファイアアツ！」

避けることが出来ない譲一は自らのスタンドでアンブラを殴り付ける  
が、アンブラは影に溶け込んで消えて見せ、拳はむなしく空振りする  
そして槍は譲一に突き刺さった…

「なツ！？」

ようく見えるがスカーサファイアの門を通して譲一にダメージは通  
らなかつた

虚空の何かを通り、別の出口から切つ先が出でている

しかもそのまま槍は抜けないので

すかさずスカーサファイアは亮に殴りかかる

拳があと少しで亮にあたる

大の大人でも簡単に吹き飛ばす威力を持つたそれは亮のメットを容易く碎くはずだ

だが可笑しなことに気付けば直前にスカーサファイアは宙に吹き飛んでいた

いや、吹き飛んでいたのは譲一だ

別の影から出た腕が、彼の服を掴んで放り投げたのだ

「ぐッ…ひ、うおおおッ…！」

ビルの屋上から投げ出された譲一は空中にひびを入れてそれに腕を突き刺す

肩が外れそうな感覚に襲われるも、地上に叩き付けられるのは回避して見せた

その間に亮もバリアジャケットを展開したまま、槍を待機状態の紅いネックレスに戻すこととで虚空から槍を引き抜いた

顔だけを向けて再び相対する

宙にぶら下がっていたはずの譲一はビルの屋上に再び帰つてきていた

「テメエのスタンドが大体どんなのか分かつてきたぜ…全てはテメエの影から始まつている！月明かりや他のビルから漏れる光だ！その影に自らの影が入ればお前はどの影だらうとその腕を出せる！」

「こいつ……あの短い戦いにそこまで見抜いたのか……（学校の普段のあの態度といい、目立たぬように生活していたときといい…一度その才を開けばこれが…前世の経験なんて関係ない…何て奴なんだ）」

譲一はどれだけ情報が少なかろうと相手のスタンド能力を推理し、ひもといて見せる

今回は初めに亮のアンブラが本体の影から出たのを確認したから影に関する能力だらうと踏んでいた結果が先の発言である

（もつとも…全てを知つたわけではないみたいだがな）

譲一はアンブラの影を掴んでくる能力を警戒してたために影が近くに無い場所に来ていた

だからこそ亮はデバイスを待機状態にしたままにしている

そこから亮が何かしてくると感じた譲一は腕を振るつた

何も譲一はスタンドで直接殴るだけが攻撃ではないのだから

「オラアッ！」

バカリ

空間を、そんな音を出しながら大量のひびが走った

壁や地面を裂いていくそれらを見ていた亮を後ろから出た腕が掴んで射程から逃れた

その場所は唯一、譲一に近い貯水槽の上に降り立つ

月明かりを浴びて亮の影が大きくなり、譲一の影を呑み込んだ

そして譲一を左右から腕が忍び寄る

それは先程よりも一回りも巨大になつた腕だった

「一・一のッー！」

スカーサファイアですかさず左右から掴みかかるうとするアンブラ

をしのいでいく

魔力弾より手数の少なくスピードの無いそれをスカーサファイアが捌けないことがない

何よりも自分の影が相手に呑み込まれているせいで掘まれることがないのだ

そして、アンブラに反撃を

「ぐああッ！？な、なにイッ！？これはッ！？影から足が出ているッ！？」

油断しきつた譲一は突如現れた巨大な足に蹴り飛ばされた

スカーサファイアでガードしていた為に大事に至らなかつたが、完全に今は油断していたのだ

（不味い…スカーサファイアでガードしちまつた…）

その間に譲一の腕をアンブラが掴み、足にはチエーンバインドが絡み付く

影から足が更に一本現れ、今か今かと譲一を蹴り碎こうとしていた

「てっきり腕一本の遠距離操作型かと思つたが、こいつは驚いた……足が出てくるなんてな……普通もつ一本、一本の腕じゃないか？」

「人間に三本目や四本目の腕が無いだろう？ なんたつて影法師なんだからな さあ行けッ！」

「それもそつかよ！ スカーサファイアアッ！」

巨大な蹴りと拳による「フッショ」のぶつかり合いが始まった

激しくぶつかり合うその一撃はアンブラに軍配が上がりかかっている  
アンブラにスピードはなくとも、パワーの面においてはスカーサフ  
アイアを上回っているからである

アンブラに掴まれた腕、その手の甲は次第に裂けていき血が滴り落  
ちていく

自分が不利になつていく中で譲一は何故か冷静でいられた

四肢を封じられ、目の前の攻防も劣勢に追い込まれているのにだ

（何故、今この俺の腕を握り潰さない？ 奴は、舐めているわけではないようだが、まさか本当に俺を試しているのか？ 自分が俺より上のようつて思つていいようだがそれはテーマの勘違いだぜ……。）

「ガツ！腕が…スタンドは離れているはずなのに……！」

今度は亮の両手から血が滴り落ちた

亮が譲一のスタンドを引き離したその判断は正しかった

譲一の腕のひび、譲一本体がスタンド能力行使するためにはスカーサファイアがそばに居続けなければ使えない

だからスカーサファイアとアンブーラのラッシュでそばより離したのだ

アンブーラの両手をひびで突き刺すことなど出来るわけが…

そこまで考えハツとなる

…………突き刺す？これは、ひびじゃない…！

「藤城譲一…お前は今、何を持っているんだ…？」

「ナイフだよナイフ　ひびの中に俺はナイフをいつも仕込んでいるの、ヤツ…！」

そう言つて手のひらの果物ナイフをアンブーラから引き抜く

それを見せつけるように弄んだあとにラッシュを繰り出していた足のアンブーラに投げ付ける

動きの止まつた足を守るために腕のアンブーラが弾くために動いた

その間にスカーサファイアを一度退かせて、チヨーンバインドを手刀で切り落とす

「影の中にいちゃあ不味い…外に出なきゃ…つてつおおツー…」

亮の影から逃れようと光のあるところに走り出しだが譲一は突然盛大にすつ 転ぶ

見れば足から影が伸びて亮の影と繋がっているのが見える

「俺の影はお前を捕らえる檻だー逃げれるわけが無いだろツー…」

だがその言葉は譲一に発するべきではなかつたと亮は直ぐに後悔することになる

スカーサファイアが、下に向けて拳を下ろそうとしているのが見てしまつたからだ

「へッ…こんなショボい檻なんかで俺がおとなしくなるか…バラバラにぶつ壊してやんよオツ…！スカーサファイアツ…！」

譲一はひたすらに殴り続けた

まさかビルの中に逃げる気か？

譲一が何をする積もりかわからないが黙つているわけにもいかない

アンブーラが譲一を殴ろうと動きだす

「今さら何をしても遅えんだよ！ オラアッ！」

最後の一撃が入ったときにガクリと亮の視界がずれる

そしてビル 자체が振動をおこし始めた

「なー？ まさかお前ー？」のビルを！？

ビルに、大量のひびが入る

己の重さに耐えられなくなつたビルはバラバラに砕け始めた

当然、亮の影という檻は崩れてしまう

それどころか亮の影そのものが無くなつていた

「くそッ！？ 影か暗闇さえあればいいが、ここまで影が安定しなければ俺はスタンドが出せない！ しくじったか！ 結界内とはいえ、

ビルを倒壊させるとは何て奴なんだ！－「

デバイスを出して槍へと変えると自分に当たりそうな瓦礫を次々に払い落していく

ここまで思いきったことをしてくるとは思わなかつた亮は譲一の分析が足りなかつたと後悔していたのだった

崩れるビルの中、亮は一点を目指して駆け抜ける

そこにはスタンドの力で隣のビルの屋上に逃げ込んだ譲一が見えた  
追い付いた亮をスカーサファニアが殴ろつとしたが亮は突然待つた  
をかける

「藤城譲一……お前は、富出庵を打倒出来る可能性が高い……ならば戦いの経験を積ませ、僅かでもその力を高めさせなければならぬ！お前は知らないだろう譲一！既にお前は富出の敵となつていることを！その芽を摘まれないように成長を促してやるのが、闇の書の物語における俺の役割だ」

「お前……一体何を言つてやがるんだ？富出が敵つて……」

「俺達スタンド使いといつイレギュラー……なぜ転生したのか、神々の目的を忘れたか？」

「……世界の波長に合わない高次元の魂の排除……まさかそれが富出だつて？」

「もう既に物語は歪んだ 奴のは俺達のよつな介入ではない、改竄だ 世界が進化し続ける富出の存在に耐えきれないからな……お前は静かで平穏な生活を望んでいるんじや なかつたのか？」

「！？お前まさか、うちの学校の誰かか！？」

「富出庵はこの世界に生きる人間全ての命を見下している お前はこのままでは静かで平穏な生活をするなど到底出来ないだろ？」

亮はそつと視界の端に桜色の閃光が結界を貫いたのが見えた

譲一はヴォルケンリッターの誰かと念話したのか離脱しよつとしている

今回はここまでようだと悟つた亮は踵を返した

突然の様子に譲一は何かを聞いたそつにするも言葉を紡げない

「富出は巨大な剣型デバイスを持つてゐる」

「あ？」

「もし、戦うよつことがあるなら全力で挑むことだ……次に会うまで死ぬなよ……あ行け、まだ管理局に捕まりたくあるまい」

譲一は首を傾げたあと、その場から跡形もなく立ち去った

亮は、なのは達が居るであろう方向を見たあとに転移したのだった

## 赤と青、邂逅（後書き）

風邪引くわ熱が出るわで頭が朦朧としながら書いた今回のお話

赤と青シリーズの話は対に青と赤シリーズを作る予定です

富出がラスボスみたいなことを言って譲一を脅した亮

果たしてこの行動が吉と出るのか凶と出るのか…

さて、次回か次々回辺りで募集してくれたオリジナルスタンドを出  
そうかと思います

それにしても熱がツ風邪がツ鼻水が酷いツ！

次回の更新が遅れるかもしません…

少し療養します…

## 迫る刺客？（前書き）

熱に苦しみながら書ききつた！

3話構成、亮チームに新たな人物参加、募集スタンド使わせていただきま

## 迫る刺客？

今日、転校してきたフェイト・テスターは溜め息を漏らしていた  
かけがえのない友人となつたのはやビデオメールのやり取りしか  
なかつたアリサ、すずかと出会えたのは嬉しかつた

しかし、彼女はもう一人の人物と再会できるのを心待していた  
彼ともう一度会いたいと思つていたのに

「フェイトちゃん、溜め息ばかりついてるけど大丈夫？」

「なのは…うん、大丈夫だよ、大丈夫」

「どうしたんだいフェイト、悩みがあるなら俺に相談しなよ」

「何勝手に会話に参加してんのよーアンタはどうか行きなさいよー」

「アリサちゃん…ちょっと言い過ぎじゃ」

そんな原作組 + 異物を遠目から見る地味目の少年とちょっと小学生  
らしからぬ兄弟達

「あれが富出か…ホント」ウザいな

「虹村先輩…ズバッと言いますね…」

「あれ？今日は矢口の奴いねえな？」

「ほんとですね～どうしたんでしょ」

普段通り、もうひとつ穏やかな顔を見せる譲一は矢口が居ないことに怪しみながらも富出の存在を警戒するのだった

SIDE 亮

「あん…亮君…手伝つてあげたいのは山々なんだべ、私だつて長く生きたいの」

「そうか…」

「でも、何かあつたら私も手伝つよ」

「わかつた、ありがとう」

また一人、転生者が戦いから遠退いたか…

誰しもこの原作の登場人物と接点を持つことはあっても、ある一点により介入をためらつてしまつ

言わざもがな富出庵の存在だ

スタンド使いでないにも関わらず圧倒的な強さを持つ奴を相手には誰しもが戦いを避けたいから

そりやスタンドを通り越して本体を瞬殺出来るのだから自殺行為もいいところなのだろう

そんなやつに何度も挑む俺は何て物好きな奴なんだか

誰かに強制された訳じゃないけれど、富出の本質を知ったからにはなんとしても倒さなきゃならないと自分の心に素直に従っているだけだ

道は険しく、まだまだ彼方の奴に刃は突き立てれていないが、いつか必ず……

さて、聖祥内にいるスタンド使いはよくも悪くも己の欲望や野望に忠実なやつが多い

中でもヤバい奴は三割ほど再起不能にし、それ以外は再起可能程度

に病院送りや脅しに脅しまくつてやった

他の転生者は藤城譲一の如く平穏に生きよつとしている

俺としてはこの姉弟を引き込んだかつた

弟、光のキューブの防御力には目を見張るものがある

姉、由香もスタンド使いらしいが…正体を一度も見ていないんだよ  
な…

接触したところで門前払いされてしまったから諦めるしかないが

はてさてどうしたものだろ？…学校をサボつてまで街中をうろつ  
き回つていると先日家族になつた人物を見つけた

「あ、アキラだ」

「よ、なんなんだその格好？」

シコタツと手を小さくあげながら本屋から現れたサリイの元に行く

何故かサリイの格好は黒いドレスのよつた、たくさんのフリルのつ  
いた服を着ていた

近いもので言えば黒ゴスのよつた感じだ

ただ母さんは全く別物と言つていた覚えがある

何処が違うのか俺には見当もつかないのだが……」のドレスつてフュ  
イトにプレゼントするとか言つてなかつたか母さん？

それの上に色とつぢりの重なつた布をマントのよひに包まれていて  
どつかの不思議の国に出てきそうな印象を『』れる

しつかし相変わらず不健康な顔色してんなんあサリイは

隈も取れてないし大丈夫だらうか

頭をグリグリ撫でながら適当に一人ならんで歩いていた

このままじや不味いんだよな……ずるずる時間が流れてしまつ

俺のスタンドがもつと成長すればいいんだが……そんな無い物ねだり  
しても好転する訳じやないし……

サリイを連れ立つて歩いていたら公園にたどり着いていた

適当に自販機で買った缶コーヒーを開けながら近場のベンチに座る

サリイにはオレンジジュースを持たせてやつた

「……犬……」

「犬？」

サリイが隨分と熱心に見る犬

それはオレンジ色の毛並みの可愛らしい子犬が…

「ブウツ！？ゲホツゴホツ！？」

「アキラ？大丈夫？」

「あ、ああ平氣だ平氣…」

び、ビックリした！あれどう見てもアルフじゃん！

あれ？今、みんな学校だよね？なんでアルフがいるんだ？

「触つてきてもいい？」

「あ、ああ…構わないけど…」

子犬フォームでいるってことは別の誰かが散歩に連れ出したってことか？一体誰が？

そんなことを考えていると黒を中心とした服を着た少年が隣に座った

ああ、そういうこと

「わざわざこんなところに来てどうしたんだ？執務官殿、仕事で忙しいんじゃなかつたのか？」

「ああ忙しいや、今も仕事で地球に滞在してゐるマジックマン」

隣に座つたのはクロノだつた

わざわざ会こに来るとほめんどくさい奴め、デバイスのやり取りにした方がいいだらう」

「君は今は学校に行つてゐる時間じゃないのか？」

「サボつた やりなきやならなことがあるからな

「わづか…で、彼女が…」

「ああ、件のデバイスイーターだよ 一般魔導師キラーな能力を抱えてる…おまけにスタンドがデバイスの代わりを果たす何ともデバイスいらずなスタンド使いさ」

「君のといい、随分と滅茶苦茶なんだなスタンドと言ひやのは

「スタンド使い同士が戦えば必殺の応酬だつたりするのせよくなうことさ 一見大したこと無さそうな能力が頭使えば反則技になつたりするからな」

クロノの嫌そうな顔に肩を竦めることで答える

一部のスタンンドを除いても大抵のスタンンドは普通の人間には見えない

見えない点に関しても魔導師も例外じゃない

何度か戦ったクロノはその嫌らしさが分かるのだ

アンブラだつてかなり弱点だらけのスタンンドだが、いくら露骨に弱点をさらしても見えないのだからただの魔導師にはかなりの脅威になる

なんたつてスタンンドとの戦いに重要な射程を一切計れないのだから

ま、見えないながらもアンブラを攻略して見せたクロノは例外だが

クロノにスタンンドの存在を教えてるのは、様々なスタンンド使いを見て危うい人間も多くいたからだ

とにかく今は皆ガキだろうが、いずれ犯罪をおかす奴が出ることを俺は危惧している

この脅威は富出に並ぶ問題だ

サリイがスタンンド使いとわかつたのだから他世界にもいる

いずれ、管理局にもスタンンド使いが入局するにしても管理局員にも

スタンドに対抗する手段が欲しいだろう

そこでクロノと俺監修の元にスタンドの視認化のシステムを作つて  
いる訳だが…

闇の書事件が始まつてこりや 賴挫してゐるかな

「彼女の保護観察の申請が通つたよ」

「そつか… 悪いな無理効かせて」

「元々都市伝説に片付けることが出来た案件だ  
被害者には新たなデバイスの発注をしたし、彼女のお陰でまさか芋づる式で犯罪者を検挙できたりよ」

「あららそれはまた

「ある意味借りを作られたかな…？」

「そんな執務官殿ですが、デバイスイーターにヘンタイさんと認識されてるんだこれが」

「おい… まさか君は」

「待て待て、お前があの子を追いかけ回したせいでそつ認識されてるんだよ」

いつかのアースラでのなのはを見て顔を赤らめていたからロリコン疑惑がかかっていることを思い出したのか盛大に俯いてしまったクロノ

悪いな、一応俺は同じ年なんでロリコンじゃありません

とにかく適当に雑談し続けると学校が終わったのか聖祥の制服を着た子供の帰宅していく姿が見えた

「さて……一度俺は帰ることあるよ」

「やつか……君がさつきローリーを吹き出したのは愉快だったよ」

「……忘れてくれ

アルフと戯れているサリィの元に歩いていく

『亮……』

『……』めん、今はまだフェイトに会つわけにやいかないんだ

殺害未遂の俺を心配して念話をしてきたアルフに謝りながら俺は帰宅した

一人で特に何もするでもなく夕焼けの照らす街中を歩き回る

たまにはなんにも考えずにボケツとしていたい

次の俺がしなければならない事も再検討する前に息抜きも必要だ

「ん…？」

そんな気分で歩いていると、人気の少ない通りで何かに追い詰められてる聖祥の生徒がいるのを見つけた

それを追い詰めるように迫る上級生らしき人物

何か頭の奥にチリチリとした感覚が走る

感覚からして一人ともスタンド使いか？

「知らないって言つているだろ！？」

「嘘つくなよ…いいからフュイトの家教えろよ」

なんでフュイト？と思うが、それ以前に上級生からはビリじょうもない悪というのを感じる

なんでそんなのが感じるかわからないが、あまりよろしくないな

フェイトの家を嗅ぎ回つてゐるといつたからあまりいい気分はしないな……

……首を突っ込ましてもううか

なんとか間に合わせた…しんどい…

まだ募集スタンドが何か判明させていませんが、実際どれも採用しあくなるんですね

敵でも味方でも友人でもおいしいです

そろそろ畜出も活動が活発になります

なんたつて畜出は変態ですからッ！

ちなみに畜出そのものにスタンダードステータスを当てはめると全部Aになります

スタンダード相手にタメはれるとか全くキモいですね

なんたつて畜出は変態ですからッ！

サリイに関してはチームではなくその他に分類ですね

サリイは亮の義妹、嫁に欲しけば鬼畜義兄＆山猫を倒してからにしない

仗助とトニオとジョルノだけでも殆どの怪我も病も治せる気がする  
今日この頃

熱が下がらない…

迫る刺客？

SIDE 亮

「後輩いびりとは感心しませんね」

「ああ？なんだお前？」

俺は上級生らしき人物から庇うように何処かおどおどした印象を』  
える少年の前に立つた

しかしながらこの上級生、聖祥にこんな柄の悪い奴がいたのか？

小学生でチンピラ、ヤンキー通り越して、ゴロゴロジキとかすげえんだけど

前世はどうなつてんだろつ」

「なんかテメーも怪しいな…お前、フヒトイつて奴の家知らねえか」

「大丈夫か」

「え？あ、はい」

「立てるな…ほら、もう絡まれなによつこじろよー」

「おーー！シカトすんじゃねえツー！」

なんか見た目そのままのやかましい奴だなあ

「俺は暇じやないんだ！ふざけてると病院送りにすっごー！？露出つてガキにレッズマンつていう奴をシメて連れてこいつて言われてるんだからなー！」

レッズマン…完全に俺の通り名じゃないか

しかも露出だと？俺に対する刺客とこいつとか…？

スタンドの存在を知ったって事だらうか…と云がくにいつから色々と聞かなきやならなによつだな…

「何をこいつてるのか意味がわからんないけど、出来もしないこと言わんでくださいよ」「

「ほこつ…一まとめてぶつ飛ばしてやる

頭が足りなうだからとつあえず挑発

顔を赤くして腕に何かを纏わりつかせ、殴りかかる相手から離れた

憑依系のスタンドか？なんて呑気に考えながらまだ逃げてなかつた近くの恐らく同級生を連れて走る

つかんだ腕が随分とひょろいな…見た田女の子みたいだし

「ひい、ひい…す、すみません…もひ、走れな…」

「ちよつ…体力無さすぎだら…」

で、いきなり息切れですかい畜生

ゼえゼえと息切れし始める少年に何かを言おうとするとき突然爆音が聞こえた

何事かと後ろを見ると何やらバイクのロボットみたいなスーツを着た奴が全身のマフラーを噴かしながら突撃してきていた

「この俺のトンアップボーアイズから逃げると想つなよ…」

「暴走族、ねえ…見た目が「ロシキだしべッタリか」

「な、なんでそんなに落ち着いて…」

「慌ててりや、逃げられん 落ち着かなきや、戦えん…」

「戦う気なんですか！？」

「勝手に喧嘩売つてきたのはあいつだからな」

さて、あいつはやっぱりスーム一体化型のスタンダード

下手にこじそじそやつて見極める必要がない

しかし、なんてスピード

定にある車輪かどうかもない速度を生み出しているのか

力の走りじゃ無理臭いな

「アンブライ！」

アンブーラを建物の影から出して、俺と少年の服を掴んで引き上げた

その直後に奇声を上げながら拳を振り上げて突撃するゴロツキ小学生

目の前にあつた自販機が横真つ二つなる

「はつはつはー…あいつ殺す気満々かよ」

「笑つてゐる場合ぢやないですよ！」

どつもオツムの弱い奴も転生してゐるつていうのも考え方のだな

所詮人間だから神々は転生をせるときに何にも思わないのだろうけど、よくこんな奴を転生させようと思つよ全く

富出を挫くはずの存在を逆に利用されるとか本末転倒もいいところだ

とにかくこの「プロシキ小学生を倒すしかない

「アンブラッ！ 奴の足の影を掴めッ！」

「ぬあッ！？ 足が動かないッ！？」

今は、テバイスを使うわけにはいかない

俺の情報が、どこで漏れるかわからないからな

念話も傍受される可能もあるから魔法の一切は使えないと見ていいか

アンブラだけに頼ることはしたくないんだが、そうはいっていられないのがこの状況か

「ロロツキ… あいつのスタンドのパワーは強力すぎてアンブラで防ぐのはアウトだ

自分から腕か足をはねられに行きたくはない

「飛べッ！」

.....—「アーティストのアーティスト」

相手の影から腕を出して右足を掴んで宙に投げる

そのまま空中キヤッчиしたあとにぶんまわして遠くに投げ飛ばすッ！

## 爆音

「やつすがじやなこですか？」

「スー<sup>ツ</sup>型なら死<sup>しない</sup>だろ<sup>…</sup>たぶん」

空地に隕石でも墜ちたか、飛んでもない勢いで陥没した……そこまで本気で投げてないんだけどな……

俺達は奴の反対側に降り立つと再び走り出した。のだが……

「君もつまんない喧嘩に巻き込んですまなかつ  
ないーツー!?」

ハツとして後ろを見ると

「はあつ……はあつ……ああつ……あうつ……」

ヘロヘロになつて走る少年が

目は潤み、顔も朱に染まつてパツと見、ヒロヒーになつている  
走り方も何処と無く女の子っぽいし、乙女かお前はツ！？男だけど  
ツ！

「待ああちいいやあがれえヒロヒー——ツ——」

ドルルルンツ

そんな重いエンジン音が響く

次の瞬間には陥没地帯が吹き飛び、ゴロシキ小学生が、TUBが出てくる

これまたとんでもない速度で突つ込んでくる奴を見て驚いた

マフラーが数本折れてる点以外、無傷なのだ

あんな派手に飛んだのに

「くそがツーマフラーが折れちまつたじやねえかあああーーーツ  
ヨツとする

走つながらも鉄のフォンスをむしりとり、 吸収していく光景にギ  
ヨツとする

それに応じて折れていたマフラーは直り、 さらに増えていく

全身から煙を排出しながらスピードをあげてきた

「皿口再生かよー! テタラメな!」

このままじや俺も少年も追いかれてしまう

あんな華奢な奴じやパンチ一発で粉々になりそつだ

ああもつめとびへとーツ!

俺の影から出る腕で少年を捕まると影の重なつている歩道橋の影  
から伸びるもう一方の腕に掴まる

歩道橋の上に飛び乗り、 スレスレで突進をかわした

あまりの速度に肝を冷やしたぞ…

「しつかし……なんだこれ……」

「人がいませんね……」

いつの間にか大通りに出たんだが人気が無い感じじゃない  
人が、いない

空を見上げるといつの中にか結界が張られていた

ヴォルケンリッターの誰かが？

いや……管理局に正体が知られ始めた今、こんなことするわけ無いはず

まさか、富出の仕業か？

ふざけやがつて……なんだこの広範囲結界……

いや、あいつまさか街中の魔力保有者を洗い出すためにこんな真似  
をしたんじゃないのか

転生者には魔法を使う為のリンクカードは備わっている

「なんつー強行手段……そんなに支配したいっていつのまにこの物語  
(世界)を……」

奥歯が砕けかねないほどに歯軋りする

やつぱり、お前を許すわけにはいかない

まずは、あのTUBを倒す

「なあ、君もスタンンドを使えるんだろう?」

「え? あ、はい! でも、戦いに向いてない能力なんだ...」

「なに、能力は使いようだ... あいつのスピードをなんとか出来れば  
それでいい」

少年には悪いが俺のわがままに付き合つてもうおつ

俺はこの程度の障害で立ち止まる訳にはいかないのだから

まるでバイクが人型になったような少年は道路を駆け抜け、飛び上がった

歩道橋にはさつきの逃げた少年と影から腕を出す少年がいるはず

「セレから引きあつて出しちやるよおおお——ッ……」

彼はそのまま突撃する

歩道橋に向かっていく弾丸のじとき体当たりは、甲高い激突音を上げた

もはや当初の目的を忘れている今は手加減の一切がない

実際、彼はただスタンドの力を振るつて暴れられればいいという思考に満たされていたから

体当たりで折れたマフラーを直すべく鉄の部分を吸収しながらひしやげた歩道橋の中を覗いた

しかしそれには誰もいない

「おー!俺達はじつちだ!」

「……」

声に反応した方を見るとビルの上に亮たけました

亮は、相手を観察するよつた田で見ている

自分をこけにしているのかと少年は亮の方へ向かつた

その車輪付きの足は、ビルの壁面すら走破することができる

彼は直ぐにその澄ました顔を変形させいやうと考えながら登り始める

しかし、亮はただ見ているだけだ

だからその異変に気付かなかつた

突然、足がずるつと滑つたのだ

「んなッ！？なにいいいッ！？」

壁からずるずると滑り、少年はそのまま落下していく、小さなクレーターを歩道に作りながら落下した

しかし、マフラーが数本折れるだけでT-10Bは無傷なまま

「く、クソがッ！足を踏み外したか！」

彼はガードレールに捕まろうとして

盛大に転んだ

「？？？なんだ？今何が？」

立ち上がりうとするが、何もない歩道で足を滑らせたのだ

何度も立ち上がりうとするが足が地面を踏み締めることができなかつた

そんなときに目の前に人の頭ほどの正八面体が浮いているのを見つけた

それぞれの面に口のついた物体

口の隙間からは長い舌が覗いている

「クリズガム…その舌はあらゆる摩擦を舐めとる…か

「摩擦の『奪』、それだけしか出来ないけどね」

「いや、十分や…ありがとな、えつと…」

「真吾、赤坂真吾です」

「俺は矢口亮だ 君のスタンド能力に救われたよ」

亮は真吾に礼を言つて少年を見下ろした

這いつくばりながらも、金屬のある方へ近付くTUB

その様子に彼は攻略の糸口にならひ見る道を見付けた

何故いちいち折れたマフラーを直していくのか

下り田の足を下へて捕まえてその歩みを止めてやつた

その時に亮の手には熱が伝わる

「...、ナセシ...やのリカツ!」

アンブーラが、影から現れた両腕が次々にマフラーを破壊した

反撃しようと立上る」ともまともな「TOKYOはやれるがまま

全てのマフラーを破壊した時にそれは起つた

「う、ウグウアアアツ……熱いいいツ……熱いいい……ツ！  
！ギャアアアアアーネツ！」

「さつき、スタンド越しにかなりの熱が伝わってきた お前の身体  
中のマフラーはそのクソ重いスタンドを高速で動かした時に出るあ  
らゆる熱を逃す排熱機だツ！自己再生もマフラーを真っ先に直して  
いたツ！つまりそれがお前の弱点！」

「うぐぐぐ……！」

身体中の熱に堪らなくなつた少年はスタンドを解除した

軽いやけど状態の少年は逃げようと必死になる

しかし、亮はそれを許さない

「悪いがテメエは再起不能にしてやる…………己の力に酔う破壊的な  
思考ツ！その根底を打ち碎くツ！」

「！」の俺がツ！）んなガキにいじ……ツ！」

自分に迫る腕を見て少年の顔は絶望に染まつた

一気に拳のラッシュが少年を滅多打ちにする

そして

「アリーヴェデルチ（さよならだ）」

「ぐ  
げえ」

顎をはね上げて、意識を刈り取る

真吾はその光景に思わず眼を背けてしまうが、自分に降りかかった災難が払われたことで内心ホッとする

「アリーヴンデルチなんて借りてみたけどしつくつこないな…別の台詞にすりや良かったよ」

亮は亮で頭を搔きながら痙攣している少年を見てそんなことをボヤくのだった

氣付いたらドリフターズ2巻を買っていた

首置いてけ！

ああいうテンションの漫画は大好きなんですよ

とりあえず募集スタンド第一段はクリズガムに決定しました

赤坂真吾という男の娘が本体ですみません

真吾は亮チームに参加、亮の補佐をしてもらいます

『ゴロツキ小学生はあつさり撃破

あと迫る刺客編が終わって一話にいつたら主役は讓一に戻します

転生者側がキャラ濃すぎないかとたまに想ひ少々この頃の頃

藤城譲一は、シグナムは、焦っていた

管理局の出現により、無人世界での原生生物からの蒐集をすることに決め、シグナムと共に無人世界の下見をするはずだったのだが

「ふむ……まさか、他にも原作に介入している奴がいるとはな……しかもお前だとは思わなかつたな藤城」

人払いをして、いざ転移をしようとしたときを狙つたかのようにあら人物が現れたのだ

目の前にはコートに鎧をあわせたバリアジャケットを着た富出庵がそこにいた

シグナムが何者か問い合わせる間も無く巨大な大剣、カオスキャリバーを譲一に降り下ろそうとする

それにシグナムは一瞬で反応、レヴァンティンで弾き返し、一気に一触即発な空氣に転じた

（なんだ今の速度……反応出来なかつた……シグナムが居なかつたら

斬られていた……（）

「貴様……」

「なんだよ……地味な面の割にはシグナムをオとしたのか？」

「……何をいつてるんですか？」

「いや、はやての方をたぶらかしたのか……あるいは洗脳、刷り込みか……まあ、とにかくだ」

「一体、一体何をいつてているんだ……」

あの紅い魔導師の言つていたこいつが歪み？

「心やさしい人がね？はやてに下心をもつて近付いている奴がいるつて聞いたんだ……これは俺の物語なんだ……だからこれ以上はやてたちに近付かないでくれないかな……？」

一瞬、巻き散らかされた魔力

その桁外れの量に譲一とシグナムは顔をひきつらせた

「こつは勝てない……

蒐集出来ればどれだけいいかなんて心の隅で思つ

そして讓一は心で理解する

「いつは俺の敵だ

何がなんでも倒さなくてはならない

紅い魔導師に言われて警戒していたが成る程、自分より遙かに強い

神により力を注がれた少年、富出庵

俺が挑もうとしているのは、神なのか

はたまた化け物か

「人の交流関係を貴方にとやかく言われる筋合いは無いんですけど?」

自分が特殊な人間とバレていても、もうひとつの自分で言葉を交わさなかつた

そちらの自分では、富出に感じている恐怖を漏らしてしまってどうだから

何より普段と違つ富出の眼を見たときにじりじりしてか怒りを感じた

シグナムも、強くレヴァンティンを構え直して富出を睨み付けている  
ダメだ、手を出してはいけない……讓一はシグナムの手を握り締めて  
能力を発動した

「！？なにっ！？消えただと！？転移の瞬間が早すぎる… ふざけやがって…… 大丈夫、はやてもヴォルケンリッターもリインも俺が助けてあげるからな」

譲一はなりふり構わず転移をし続けた

いつの間にか張られていた結界を越えても

シグナムの手を引っ張り、走っては転移を繰り返す

「もついい藤城…」

その言葉によつやく足を止めた譲一は崩れ落ちた

一気に身体中から汗が吹き出る

シグナムの手が震えてるのか、自分の手が震えているのか… そのどちらもか

「大丈夫、か」

「その言葉、そつくりそのまま返すぜ……」

「……正直、私はあのまま斬りかかっていっても自分が斬られる光景しか浮かばなかつた……初めて勝てないことに恐怖した……」

「俺だつてその光景が見えたさ……シグナム……あいつの目、見たか？」

譲一の唐突な質問にシグナムは首を横に振つた

確實に譲一を殺そうとしていた相手に反応できるように精神が摩り切れかねない状態で警戒していたのだ

そんな余裕は譲一にしかなかつたからシグナムは訪ねる

「いや……お前は……何を見た？」

肩で息をしている譲一がシグナムを見ながら口を開いた

「俺の友人に、人の目を見て内面を知ろうとする奴がいる……そんな簡単に知れるわけがねえ、無理な話と思つてた……だけど俺には見えた！あいつの目、その内面を知つた！」

あいつは、俺達を命あるものと一切見ていないッ！－－あいつは全てを自分の悦楽を、快樂を満たせるかどうかしか見ていないんだッ！－－自分中心に全てを回そうとする、根っからの化物ッ－－

（確かに物語が舞台の世界…奴は、障害になるなら全て都合のいいようには塗り潰して壊し飛ばせる……それこそ神だらうが世界だらうがその意思を否定できる……もつ一度紅い魔導師に会う必要があるか…）

譲一はそこまで考えて、先程恐怖の中に感じた怒りが、さつと畜生のその内面を知ったが故の本能的な怒りだと理解した

あいつは、必ず倒す

幾分か落ち着いてきた譲一はシグナムを見る

自分より遙かに戦闘経験のあるシグナムの表情が優れないところからかなり精神的に参つていてるのだろう

畜生の存在を考えて、シグナムと譲一は下見に行く時間を変えて行くことにするのだった

「転移先が全く掴めないか……まあ、どうせこの街に皆住んでるん

だし、もうちょっとと脅かしてやればいいかな？俺の女（の予定）に手を出そつとしてる奴がちらほらいたから何かと思えば、転生者が他にいたなんて……こいつは俺という主人公がいかに最強か見せ付けるための試練か フツフツフツなら有象無象の魔の手から俺が守らないとなッ！フウーハツハツハーツ！！

「ママあ、変なお兄ちゃんがいるよ

「田を会わせちゃいけません、行きますよ」

何処かの部屋の中

そこには4つの人影

一人の女性が警戒するような眼差しを一つの影に向けていた

その影と相対する男性

彼は何かを了承するように頷く

それに満足したのか、相対していた影

卒塔婆を背負う異形の人影は男性に感謝の意を述べて己の卒塔婆を叩き割る

異形の人影は何かに還るよつて影に消えていくのだった

SIDE 亮

「…結界が消えたか…」

空が元の色に戻った

それに応じて街に人の気配が現れる

「あ、あの…」

「ん？」

「助けて頂いてありがとうございます… それですね… 一つ頼みごとがあるんですがいいですか？」

「頼みー」とへ..

「はい…

庵を… 富出庵を止めたいんです」

「これは… まさか富出に血を挑みたいつて言ひののか？」

いや、それだけではないな… 何か別の思惑があるようだ

「こいつは自分の能力が戦い向きでないと分かっているのに、やつをの富出を止めるという言葉に決意を感じた

やつとの戦いで腹を括つたのか？

「事情を聞いてもいいか？」

「……………彼は、前世の僕の友達だった… こんな見た目だったから前世ではよくいじめられて、そんな僕を彼は助けてくれたんです」

「意外だな… そんな一面があるのか」

正直、過去（前世）を知れば俺は槍を鈍らさせうだが聞くのも構わないか

討つことには変わらないからな

少しだけ友達という点に富出のスペイクとも思つたが俺に向けて差し向けた刺客に襲われてたらその線は無いだろう

「なんの因果か知らないけれど」「やつでもう一度生を受けて、庵

も居るつて知つたときに会いに行つたんだ……だけど、彼は自分の力に酔つていて昔の面影なんてなかつたんです……全てを都合のいいようにねじ曲げるようになった彼は見ていられない、だから友達だつた僕は止めたいんです！」

「事情は分かつたが……わかつてゐるのか？今の富出なら確實に殺しあいになる。その時にお前はあいつを殺すかも知れないんだぞ？」

「覚悟はできます……！」

「……はあ、やっぱり俺は冷徹になりきれない……か

説得しようつといつ氣概もある彼を俺は認めてしまつてゐる

純粋にして潔白

なら、チャンスを作るしかないか

「だつたら俺はお前を利用するぜ？あいつを止めるにはそれぐらいは平氣でするからな」

「わかつてますよ。僕だつて矢口君を利用する腹積もりなんですか

「ら

「あ、そういうやさつきの上級生が言つてた奴な？あれ俺のことだから、口口シク共犯者」

「え？ええ？？レッズマンツー！？」

こうして俺は富出を倒すための仲間を手に入れた訳なんだが……

どこで見られたかわからないがなのはに彼女でも居るのかとか、アリサによる大尋問大会になつたとか、すずかがやけに面白そうに質問してきたとか大騒ぎになつた

そういうや真吾の奴、見た目がほぼ女の子にしか見えないんだつたのを忘れていた

かろうじて男ってわかるけど二人きりでいるのはあらぬ噂をたてられそうだから自重しよう

そのせいでせつかく会わないように避けてたフェイトとおもいつきり出くわしたのは余談である

フェイトが涙目で服を引っ張つてきたり、さりげなく俺のそばによくいるようになつたり、やたらとフェイトがスキンシップを求めてきたり、サリイとフェイトが会つてなんか火花が散つているのを幻視したり、母さんにフェイトとサリイ一人して着せ替え人形になつたのなんてのも余談だ

暫く学校休もうかな…

で、夕方

「さてと……懲りずに向かってきたガツツは認めるが完全に再起不能にされたいようだな？」

再びゴロゴロツキ小学生が他のスタンンド使い複数連れて現れる

といつのも富出の協力者を真吾に頼んであぶり出しただけだ  
刺客予備軍、藤城譲一が活動しやすいように俺が完膚なきまでに叩  
き潰しておくとしょつ

「アンブラー……

……Act 2……

俺の後ろの闇を見て怯え出す刺客予備軍

今出せる俺の本気

「な、なんだそりや……  
「う、うわあああ……」

「ひいいいいっー」

闇に葬る

なんて、皆殺しになんて惨いことはしないが俺は徹底的にやるたち  
なんでな？

悪いが原作が終わるまで全員病院で健康に暮らしてくれ

何人か再起不能になるかもしけんがそこは運が悪かつただけ

目の前の阿鼻叫喚の地獄絵図を見ながら記憶操作魔法を展開する準備を始めた

## 迫る刺客？（後書き）

このあと「話作るはずだつたけれど、一話だけにします

風邪が治らないもので…

今回は裏側の物語がちらほらありました

そしてアンブラ、まさかのAct2

亮はスタンンドの可能性を引き出そうと努力しているからです

ACTじゃなくてActなのはなんとなく

Act2の能力はまだ不明ですが、複数の人間を相手に出来るような能力ですね

藤城譲一編？にて明かそうと思います

熱が下がらないから大学休んだのは痛いなあ…

彼女は金色の少女？（前書き）

リア充め

爆発しろ

矢口亮編？エピローグ

## 彼女は金色の少女？

SHADE 亮

デパートの中で俺は今非常にめんどくさい状態に陥っていた

右手には色々な色の布をマントのよひに羽織るサリイが

左手にはつっこないだ転校してきた砂金のよつたな綺麗な金髪を揺らすフュイトが

端から見て美少女を侍らせているよひにも見える格好になっていた

確実に同年代の少年たちに後ろから刺されそうな状況

どうしてこうなった？

いや、学校で大尋問大会やったあとこいつなりそうな気配はあったけど

街中でサリイと歩いてたらフュイトにバッタリ会つたときこまさかそのまま明日の買い物を約束されるとか…

と言つたデバイス越しに『プレシアから『フロイトをよひじへね』とかどう返せばいいんだよ

結局流されるまま来てしまったわけで

本当なら役得なんだが…

「ねえ亮…私あれが欲しいな」

「アキラ、あれほしー」

「……」

「……」

二人して同じものを指差し、にらみあつ

その間にいる俺はかなり居心地が悪いです

とりあえず二人ぶんの品物を買ってあげたが、何故か一人にジト目で睨まれた

え？俺が悪いのこれ

そもそもフロイトってこんなキャラだったか？プレシアが生きてるからってこんな甘えん坊になるとか知らんぞ

誰かに甘えたりすることを抑えてた分が爆発してるような氣もする

けど……

サリイも逃亡生活が終わって頼れる人間が増えたからこうなっちゃつたし……

だったら一人してこんな睨み合わないよな？

どこかお気に入りの場所を取り合つ、猫の喧嘩に見えてきたのは何故だろうか

「はあ……フュイト、サリイ、お前ら細かい生活用品とか買いに来たんだろう？喧嘩するなら帰るぞ？」

「「「」めんなさい」」

謝るの早つ

しかし性格的にこの一人は合わないのかね？

俺としてはフュイトもサリイの友達になつてくれればいいのだが  
あ、サリイの奴は親が裏技を使ったお陰で聖祥に入るのが決定した  
入るといつても来年からになつてしまつ

しかも学校にいっていない分、授業についていけないだろう

その為に今はフュイトとアルフを教育していた経験のあるリースが

勉強を教えている

デバイスに学校の授業内容を入れたものや電子辞書をクリエイトブルースに喰わせるという反則もあつたが、努力するということが養われないので却下になつてゐる

因みにこの案を提案した俺は教育を馬鹿にしてるとリースに説教を食らつた

最近正座ばっかりで正座することに苦手意識ができてしまつたり、一週間高級猫缶を買つ羽田になつたりしたのは余談だ

#### 閑話休題

残りは大荷物を買つことにになりそつなので早めの昼食をとることにする

このときの席でもどつちが俺の隣に座るか争つてゐたが、丸い円形のテーブルを囲むことで争いを鎮静した

「 「 …… 「

だからつて一人して何故恨めしそうにひつちを見る?

スペゲツティやハンバーグを頼み席についているとフュイトが念話をしてきた

『いじめんね』

『は? なにが』

『今日の買い物、なんだか振り回しちゃって』

『別にいいって、それにこの後も一人のお嬢さんに振り回されるんだからな?』

『お嬢さんって亮一。』

『と言づか念話で話すような事じゃないよ? そんなに恥ずかしかった?』

『う…』

『じゃあ念話切るよ』

『ま、まつて亮一。』

『ん?』

『…………無理、しないでね』

『してねーよ、ジュエルシード素手で掴んだお前がそれ言ひへ。』

『…………やう、だね』

『…………?』

なんだつたりうか今の最後は

つて念話に集中しそぎたのかフュイトの顔にソースがついてた  
どりやら眞付いてなこらし

「フュイト、ちょっとこいつに向かなき」

「?.なに亮...んづー.」

こいつに上げたフュイトの顔についたソースをグリグリ拭き取る  
ちよつと痛そうだが俺は気にしない

「変な顔にしたまま買い物の続きなんてしたくないだろ?」

キョトンとしてたが俺の言葉で直ぐに赤くなるフュイト

いろんな恥ずかしさが襲つてきたか、可愛い奴め

そんなとき元やたらと熱のこもつた視線を浴びせられる

その方向を見るとサリイも顔をソースで汚していた

……お前、やつきのやり取り見て自分で汚したな

そんなに拭いてほしいんかい

そのサリィの様子に俺とフュイトは苦笑いしたのだった

折角だしちゃんと拭いてあげたけどな

昼食を終えて、買い物を再開

ついでに夕飯の食材を買つつもじのようだ

ああ、こりゃ俺は荷物係かなあ

クロノを巻き込んでおけばよかつた

で、予想通りに一つの家庭分だけ食材やら雑貨やら大量の荷物を持つことに

「だ、大丈夫？ 重いなら私も持つよ？」

「女の子に思い荷物は持たせられないよ… 大丈夫… これ、ぐらい、  
平氣だ」

嘘です平氣じゃないです

指がボンレスハムみたいになつて千切れ飛びそうな錯覚を覚える

小学生のからだは不便極まりないなほんとに

せめて小6くらいの体であればよかつたんだけじね

「サリィ、手伝つ

いや、無理だからね？そんな細い腕で持つたら折れるつて

やんわりとサリィの好意を断りながら帰り道につくが

「……やつぱり休まして下せー…」

「あはは…じゃああの公園で休もう?」

まあ、その公園は以前のクロノと同じ様に腰を下ろした

あの時と同じベンチに同じ様に腰を下ろした

ただしとなりには真つ黒執務官ではなくフロイトが座つてこる

サリィはサリィで犬と戯れ始めた

「いや、散歩コースなのか？」

「ああ～指痛え～」

「無理するからだよ」

「いや、男は時として我を通り抜けてやらんといつが、一いつ匹まないといふかだな」

「ああ、跡がついたよ」

「血も止まつた分ビベビベと流れてもよつた感覚がする

「言葉にしなきやなにも云わぬな」…

「ん？」

「やつぱつ、止められないの？ 壁田船を…」

「無理だな」

キッパリと言つ

やつ、無理なんだよ

人の手に余る力を得たときに奴の心に悪が、漆黒の意志が生まれた

のだから

その変わってしまった心を知ってしまえば、どれだけ危険なのか分かつてしまつ

奴の友だつた眞吾でさえ殺めてでも止めなければならぬとその意思を見せるほどに

「どうして、止められないの？」

「フュイトに悪い虫が付かない為かな」

「はぐらかさないでよ……私は亮に人殺しなんてしてほしくない……

私はつ

「あつがとつ……俺なんかのために……でも譲る」とは出来ないよ

「…………どうしてなの？」

「……俺がやらないと、他の誰かに人殺しさせちゃうんだよフュイト  
俺がやらなくとも誰かがその罪を背負つちゃうんだ。俺は見ず知  
りの誰かにやらせて安穏と生きる真似なんて出来ないんだよ」

むしり、誰かが早く息の根を止めてしまえ等と思つてゐる

……半分嘘

本能的に奴の悪意を俺は許せない

消し去りたいほどに

神に仕組まれたか、本当に心の内から来るかなんてわかんない

ただ今はやらないではならないだけはわかる

それだけのこと

「アキラ？ フェイト？」

ハツとすると心配そうな目で見るサリィがいた

その瞳には悲しみの色が浮かんでいる

フェイトといい随分と誰かを悲しませることに事欠かないらしいな

俺は

わしゃわしゃとサリィの頭を撫でて俺は立ち上がった

「……富出が全てから手を引いてくれれば、俺は何もしない 大丈夫だフェイト、大丈夫」

荷物を持って手を差し伸べる

それを受けて立ち上がるフロイトに笑いかけて俺達は帰宅する」ことなつた

今にも泣き出しそうな顔をしたフロイトを見たくないかのよひに

使命から逃げ出せばもうフロイト達を悲しませないかもしない  
この一歩を踏みとどけることが出来れば俺も皆も笑って生きていけるんだわつ

でもダメなんだ

その間に畠山は多くの誰かを悲しませる

中途半端などいりで投げ出せれないんだよ

俺の道は昔に決してしまつている……引き返すことなんて無理だ

「めぐ、じめんなフロイト

これからも俺は、優しい優しい君を悲しませる

## 彼女は金色の少女？（後書き）

意味不明な話になりかけた。：

そして亮の回りなんか女性の影が多いよこいつ

一人ぐらい分けてくれ

さて、次は両主人公、闇の書事件後半戦ですかね

譲一チームはヴォルケンリッターが

亮チームはリニス、真吾が

どう動くかは闇の書事件と富出庵の動きにかかってます

▽▽なのはやクロノが待ち受けてそうだ

次は転生者目録その3



あまり役に立たない人物紹介3

とスタンド紹介

矢口亮

もう一人の主人公

PT事件におけるフェイトチームに介入していた紅い魔導師『レッドマン』

他にも原作を搔き回そうとしたり、悪い虫がつきそうな場合に「いつも蹴散らす

影から現れる巨大な両手両足のスタンド、アンブラの本体

物語の影から展開を見守るつもりのようだが……

冷徹になりきれず、己が本当は現状から一步も踏み出せていないことに気が付いていない

その一步を踏み出すとき、彼は前進か、後退か

ミッドナルダ出身のスタンンド使い

強力なスタンドに目覚めており、他世界にも転生者が生まれているのが判明した

前世は幼くして病に倒れた少女

今回の転生でなに不自由なく過ごしてきただが、管理局員である両親が殉職、財産は全て親戚に奪われて家を失う

前世の家を目指すことを決意

身ぐるみを剥がれたり、人さらいなどにあいかけるが、スタンドを使いつことで乗り切り続けた

唯一の今世の親の繋がりの布を纏い、地球に転移

最後は亮に捕縛される

管理局に突き出されるかと心配したが、亮がクロノに無茶を通して保護観察に

以降は亮と一緒に前世の家探しをしたり、矢口母の着せ替え人形になつたり、リニスと勉強会に勤しむ

犬や猫が好きすぎて、見かけるともふもふしようとす

何故かフェイトをライバル視、亮と仲良くすると拗ねる

纏つていた布はサリイの服作りに使われた時の余りを気に入ったのが始まり

両親が亡くなるまで余ればもらっていた

赤坂真吾

聖祥に通う転生者の一人

男装した女子に見えてしまうほど男の娘

だが男だ

いちいちしぐさも女の子っぽい

だが男だ

趣味も女の子っぽい

だが男だ

前世は富出庵と友人だと言う

変わり果てた富出の暴走を止めるべく活動するも自分のスタンンドではどうしようもないでの、誰か協力出来そうな人を探していた

運悪く富出に利用されたスタンンド使いに絡まれてしまつたところを矢口亮が救う

スタンド使いを退けた後に協力関係を結び、亮チームに

亮のサポートを務める

貧弱だけれどその覚悟は本物

リース

プレシアが飼っていた山猫を素体とした使い魔

契約を終えて消えたはずだったのに亮の使い魔にされた

本人もどうやつて復活させてくれたのかわからない、真相は亮しかわからない

退場した身であるため、プレシアやフェイトを影から見守つており、亮のバックアップをしている

一方で亮には魔法を、サリイには一般教養を教えていたり

やつぱり矢口母に着せ替え人形にされる

藤城譲一

主人公

本格的に蒐集に参加

矢口と交戦するも決着つかずに撤退

魔法をヴォルケンリッターより学習中

デバイスに憧れてたりする

富出庵と対峙した際にその悪意を受けて恐怖すると共に怒りを感じた

使命を初めて意識し始める

ゴロツキみたいな上級生

大体五年生辺りの転生者

上級生なのにはすごい柄が悪い、大丈夫か

前世はまんま、コロツキ、鉄砲玉で自分のいた組の抗争で命を落とした  
思慮が足りない訳じやないけど絶対強者に引き込まれたせいで暴走  
気味に

真吾を問い合わせているときに亮に妨害され、そのまま一人に撃退される

完全に倒されなかつたので一度逃亡、他のスタンダード使いを率いてリベンジ……

が、もうひとつ姿を見せた亮のスタンダードによつて全員もろとも病院送りにされた

富出庵

地味にバス代浪費した

未だになのは達を自分のものじょうとしている

どこかでスタンダードを知つたが、なにそれ？美味しいの？状態

スタンダードを然程脅威と思っておらず甘く見ている

スタンド使いを捕まえてレッドマン狩りをするも失敗

大して期待してないよつのでそれほど困っていない

自分以外の存在を命あるものと見なしておらず、『登場人物である』  
という認識しかしていない

主人公である自分は全てを思い通りに出来ると信じている

自分の行動こそ正しいと思し、悪だと全く気付かない邪悪

真吾は命に關して無頓着になるのを恐れている

本体は矢口亮

いつもスタンダードの可能性を研究しているのでその成長性が未だにわからぬ

Act 1

破壊力 A

スピード C

射程距離 A (影を繋げば何処までも)

持続力 B

精密動作性 B

成長性 ?

Act 2

破壊力 ?

スピード ?

射程距離 ?

持続力 ?

精密動作性 ?

成長性 ?

能力

本体の影より巨大な腕と足の影を出す

本体の影が他人の影に触れることで捕まえることが可能

アンブラーが相手の影を掴むのは直接縛っているため

本体の影が建物の影に入っていたりするとその影の中を自由に行き来することが出来る

## Act 2

詳細不明

複数のスタンンド使いを纏めて相手取ることだけしか判明していない

共通の弱点として、影を崩されたり強すぎる光などで影が失つてしまふと強制的にスタンンド能力を解除される

本体の影を取り戻さなければその間はスタンンドを出すことができない

逆に暗闇ではその力は増していく

また、何故か教会などの神聖な場所や寺などでは弱体化する

## クリエイトブルース

一応遠距離操作型のスタンダード

本体はサリィ・マレイヤ

寂しさがきつかけとなつて発現したためか、余り本体のそばを離れるのではない

渴を巻いた目に、大きく裂けた口と一見何かの怪物がデフォルトされたぬいぐるみのようにも見えるが強力な力を持っている

デバイスイーターのからくじまのスタンダードがデバイスを喰い飛ばしていくため

破壊力	D
スピード	C
射程距離	B
持続力	B
精密動作性	A
成長性	C

能力

機械類を捕食し、取り込む

際限がなく、食べた物の知識を本体が得ることが可能

ただし本体にそれなりの学がなければ得た知識を完全に理解することができない

喰つた機械類はクリエイトブルースの口から大量に出せる

ただし口の中までしか出せず、完全に出すと一分ほどで消滅する

サリィはクリエイトブルースの口から大量のデバイスを覗かせて魔法行使していた

大量に出すのは足りない魔法知識を補つため

因みにサリィはテレビで見たアハト・アハトや、戦車にミニーガンを食べてみたいと言つて亮とリニースを慌てさせた

クリズガム

遠距離操作型のスタンド

本体は赤坂真吾

人の頭部程の大きさの正八面体に口がついている

口の中には長い舌が隠れている

能力ゆえに真吾は壳のサポートに徹する

破壊力 無し

スピード C

射程距離 A (100m、舌は10m)

持続力 A

精密動作性 D

成長性 C

能力

摩擦の「奪」

舌で舐めた場所の摩擦を奪う、あるいは「奪える」ことが可能

摩擦を無くすことで物理攻撃を滑らせて回避するなど防御能力は高い

相手の足元の摩擦を奪い、舌で絡ませて転ばすなどといったことが  
主な使い方

摩擦の奪われた場所は再び舐めて返すか、本体が死なない限り奪わ

れたままになる

クリズガムは募集スタンドです

案の提供ありがとうございました

トンアップボーアズ

暴走族の意のスーツ型スタンド

本体は「ゴロツキみたいな上級生

バイクが人型に変形した物を纏つた姿で、まるで特撮ヒーローものに現れるロボットのよう

身体中に大量のマフラーが生えており、足にはタイヤが備わっている非常に重いスタンドで本来なら腕をあげるのもままならないが、とてつもないパワーで動かす

恐るべきスピードもあるせいで本来の破壊力をさらに底上げする

しかし、このスタンドを動かすと異様に熱が上るので本体も常に

蒸し焼きの脅威にさらされ続ける

冷却できない為に排熱機能を兼ねたマフラーが生命線となり弱点となる

亮達はTUBと略していた

破壊力	A
スピード	A
射程距離	E
持続力	E
精密動作性	C
成長性	D

能力

触れた金属の吸収によるスタンドの修復

ただでさえ頑丈なスタンドだが、もし亀裂などが入つたりしたら危険である

そのための自己再生である

基本的にはマフラーがこのスタンドのパワーに耐えきれずに壊れやすいのでマフラーの修復が主な使い道

— 必マフラーを壊せしめても可能

？？？

物語の影にいる謎の異形

背中に卒塔婆を背負つており様々な場所で暗躍している

スタンダードと思われるが……

この異形なんなのか正体不明である

クリズガムの案を下さった白いサンタクロース様、ありがとうございました

また新たにスタンド案が集まつてきます

闇の書事件ではもつ募集スタンドは出さないかも知れませんが、空白期やStsの時に使おうと思います

メメタア

せやてん譲一（繪書也）

暫くは譲一のターン

はやてと譲一?

SHIDE 謙一

「しゃ、シャマル…」

「譲一君…? 大丈夫ですか…?」

「謀り、まし…た…ね…ガクッ」

「ああ…ダメです譲一君…田をつ…田を開けてください…！ 譲一君つ…！ 誰か治療が出来る人をつ…！」

「いや、シャマル自分で出来るやろ」

とつあえず懸ふざけは「」までこじょりか

死線をさ迷つちまつたのは間違いじゃないが、ギリギリ病院送りにされる」たあねえ

まあ何があったかと言つとだ

間違つて食べちまつたんだ

シャマルの料理を

学校から帰つてきたときに小腹が空いてたんだ

テーブルを見れば、はやでが作りおきしたのか美味しいそうなご飯が

ちゅうとばかりつまむことにした俺は怪しそうに口元にして……  
ぶつ倒れた

見た目だけ完璧だったが中身がツ！ 中身がヤバイって！

はやでによつて指導を受けているはずなのになんで入れちゃダメな  
調味料とか栄養材入れるのシャマルさん

初めて口にしたが……なんでこないだヴィータとザフィーラが倒れて  
いたのかよくわかつた

なんか事なきを得た俺はお口直しに下校中寄り道したある店のシ  
ュークリームを食べていた

ああ、この程よい甘味が俺のイカれた舌に元の味覚を取り戻してく  
れる……

「下手につまみ食いするんじゃ ありませんねヴィータ……」

「まつたくだよ…よく生きてたなお前」

ヴィータを交えてちびちびと食べる

はやてやシャマルとも食べる予定なんだが、今はシャマル説教中だ

……実はさつきの料理

はやてが採点の為に食べるつもりだったりじい

俺が毒味役になつてよかつた

説教もいい感じで切り上げたのか、はやてもシャマルもこっちに来た

シャマルが若干涙目だが変なもん入れんのが悪いんだろ

反省したかどうかは怪しいがなーきっとこいつがまた誰か犠牲になるだろー

「おおつーこれは美味しいわあー

「それは良かった またいつか買つてきてあげますね

美味しそうに頬張るはやてを見て良かった

今はいないザフィーラとシグナムの分を残して冷蔵庫に仕舞つとはやてたちがゲームしようと言つ

初めははやての家に遊びにいくときに用意したのが、家族が増えたおかげでパーティーゲームをやつたりすることが多くなつた

はやてと一人でやつっていたのが懐かしく思えるな

ヴィータがはやてに頼まれて入れたのはいろんな作品のキャラが入り乱れて乱闘するお祭りのようなゲーム

はやてと一人でやつたときは無意味に残機99で殴りあいしたなあ

これ、ヴォルケンリッター達も好評だったのが驚きだ

「ふつふつふ…いいんですかそのゲームで…僕は一切手を抜きませんからね」

いつも自分が使うキャラを選んだとき

みんなの目が光った

「…あれ?なんかチーム戦になつてません?て言つた僕一人!?」

「悪いなあ、譲一君には一人で頑張つてもいいで?」

「譲一君はいつもトップにたつてますからね」

「今日は泣かしてやるよー覚悟じる讓ー！」

おのれ！ハ神家全員で謀ったな！？

確かにこの面子で一番強いのは俺だからサバイバルで戦つても一人勝ちしかねない

だからって酷すぎねえか？

こつなれば氣合いで全員叩き落としてやんよー！

結果

ギリギリで俺が勝利した

危ねえ…まさかシャマルが予想以上に腕をあげてやがるとは……思わぬ伏兵に驚いたぜ

総合成績画面では意外にも2位の成績にシャマルがいた

以下ははやて、ヴィータと続いている

「は、ハツハツハツ！ いくら二人がかりだろうと無駄無駄アツ！  
WRYYYYYYツー！」

「ちくしょー… 結構いい線いってたはずなんだけどなあ

「やつぱ、やつぱ魔王譲一を倒すにはあの人を呼ぶしかあらへん…」

「は、はやてちゃん…まさかあの人を呼ぶのですか…?」

「そのままかやー…もう部屋の前にある…カモン…」

ガチャリとドアが開く

はやてが部屋のなかに招き入れた人物…それはツ…!

「呼びましたか主」

桃色の髪を揺らすナイスバディ、シグナムと青い毛並みの守護獣、ザフィーラー

散歩にいったはづなのにシャマルに頼んで呼び戻しやがったな  
!?

実はこの二人、このゲームで1、2を争う実力者だったりする

「ちよつ…待つてくださいはやて…流石に彼女達を相手取るなんて  
無理ですよ…?」

「先生、オネガイシマス」

「「まかされた」」

「はやてH H H H H —ツ！—」

随分とノリがいいよね皆

このあとサバイバルでやったが俺が真っ先に倒されて、シグナムとザフィーラの一騎討ち

接戦の末、辛うじてザフィーラが1位に輝いた

「最後に正義は勝つんや！」

「お、おのれ……だが忘れるな…俺はいずれ頂点に立つてみせる…ぐふつ」

「なんだこの茶番」

ヴィータの言つ通りである

そのあとはゲームをえていつの間にかプチゲーム大会になっていた

機種まで変えて格ゲーし始めた頃にはやでが図書館から借りてた本を返すために席を立った

『ああ、シャマル』

『はい?なんですか?』

『シャマルが以前蒐集した子なんだけど、ちゃんと後遺症無く生活してましたよ』

『そうですか…最後に無理してまで結界を破壊にかかったときはビックリしましたから…何の支障がなければ安心です』

シャマルから聞いた話じゅ相手は高町なのはだつた

まさかあれだけの砲撃が出来るような子とは思わなかつたぜ

しかも転入してきたフェイントって子も魔導師、しかも時空なんたらの局員だつた

なのはから蒐集しちまつたから、時空なんたらに目をつけられたみたいだし次は相当やりにくくなる

今は無人世界で蒐集してるが、そのうち介入してきそうなんだよな…

ま、逆に餌がむづから来てくれるとポジティブに考えるか

富出という不安要素もあるが、なるよになれてやつだ

「今日は僕がはやてを連れていきますね」

「わかりました 気を付けてくださいね」

「主を頼んだぞ」

「ほな行つてくるなあ」

シグナムは負けず嫌いなヴィータに捕まつたままなんだらうな  
たまにはそのまま息抜きしてくれよ?

シャマルとザフィーラに見送られながら図書館に向けて歩を進める  
のだった

「それにしてもたくさん読みますねえ…」の鼻をなくしたゾウさん  
なんて面白いですか?」

「面白いでえー最初は好奇心からやつたけど読み『たえはバツチリ  
やー』

「つ、ん…興味は沸くんですが何故か読む氣になりませんねえ」

「読まず嫌いはあかんで譲一君 そつや、こないだ図書館に譲一君  
の読みたがつとつた小説帰つてきてたで?」

「本当にですか？なら僕も今日は借りてこようよしうか」

「ハハハ樂しそうに笑うはやて

なんでこの子がまた訳のわからぬ田にあわなきやならぬいんだ

早く、早く蒐集しないと…

大分埋まつてきてるがまだまだ

なのはにや悪かつたがかなりの稼ぎだつたんだよな

ん…見た感じ、フロイトもなのはクラスの保有量だつたはず

再戦を望むシグナムに任せるとか

俺は出来れば紅い魔導師辺りだな

竜出に闘しては仕掛けられたら即撤退といったところ

当分、厳しい戦いになりそうだな

「やついやな、前にハリですすかつて子と仲よくなつたんや

「…すずかつて…丹村すずかさんのことですか？」

「わ、わ…って知り合…?」

「クラスメイトです 数少ない女の子の友達ですね」

これは意外

こんなところすずかと友達になつてたんだな

詳しく述べとはやての手が届かなつたよつたの本をとつてくれたのが始まりみたいだ

「つて、数少ない女の子の友達…譲一君そんなに友達おらぐんの?  
寂しいの?」

「ぐ、そんな言い方しなくていいだろが

「しゃべり方、戻つてるで」

「おや、僕としたことが」

はやてのかわいがつな物を見る田代ジ田代を返しながら、はやての  
言つていた小説を取り出した

あとははやての分の本を返して新たに借りる本を探すだけか

そんなときはやはやては外の景色を見ながらポツリと呟いた

「クラスメイトか…学校に行ってみたいなあ」

「行けますよ、はやてなら」

「でもこんな足やしちゃ間に迷惑かかる」

「大丈夫、はやての足はもう一度動くようになりますから その時に僕やすずかの通う学校に行きましょっ?」

そうだ

命を救う為だけじゃない

闇の書を完成させれば動かない足だって治る

だから俺はその可能性を信じて、約束を破つたヴォルケンリッターの共犯者になつたんだ

絶対に治してやる

闇の書が彼女の幸せを奪つといつのなら、俺は奪われた以上の幸福を与えないとな

未だに絶望から抜け出しきれない彼女を掬い上げてみせる

「アリヒいや譲一君、また最近新しいぐみ作ってへんか?」

「あ、わかりましたか?」

「あれだけ材料買って來たらわかるよ? なに作ってるん?」

「今日はデフォルメしたヴォルケンリッターの顔さんを作りますね もうすでに、ヴィータとシャマルとザフィーラは完成してシグナムを作ってるといひですね なんならはやても作りますよ?」

「うーん…遠慮するわあ…」

「あ」

「へ? どうないしたん?」

「ザフィーラの狼形態を作るのを忘れてました…」

「ほんまになんでも作れるなあ

とつあえずほのぼの?回

色々とおかしくなったがまあ気にしないのだ

次回はヴァルケンリッター包囲網辺りかな…

やつとまともな魔導師戦を始められそうだ

魔導師V.S幽波紋使い？（前書き）

譲一V.Sクロノ

魔導師V.S幽波紋使いシリーズは空白期や3期とかにも出る予定

## 魔導師 VS 幽波紋使い？

SIDE 謙一

ちょうどいい無人世界が見つからない今でも蒐集の手は緩めない

最近はページの埋まり具合が悪いから急がなきやならねえ

そんな中、ついに管理局に包围されたと念話が来た

不味いなあ…今日はやての家にすずかが来るんだよ

はやては自慢の家族を紹介したがるだろつし、皆をなんとか転移させてやりたい

が、スカーサファイアの能力で連れ出せるのは一人だけ

いちいち一人ずつ連れてくとか効率悪すぎ、普通に皆転移した方が

早え

ビルの屋上を転移しながらいくと結界が発動したのが見えた

どうやら守護騎士を捕らえる気満々らしい

悪いが今回ばかりはどちらにも決着をつけさせるわけにはいかねえな

騎士の誇り云々言われそつだがはやての」とを上げて戦うのをやめてもらおう

足止めは、俺一人で十分だ

転移し続けて結界の目の前に立つ

不思議だよな、後ろ見りや普通に人居んのに前の結界から先は誰もいないんだから

日常と非日常の境界つてか？

つまらないことを考えながら結界に触るとひびを入れてその中に入り込んだ

結界だらうがなんだらうが、空間そのものをぶつ壊すスカーサファイアの前にや意味ないんだよ

まあひびはほつとけば直るじ」「寧に直す必要がない

ビルを転々としていくと管理局員に包囲された皆がいた

おまけにシグナムが派手に登場するし

さてと…どう動くかな？

なんか話をしてるみたいだが…風の音で声が拾えねえな

スタンドのお陰で鋭敏になつた聴覚も余計な音を拾つからめんどくさい

『おい、皆聞こえるか?』

『譲一か、どうしたんだよ』

『今日はまたのところに友達がくるんだ 今日は適当に戦つて終わりな?』

『しかしテスタロッサとの戦いが

『シグナム、はやてをさみじがらせるなよ?』

『む…』

『俺が何人かの同類から蒐集ぐらいはやつてやる』

『結界はどうするんですか』

『流石に今回ばっかりは闇の書を使え…』

『譲一!…せしたらせつからく集めた魔力が…』

『ヴィータ、安心しろ なんとか俺がキャラにしてやる だから適当にまく算段たてておけ ザフィーラはちよつと俺の手伝い頼むわ』

『了解した』

そいじゃ、行きますか？

どうせ俺のことはバレていそうだな

だつたらこのまま俺が闇の書の主であるとガセネタの刷り込みして  
おくか

打てる手はいくつでもやつてやるかな

ヴィータ達のすぐ近くに派手に登場しようか

俺への注目を集めることに意味がある

局員釣りといいつか？

スカーサファイアで一度ひびの中に消える

で、すぐ近くに大きくひびを入れて登場つと

「なッ！？なんだ今のはッ！？」

「なんなんだあのひびはー

まあスタンンドのわからんやつには当然の反応か？

ただ黒いやつは一瞬目を見開いただけみたいだつたのは何か違和感があるな

なのはやつは「何かよくわからん」一人の反応が正しいはずなんだがな

「今日はたくさんのお餌を用意してくれたんだなあ？助かるぜえ？」

「何者だ君は……」

「これ見りやわかんだろ？」

言つて、体のひびからズルリとシャマルからこいつそりとつた闇の書を見せびらかした

……んだよ、そんな睨むなよシャマル

あとで返すから待つての

「あれは闇の書……」

「といつとはあんたが持ち主つてことかい？」

「探す暇が省けたら？だからちよつとお前らの魔力もひつてこぐぜ？」

？

もう一人の少年とザフィーラみたいな獸耳と尻尾の生えたねーちゃんが構える

俺もスタンドを…

「そんなこと、させないよー。」

ぬおつー？真っ先になのはがやつて来やがつた

それを皮切りに全員動き始める

シグナムも結局フェイトと戦つてゐし、皆戦いだした

なのはが突つ込んできたものの、ヴィータに阻まれている

“うやら本調子じゃないようだし、少年のサポートを受けているからやつとか

『白い子と金髪の子のデバイスがパワーアップしていますー・氣を付けてー。』

「パワーアップ……シグナム達のデバイスみたいになつてやがるのか…まあいい、ちょっといらしゃますか！？」

モブっぽい魔導師に近付いてはスタンンドの腹パンチで済ましてやる  
む、結構固いな…これがバリアジャケットってやつか？

飛んでくる魔力弾は転移しながら移動する俺には当たらず、次々に  
ぶつ倒していく

品定めもしつかりしていき、近場で手頃な奴を見付けた俺は意識を  
奪っていく

「……ごめんな」

はやてを救うためとはいえたまらない氣分はしねー…自分から襲つ  
てることに罪の意識が増してくる

だが「こんな」とでへこんでる場合じゃないし、時間は限られてる

一、三人倒したあとにシャマルの言つていた通りに蒐集をしよう  
するが…

「おひとー」

どこからか来た魔力弾を腕の一薙ぎで何処かに飛ばす

ゆっくりと田の前にデバイスを突き付けた黒い少年がやつて来ていた

なんというか、すっげー怒りみたいなのが爆発しそうなのが見えるな

「君の相手はこの僕だ 彼らに手出しませない」

「おおっ！ かつこにいこと言つねえ？ いいぜ？ ここにひりひり手出せ  
ねえ……だけどよ……」

一秒もたたず

背後から黒い魔導師の腕を掴み、別のビルに転移

そしてスタンドで隣のビルに投げ付けた

「ツー？」

「あの三人よりお前一人の方が早く埋められるんでなーお前の魔力を  
をいだぐぜツー！」

衝撃音とともにビルに開いた穴に再び転移

風を切る音がビルの中に行くのが聞こえたからノックアウトしてな  
いみたいだな

奴と入れ替わるように飛んでくる魔力弾は紅い魔導師と違えスピー  
ドがあるな……だがスカーサファイアが捌けない速度じゃねえ

「フッシュ」とは違つが、高速で次々に殴つて捌いていく

「一。」

しかし、捌いた影からもうひとつ魔力弾がいた

しかも直線的でなく、急に下降したかと思つとアッパーカットのように顎を叩掛けて飛んできた

顔を反らすことで直前まで迫つてきたそれを避ける

さうして死角から飛んできた魔力弾を直ら何処かに飛ばしてやるつと  
した時に形を変えて腕を拘束

立て続けに両足も地面から伸びる、ヴィータが言つてたチョーンバ  
イングだったか?に捕まつた

なるほど、魔法つてのはこんなことが出来んのか!

デバイスなんてもつて無いし、念語ぐらしかまともに使えねーか  
らな

演算処理だのなんだのを一部肩代わりしてくれるつてなんらデバイ  
ス持つてないと俺が魔法を使うなんことは無理な話だ

「やっぱ俺もデバイス欲しいなあ……」

スカーサファ イアじや できぬ」とに限度があるからなあ

思わずぼやいているがこんな状況じや あそな」としてる場合じや  
ないくらいに最悪極まりない

あいつ本体が姿を見せないのは遠距離から色々と仕込んでおける可  
能性が高い

スカーサファ イアで無理矢理ぶち切つてやりたいが、あからさまな  
隙になる…ん?

「あいつ… スタンドの存在見えてなかつたか? 魔力弾に魔力弾を重  
ねて撃つてきやがつたとき、スカーサファ イアの腕が伸びきつたの  
を計算して潜り込んでくるなんて直に見えなきや おかしいぞ! ?」

「スカーサファ イア、それが君のスタンドか」

隠れていた黒い魔導師は杖を向け、距離を計りながら姿を表した

「てめえ… スタンド使いか?」

「いいや? だが僕はスタンド使いと戦つたことがあるし、スタンド  
使いとの戦いかたを知つている」

「なに…? スタンド使いじやないつてなら見えないはずだ サツキ

のは、スタンドが見えてなきゃ出来ねえぞ?」

「ああそだ そして僕は今はスタンドが見えない」

「今は……?」

「友人にスタンド使いが居てね、色々教えてくれたよ だからスタンドが見えないという最大の弱点を持つ魔導師（僕ら）は見えるようにするシステムを作ったのさ それをデバイスに組み込んだからその傍らの存在を見れたんだ」

といつても今も出してる状態のスタンド

それが今は見えてない…

奴の言葉からするにそのシステムは未完成、あるいは試作…可視化に制限による何らかのインターバルか…?

だつたらこの会話でしかできないじょっとした制限解除の時間稼ぎ…といったところかね

しかし反則くせーなデバイスめ

幽波紋スタンダードの可視化ってどんなじ都合主義なんだよ畜生が

システムでなんとか出来るような奴じゃねえってのにそんなことをよくやつてのけやがったな

だがスタンドが見えようが見えまいが今の俺には関係ねー

はやてのためにも俺は魔力を貰うだけだ

見せてやんよ……スタンダード使いの戦いつて奴をよ……！

!? な、なんだ!」の轟はツ!?

ビシリ、ビシリとひびが入る音がそこかしこからする

そして

「！－！な、なにイイイツ！？」

## ビルの一角落を！

ひびを入れて切り離す！

奴の目の前から突然ビルの一部が崩れ落ちることなど普通はあり得ないこと！

だがスカーサファイアの力なら出来る！

そのまま投げ出される前に拘束をスタンドで引きちぎつて抜け出た  
と、俺は崩れた一部の破片をスタンドで殴り飛ばした

ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアツ！」

自分がたつていた場所も碎き、拳で飛ばす

突然の出来事で思考が止まっていたはずの奴はその光景を見てすぐ  
にバリアを張つていた

結構頭の切り替えが速いところから相当スタンダード使いとの戦いを経験してゐるようだ

「これはどうやら一筋縄じやいかねえか……だが！」

勝つのは俺だッ！！

以前の更新速度と違つのは熱いつなされると変なテンションになつて勢いで書いてしまうんです

講義とかやるべきこともあるのでゆっくりつまつたり進めて行きます

クロノの言ってた友人はもうりん亮のこと

まずはこの戦いを前後編に分けるか三回に分けようか悩む…

亮戦、なのは戦のVS主人公と庵戦、闇の書の闇戦もなんとかぶつちぎりで入れていきたいですね

リインフォースは生存した方がいいんかね？

マテリアルつ娘達も色々と出してやりたいが…そしたら紅田期まで何話いくのやら

前後編になつたこの戦い

不完全燃焼

## 魔導師 VS 幽波紋使い？

破片を防がれた譲一はビルの上に向かつ

クロノは直ぐに相手を追わずにあるシステムを見ていた

そのシステムはある事件では敵として出会い、そのあと友人となつた人物と共に研究して産み出したものだ

### 魔導師のスタンドの可視化

スタンドなんてまだ知られていないからか、まともな研究ではないために人手も少なく、難航していたがようやく形にはなつた

プロトタイプ、とでも言つべきそれは特殊なレーダーとサーチャーを通した立体映像のような感覚だ

しかしあはり完全とは言ひがたいもので、形がぼやけて相手のはつきりとした見た目やモーションが非常にわかりづらい

（相手は人型のスタンド…これぐらいしかわからないのだからまだまだな…）

しかもこれは見える時間が限られている

その時間を有効に扱わなくてはシステム自体が弱点になりかねない  
クロノはつぐづぐスタンンドとは厄介なものだと思い知られながら  
魔法を発動しつつビルの上へと登つて行つた

恐らく相手はスタンンドを限定期に見えたと知つた以上、その隙をつ  
いて攻撃してくるはず

ならば相手を捕らえるチャンスはそこにあるはずだ

実際に譲一も限定期に見えるといつ点を突いて駆け引きをすること  
にしていた

ビルの上で待ち構えていた譲一は相手の動きを注視する

スタンンドを出す瞬間等も重要だ

戦いの音が響く中、一人は相手の出方をうかがい続ける

そして一瞬の静寂

「……」

先に動き出したのは譲一だ

ただし、クロノに背を向けて

「…は？」

戦いの火蓋が切つて落とされた筈なのに何を？

といふか譲一がとつた行動がなんなのか数秒かけて理解した

「に、逃げたアーツ！？」

あわててクロノも駆け出して

「せいつー」

「ツー！」

急に向き直つた譲一は回し蹴りを繰り出す

攻撃に転じてきた譲一に驚くも直ぐにデバイスでガードを

しかし半ばからそれを切り裂かれたのを視界に捉えるとクロノは後ろに飛び退く

その時に空を飛んだのは正解だった

「バリアジャケットまで裂けている…なんて能力だ」

かすつただけとはいえ綺麗な裂け口を見て相手の射程距離を把握したのか、クロノはデバイスの切断面をあわせて直すと魔力弾を放ちながら付かず離れずな距離を取り始める

さつきは相手のペースを引っ張き回そつと画策し、敵前逃亡を図つたが冷静さを失わないことに譲一は内心舌打ちをしていた

そもそも空中より地上の方が戦いやすい譲一にとつて空中の相手はやりづらー

（ああ…地上で戦つてくれれば床に穴作つて落とし穴とか出来たんだが…距離を取りながらの攻撃、移動が自由自在ってのは俺の攻撃なんてとともに崩壊しそうにねえ…どうやつて引きずり下ろすかな）

魔力弾は避けるか弾くかしながら距離を詰めようと動く

しかし中々前進することができず譲一は押されだす

隙をうかがい続けたが弱点らしい弱点を見付けられないことに焦りが生まれる

（だめだ、集中できねえ…。0秒転移は諦めるか…せめて何かでかいアクションをしてくれば間合いに入れるんだが…）

譲一はジリ貧になるギリギリ手前でなんとかやり過ごし続ける

バインドも加わり始めた為に能力を使ってかわしていくもいたずらにスタンダードパワーを消耗するだけだった

だがこの状況はクロノにもマイナスだ

真の相手はヴォルケンリッター

誰かが敗北すれば蒐集されてしまう

なのはとフロイトの撃墜報告は無いが、アルフやユーノが苦戦することは間違いない

実力の上に豊富な経験を積んでいる相手では余程の才能か、あるいはそれを上回る経験を積み糧にした人物でなければ打破は難しい

誰かの援護に早く回りたいという想いが大きくなり、判断を鈍らせかねない

そしてクロノは決着をつけるべく魔力弾の動きを変えた

（今はこいつに集中するんだ…ミスをするわけにはいかないッ！）

「スティングガーレイ！」

「これは…！」

放たれる魔力弾は先程までと速度が段違いに速い

威力はそれほど高くはないがその速さが脅威！

譲一は何発か避けたところで腕を振るい、空間を碎く

震える空気、不快な音をたてた亀裂は残り全てを貫き返す

が、一発だけ当たつていなかつた

「いや、違うッ！あの一発だけ螺旋を描いているものは確かに避けたッ！軌道を変えてひびを避けきつたんだ！」

ひびとひびの隙間を潜り抜けたそれは譲一へ迫る

ならばとスカーサファイアでシールを剥がすような感覚で床を引き剥がして即席の壁にした

かなりの厚さのそれはちょっとそつとでは壊れないだらう

だが魔力弾は止まらない

眼前にひびが入りかけたのを見て譲一は床もろとも粉碎した

「スティングガーブレイド・エクスキューションシフトッ！」

「！？」

その先に見た光景は100を超えるだろ？魔力刃が宙に浮かんでいた

その切つ先は全て譲一に向けられている

（いくらなんでも非殺傷設定があつても死なねえかあれ？）

そして襲いかかる刃達

しまつたと今更ながらに床を碎いたのを後悔する譲一

手近な盾になるものが無いのだから

「スカーサファイアツ！」

（来るツ！スタンドガツ！）

システムを作動させたクロノは譲一のスタンドを捉えた  
ボンヤリとしているが青い巨人が傍にいるのが分かる

そして魔力刃に向かつて拳を振るつたのも

「オラアッ！！」

大きなダメージを与えないであろう部位を正確に弾いていく

だが刃は譲一の体を容赦なく貫いていた

足や肩につき立つ

しかし譲一は眉ひとつ何の動きがない

「バリアジャケットも着ずに何で平然としていられる？効いていいのか…？」

次の一手を繰り出すべくデバイスを構えようとして

讓一に懷に潜り込まれていた

瞬きの間すらなく完全にスタンンドの間合いで

その事実に顔から血の気が引いたのが分かつてしまつ

「な……」

「もつと刃と刃を落とす間隔が短ければ手数が追い付かなかつた……集中もろくにできなかつたが、まあ及第点か……惜しかつたな魔導師！」

スタンンドの拳が放たれ、強烈な一撃が、痛みが全身を走つた

身体中を振り回すような感覚に吐き気がする

「ホッ」と口から少量の血が出る

意識を飛ばされそうになりながら、視界の端に魔力刃がひびの中に突き刺さつて『いる手足が見えた

（まさか、あれはひびが生んだ隙間に入つただけだつて言つのか！？それより体が……！だがッ！相手にも一泡吹かせられるッ！）

「ぐッ……？テメエッ！？セツキの攻撃の中にも……！」

譲一を背後から魔力弾が直撃する

先程のステインガーブレイドにもステインガーレイ同様に別のものが紛れていたのだ

### ステインガースナイプ

誘導と貫通を同時にこなせる魔力弾

クロノは偽装をかることで隠していた

一度も使えばもう通用しないかも知れないが

（後はブレイズキヤノンを放てればいいが、さつきの一撃が流石に効いたか…！くそっ！早く動け僕の腕ッ！）

（…バリアジャケットがあつてもアレの能力までは防ぎきれないみたいだな…しかしさつきの不意打ちはちと効いたか…！）

一進一退、仕切り直しになってしまった

警戒しながら譲一はちらりと腕時計の時間を見て顔をしかめる

（やつべ…時間が…蒐集は無理だ…いや…先に守護騎士達を逃がすか…）

「ブレイズ……」

「ツー！」

力を振り絞ったクロノのデバイスがこちらに構えられているのを見て譲一はゾクリとする

あれを放たれるのは不味いと直感した譲一は潰すべく動き、

「ぐああああツー！？」

「なに？」

仮面の男がクロノを蹴飛ばしていた

突然の乱入に驚くも正体不明の第三者に身構える

だが仮面の男はそんな譲一を差し置いてクロノの行く手を阻むように立ち塞がる

勝負に水を差されて気分を害したものの、優先事項のある譲一は今のうちに逃亡した

行き先はシャマルがいるはずの場所へ

「シャマル」

「譲一君！大丈夫でしたか！？」

「俺を心配するのはいいが今は早く結界をぶち破るんだ…出来るな？」

「でも蒐集したぶんが…」

「」の際は仕方ねえ…あの結界を破れそうなシグナムやヴィータもあの様子じや無理だろ」「

空中で激突する者達

デバイスがパワーアップしたのは、フェイトに肉薄され始めたところを見て以前より打ち倒すのが容易でないのが目に見えて分かる

「わかりました…いきます！」

シャマルが闇の書の詠唱を始めるのを少し離れたところから見守る

譲一

彼は先程の仮面の男について考えていた

「ちひりの味方…だとしても正体がわからないし何の目的があつて現

れたのか

時空管理局以外にも懸念すべき」ことが増えたことに計画を練り直さなければならぬだろ？」

「一応、皆に言つておいた方がいいなこりや…」

辺りの空気が変わる

そしてとてつもない巨大な力が働く感覚に思考の海から上がる

そして結界を光が貫く

なのはのサポートから外れたユーノは結界を持たそうとするが長くは持たないだろう

そんな光景を見て何故か言い知れぬ不安を覚えつつ守護騎士達と譲一は転移するのだった

盛り上がりきらない戦いを書いたのは初めてだ…

戦いを中途半端にしようとするのってさうに難しこぞ…

それましてもクロノって何だかんだで魔力量がめちゃくちゃもある見  
たいらしいけど…よくわからんなあ

なんでもなのはよつやや少ないだとか

ほとんどのことは自分もよくわかんないんですけどね

スタンド可視化システムはA・Sでは掘り下げません

これは空白期とかに使つ予定のネタがあるので詳しく書けないから

と書つか書けなさすぎて微妙な表現に…

青と赤、強者乱入（前書き）

三者ついに対峙

## 青と赤、強者乱入

SIDE 讓一

先日、突然現れた仮面の男

そいつの正体を探ろうにも何の手がかりもねえ

不確定要素に不安が募るばかりだがそつちに時間を割いている場合  
じゃない

一秒も無駄にしたくないと不安を紛らわしたいからヴィータの蒐集についていった

砂漠だけしかない世界

「」は地球ではない

ヴィータと共にやつて来たこの場所

俺とヴィータの回りにほこの世界の原生生物が何体も倒れていた

「オラアツー！」

「ハアアツー！」

スカーサファイアが何発も拳を打ち込み、それにヴィータのアイゼンの一撃が決まる

倒れた原生生物に素早く近付き蒐集するとそのままばた降り立った

「譲ー…お前大丈夫なのかよ」

「……ああ、気にするじゃねえよ…ヴィータ」「ボロボロだつての」

「ああむへ、あこつら騎士服をべつめしあげつて…」

互いの無事を確認しながらひたと次の標的を探しながらやなんねえ

少しだけ体が軋むが、スタンダード使いだからひつせすぐ治る

一人で砂漠を歩き始めた時にヴィータが倒れた

「どうやら靴の金具?が外れたようだ

「ホントに大丈夫かヴィータ」

「痛く、ない…」こんなちつとも痛くない！」

「ヴィータ…」

疲労もあるはずなのにまだまだと力強く踏み出していく姿に俺は黙つてついていくしかない

ほどなくして再び現れてくれる原生生物を次々にノックアウトして蒐集を重ねていった

そこそこに集まってるみたいだが、やっぱ前の結界を突破したのはかなり響いていやがる

くそつ…思い通りにいかねえな…

「…」

「…？」

「…ヴィータ…先に行け…俺じゃねえとダメなやつが出てきやがった」

突如、スタンド使いの気配がし始めた

無人のはずの世界に人間がいるはずねえ…考えられるのは

「…やつぱテメエかアツ！紅い魔導師ツ！」

頭上に向けてスカーサファイアの腕が振るわれる

太陽の光を受けて出来た影より現れた巨大な足を殴りかえした

突然の衝撃に回りの砂が吹き飛び、視界が悪くなる

「…譲一ツ…！」

「あとですぐ追い付いてやる…だから蒐集を…！」

怒鳴るように急かすと、ヴィータの気配が遠ざかつたのを感じた

入れ替わるように来た別の気配に対して俺は、自分の周囲から一気に大量のひびを生み出した

バキバキと音をたてて、触れたもの全てを問答無用で壊して引き裂く荆が回りの土煙を吹き飛ばせば、偶然生まれた安全地帯に紅い魔導師がいた

「テメエ…」じんなどまわざわざ出てきやがって…」

「ふむ、どうやら聞きたいことがありそつな田をしているな？」

「そりゃ山程質問があるからなー！」

スカーサファイアが地面を掻きつつ腕を振ると砂の海を割つて  
いく

「む！」

次第に砂漠は沈み始めて来たことに気付いた相手は直ぐにバックス  
テップから宙に浮き始める

「例え砂漠だらうと地割れを起こすことができるッ！遠慮する必要  
のないここなら俺の能力は好き放題使えるぞー！」

攻撃して現れたのだから相手の目的のひとつに戦闘が含まれてるのは明白、最初から手加減抜きだ！

能力を使い、背後に現れれば相手はギリギリ反応して後ろに槍を振  
るつてくる

首を日掛けで放たれた一閃を仰け反つて避け、一歩踏み出す

そこからはスカーサファイアの射程距離！そしてッ！

「オラアツー！」

自らひびの入った腕で殴りかかる！

スカーサファイアを影にした二段攻撃だ

小学生の小さい体だからこそできるやり方、そして俺の腕は今スカーサファイアそのもの！

アンブラーをスカーサファイアが抑えることになるから手数が足りなくなるのはわかっている

だから手数不足なら俺自身が補つ！能力不発のエネルギーを送り込めばバリアジャケット越しにもダメージは入るからだ！

スカーサファイアを阻むように現れたアンブラーを越えて、接近する

槍を振り切った状態に地から少し浮いただけの状態

バリアを張っていたみたいだが、世界を引き裂く力の前に何の障害にもならずに紙のように切れる

そしてメット越しに息を飲む声が聞こえた気がした

「逃げ場無えぞオラアツー！」

ぶつ倒して情報を聞き出して魔力を蒐集してやる

そんなことを考えていたせいが、一瞬に向かってくる閃光に気付かなかつた

「ぐあつー?」

「つツー?」

紅い魔導師も俺も横つ腹にそれが直撃し、くの字に吹き飛ばされる  
互いのスタンドも消えて、砂の上に打ち倒された

「なんだつてんだクソツー!」

「いの、攻撃は…ツー!」

立ち上がり、脇腹を押さえながら攻撃の飛んできた方向を見る

そこには大剣を持った奴が、富出庵がいた

込み上げてくる吐き気は、奴から放たれる邪悪のせいが

やつぱ学校とでは空気が違うんだな… あれが本当の奴なんだろ? から

とたんに隣から沸き上がる殺氣

紅い魔導師が富出を睨み付けたからだ

「お前は……！」

そして割れたメットから覗く横顔は俺の知るクラスメイト、矢口亮  
だった

「何だか最近、原作に介入できなくてなあ？最初からお前を着けて  
きた……案の定、やつと俺が介入出来るとこまできたぜ やつぱ主人  
公の俺がいないと物語は始まらないからなアッ！……しつかし矢口お  
前がレッドマンだったとは……」

「原作？介入？主人公？物語？なんだこいつ……なにいつてやがるん  
だ」

「……お前も、転生する前に説明を受けていたろ……」

勝手に俺の肩を掴んで立ち上がる紅い魔導師こと亮

敵だからイラつとするはすだが、体の痛みが若干引いているのに気  
付いた

肩を掴む手を見るとシャマルのように淡く優しい光が出ていた

これは回復魔法？何で俺を……

「説明をつて言つても、んなもん知るかよ…」

「…」は一人の少女、高町なのはを主人公に置いた物語の世界…介入は物語にいないはずの俺達の存在だ…お前はただ物語に沿つてるだけだが

「沿つてるだけ…？これは物語だつていうのか？…じゃあ、俺が、俺たちが、今やつてる事は物語の筋書きをなぞつているだけ…？」

「…俺も富出庵も今の状況を知つてはいる…闇の書事件と語られる物語…故にお前が闇の書の主でないことも、眞の主が八神はやてである」とも、闇の書も、守護騎士も…そうなると決まつていたこと

「何だよ…それ…ふざけんなよ…知つていたのか！テメエ！なんで、なんでわかつてて！」

「下手な介入は物語を、世界を壊す、ただでさえ俺たちの存在を楔にして現状を留めているのにそんなことをしてみろ…富出庵の存在を抑えきれずに世界が滅ぶぞ」

つかみかかろうとした俺をジロリと睨みそなことを言つ

黙つて、いつも通りにしていろつて言いたいのかよ…

「なんだそいつ、原作を知らなかつたのか？何にショックを受けているのか知らないが、俺の物語に邪魔なお前らを排除しなきゃな…」

なのは達もはやて達も俺が支えなきゃならんのだから

支える？庵が？

あの、よひやく笑えるよひになつてきたはやくを？

なんか、すつづえ嫌だ

庵の存在感に感じた嫌悪より、胸のうちから怒りがふつふつと沸いてきた

「それに、何度も俺を殺そうとしてくれた矢口の魔の手からフロイトを救わないとな…そして俺が物語をハッピーエンドにしてやるのやー。」

「救う？笑わせるなよ　お前の欲望のためだけに、人々の意思をねじ曲げて都合のいい物語に壊されてたまるか…」

「ハア？何を言つてるんだお前は、所詮物語の世界なんだ　どいつもこいつも汚えられた役割、台詞しかないよひなもんに情でも抱いたか？」

その言葉に俺は怒りが溢れ出した

自分の周囲に勝手にひびが入る

「…物語、物語つて…ふぞけんじやねえぞテメエッ…意思も心も  
ちやんとあつて生きてんのに作りもんみたいな言い方しやがつて!  
！」

「実際に作りもんなんだよ? 何怒つてんだか…だからイレギュラー  
な俺がちやんとした心を与えてやるうとだな」

紅い魔力弾が奴目掛けて飛んでく

しかし、全て壁のようなものに弾かれた

撃つたのは亮だ

殺氣の中に怒氣が混ざり始めている

「お前にとつて都合のいいように洗脳紛いの刷り込みをする」と  
か?」

「洗脳はお前だらつー! フロイトに余計な事を刷り込みやがつて!」

大剣を振るい剣圧を飛ばしてくる

凄まじい衝撃波に腕で顔を覆いながら富出庵を見据えた

「全て都合のいいことに変えよつとする…富出庵…お前は独善的  
なだけだッ…フロイト達に近づけさせてやるものかッ…」

「ちゃんと監を見ないテメエがはやて達を支える？死んでもお断りだッ！！テメエがどれだけ邪悪かすら氣付かないそのドス黒い悪ッ！！絶対にぶつ倒すッ！！」

「人を勝手に悪者呼ばわりしやがって…ふつ、俺が主人公で居続ける為の礎にしてくれるッ！！来い雑魚ども！！最強の力を味わえッ！！」

とてつもない魔力を全身から吹き出しながら迫る富出庵に俺はスカラサファイアを出して、亮はアンブラを影から出しながらぶつかつた  
どれだけ相手が強くて、恐怖を抱いても、こいつだけには負けるわけにはいかないッ！！

## 青と赤、強者乱入（後書き）

話を5話くらいいストックしようとしたけど結構投稿しきりつたって  
いうね

決してエクシリア楽しいなあとか、エリーゼかわいいなあとか、そ  
んなことはないはず…

……意志が弱いなサノブは

讓一VS亮にしたかつたけど、VSなのは、VS闇の書、VS闇の  
書の闇を考えてVS庵にチエンジしました

次回は亮のターン

クソッもつとザッフリーを使った話を書きたいッ

この思いは空白期に爆発させてやるッ



赤と青、強者に対する愛を繋ごう（前編）

「おひらばじぬけのやういへんいかがわい（ただの共闘）

## 赤と青、強者に牙を剥いて

サリィはリースと勉強会をしていた

来年から学校に通うことになったのである程度はついていけるように

スタンンドが知識も得る性質を持っていたからか真綿に水が染み込む  
ように覚えがよく、リースも教えがいがあつて充実している

サリィも来年からの亮との学校生活のために楽しそうである

部屋時計の針が3時を指したのが見えたリースは一度教材を置いた

「そろそろ一度休憩しましょうか」

「んーお菓子食べたいー！」

「今お持ちしますね」

区切りのこじこじまでいつて、一度鉛筆を置いたサリィ

甘く優しい香りもしてきたところからリースはココアを淹れてくれたのだから

そんなときこに小さくパキリと何かが聞こえた

「？？」

音の出所である台所に行つたサリイは作業をするコースを横田にあ  
るものを見つける

普段亮が愛用している赤いコップ

コップには僅かにだが小さくひびが入つていて

「…なんか嫌な感じ…」

ボソリとサリイはそれを見て嫌な予感を感じるのだった

SIDE 亮

「どうしたどうした…？さつきまで偉そうに啖呵を切つたわりに大

したことないぞ！？」

「へそがツ一謳子にのひてんじやねえ……」

スカーサファイアの能力を使つた譲一が、転移を繰り返しながら雨霰に降り注ぐ魔力弾を避けていく

大量の魔力弾、その光景はいつかのサリイの時と同じだ

誘導弾が撃てないという事実があるだけよかつたが、それでも爆撃さながらの惨状に手も足も出せない

「まだ殺してはやらないが、たっぷりと痛め付けてやるぜー。矢口亮アツー！お前もだアツー！」

「チイツ！！バカ魔力が、バカス力撃ちやがつて……！」

次々に放たれる魔力弾をこちらも魔力弾で迎え撃ち、その間に別の魔力の準備をする

「何かやろうとしているようだが無駄なんだよ、俺に攻撃なんてものは届かないのさ、無駄無駄……」

「それはどうかな？ヴォルケイノツ！！」

頭ひとつ分ほどの大きさの魔力の塊を複数個の前に発射

全てが下に向けて落ちていく

「どこに撃つている？馬鹿にしているのか？」

それを見ていた奴は首を傾げるだけ

讓一はあの塊に脅威を感じたか、離れていく

「イラブショーンシフトッ！…」

塊が明滅したあと轟音をたてて火柱を放つ

さながら火山の噴火の如く、それは宙にいる庵を飲み込む

「やつたのか？」

「これで勝てたら苦労はしない…アンブラッ…」

火柱から生まれた影を伝いながら、この星の原生生物以上のサイズになつた腕を降り下ろした

「「Jの程度の火など暑くないわ……ってうおおおおおつー！」？」

火柱を抜け出てきた庵をバリアーと叩き潰すッ！！

スタンドを見ることのできない奴は、重力魔法か！？などと叫びながら砂の海に沈みこんだ

「うわああ…」

「ボヤボヤするな、あいつはまだ無傷なんだからな」

「けつ！分かつてると……後で蒐集してぶん殴つてやるからなーー！」

「生きて帰れたらな」

軽口を叩きながら、サイズが小さくなつていくアンブラの方に走つていく

俺は宙に浮かび、ブルーブレイズを銃のように構える

「「Jのツー！つまらない真似をツー！」」

「モー」だア アツ！！」

やはり何の傷を負わずに出てきた庵に向かつて、譲一が飛びかかる  
スタンドのパワーを得る」との出来る譲一は驚異の脚力を持つて、  
足場が不安定なはずの砂漠で銃弾のような速度を出していた  
だが、それでも奴にはダメだ

「なんだそれは？止まつて見えるモツー！」

「なにイツ！？」

一瞬

大剣を素早く振るい、譲一を切り捨て返した

まさにその言葉通りの早業

しかし、体の半ばで刃は止まつた

「ツー？斬れてないだとツー！？」

「あ、あぶねえ… 何て速さだ… 下手すりや 完全に両断されていた！  
だが、これで…」

「ふんツ！だからお前は雑魚なのだ！！」

力チリと音がすると同時に爆音が砂漠に響いた

奴の力オスキヤリバーに内蔵されてる銃の機能で譲一は吹き飛ばされていた

確かに、俺の時のように譲一は門で締め上げて武器をその場に固定するのはいいだろつ

しかし、それは奴には不正解

相手は動搖しても冷静なままだ

奴もまた強くなり続けているのだから

吹き飛ばされた譲一の後を追いついて飛び出す庵田掛けて魔力弾を放つ

なんとか足を止めてくれたようだが、俺田掛けて魔力弾と剣圧を撃ち出してくる

体に何発も掠りながら、譲一を庇いついて立ちふさがつて見せた

「あいつを殺させるわけにはいかない…ツ！」

「それで守つてこるつもつかよ…？ええツ！？」

「黙れ！ブレイズキヤノンッ！…」

巨大な極光を槍先より放つ

が、やはりあいつの何枚も張られたバリアを抜くことはなかつた  
甲高い音がまるで無駄だと俺こなれやこでいるよつて耳障りだ

それでもと出力を上げて押し込む

だけれどその奥にいる奴は俺を見下し、嘲笑ついていた

「貧弱貧弱ウ！こんな弱々しいのがブレイズキヤノンとは笑わせて  
くれてるのか！？逆にこのままバリアで押し潰してやるうッ！…」

「ぐりううッ…」

ギリギリと押されていく…このままではダメだ…避ければ、後ろの  
譲一「…」とやられてしまつ…

「はあ…はあ…亮…」

「なんだ……」つむははつむちで忙しいんだよ…！」

「今から飛ぶから、あのバカをテメヒの影に閉じ込めやがれ…」

「いきなり何を言つて… それど、いじやな、」

足を掴まれた感覚がした途端

何か、別の世界を通る感覚がした

気付けば、さつきまでいた場所にはバリアで押し込んだことによる爆発が起きていた

土煙で畜出の奴すら見えなくなつてゐる

そもそも俺は今どこにいるんだ?

「? 俺は… 空にいるのか?」

「あのバケモンをちょっとでいいから、取り押さえやがれ… あいつのいけ好かねえ面を歪ませてやりあ」

頭上にひびを入れてぶら下がる譲一は口から血を吐きながら俺を宙に放り投げた

確かに今なら奴の気配の真上にいるからアンブラで封じる」とが出来る…

俺では奴の防御を越えられない… だが譲一なら出来る

お前がやるつてんなら、俺はお前が攻撃を通してお前が元氣にしてやるよ

「…上だと？ こいつの間に…」

「アンブラアツ…！」

俺の影から手が伸びる

そして俺の影が奴の影に触れよう動く

だが奴は俺の能力を一度受けっていたからか直ぐ様離れた

「また奇妙な力で俺を止めようとしたようだが… 影に気を付ければ大したことなど」

「まだまだああーツ…！ ブレイズキャノンッ…！」

「ビニを撃つて…」

奴の遠い後ろに閃光が伸びる

そしてその光を受けた俺と奴の影が巨大な物へと変化していく

いくら逃げようともその大きさに流石に逃げ切れないはず

これで奴の影に！

「馬鹿がッ！」の程度でッ！」

しかし、奴は俺の予想を大きく裏切るよう人に間離れた勢いで飛び出し、僅かな差で逃れ続ける

出力を上げて光を巨大なものに変えて見せるも変わらない

……これまで俺が戦っていた時の速さはまだ序の口だつて言いたいのかよ……！

「小細工なんぞ考えやがつて…今からそのトうないことを考える頭を吹き飛ばしてやるッッ…！」

「クソッ！あと少し、あと少し、だけ影が足りない…ダメだつていつのか？俺では…！」

真横を何かが通り過ぎ、砂丘の頂上に突き刺さる

「弱音吐いてんじゃねえ、俺がいんだろーが」

それは一本のナイフだ

それが日の光を浴びて、細く、長い影を生み出している

砂丘の影も相まってその影は確かに足りないはずの隙間を埋めて、ひとつの大な影になっていた

「ツー！庵イイイーツー！」

アンブーラを即座に伸ばして奴の足を捕まえる

さうに俺はカートリッジをリロードしてバインドを発動しまくる  
奴のふざけた身体能力を封じるべく、チーンバインドが砂漠よりも  
いつも伸び、腕の間接部等を動かせないように幾重もバインドを  
仕掛けた

「うおおおおツー！？馬鹿なツー！？あんなナイフ一本にツー！」

「ぐつ、ぐつうううツー！」

拘束を振りほどかんと暴れる奴に何度もバインドが砕けては新たな  
バインドがまとわりつく

俺はその間に何発も自分の魔力を持たせるべく、カートリッジを使  
用していく

自分の中には力の喪失感がこれまで以上なのを感じ、なんとか

持たせる

絞り出すような感覚に額から汗を流しながら未だに暴れる奴を止めようとバインドを発動し続けた

「おのれエッ－こんなものでエ…抑えきれると思つたアッ－－」

「馬鹿力があつ…－－ああああッ－－！」

奴が十全に力を振るえないように片足を砂の中に引きずり込ませると突然の感覚に戸惑つたか僅かに力が緩んだ

踏ん張れないせいか、動きを鈍らせる」とに成功した俺はすかさずバインドを重ねた

そして

「うがああ……ッ！」

「今だアッ－－譲－イイイッ－－！」

「いくぞオラアアアーッ－－！」

一瞬にして目の前に転移した譲一が、スカーサファイアが、拳を構える

「くツ！俺を攻撃しても鉄壁のバリアを抜けるはずが…」

「んなもん知るかああーツー！」

「なつ…」

譲一の拳が、次々にバリアを抜いていく

当然だ、空間を壊すという常識を越えた災厄の如き力を前にどんな壁を立てようが、壁ごと壊していく

どれだけ攻撃を当ても傷がつかないバリアを抜くとは、羨ましい能力だよ

そして最後の一枚を抜いたとき、譲一の背後にいた傷だらけの巨人が動き出した

「馬鹿な…こんなことが…俺のバリアが簡単に…！」

「俺の行く手を阻むもんがなんだろうが、全てぶつ壊してやるまでだ…！例え最強の盾だらうと…！」

「ふざけるな雑魚があ、グハアツ！？」

メキリと、スカーサファイアの拳が顔面をとらえる

能力を使わずにただ純粋な暴力で

無防備となつた奴の体を拳が何度も殴つていく

俯いた顔からわからないが、相当な攻撃を受けたのだ

それに止めと言わんばかりに腕を一度引いたあとに渾身の一撃が奴の体を砂の海へ殴り飛ばした

## 赤と青、強者に牙を剥いて（後書き）

皆名前の呼び方安定しないな

それが富出庵クオリティ

今回の戦いは慢心しまくつな富出庵です

そして主人公一人の共闘

そこまでのものじゃないけどね

果たして本当に譲一＆亮ペアは勝つたのか？

それは次回に続きます

それにしてもこの戦いで思い付いたんだけど、譲一＆亮＆なのは＆フェイト＆S庵っていうフルボッコバトルをいつかしたいと思います

実現するかわかんないけどどんでもない惨状になりそうだ

俺は見捨てない（前書き）

思わずネタ帳で、コキブリ叩き潰しちゃつた。orz

俺は見捨てない

SHIDE 亮

乾坤一擲

まさに全ての力をのせた一撃

バインドを突き破り、飛んでいった富出は砂漠に大の字で倒れている

「グフッ…はあ…はあ…さまあ見りつてんだクソカス野郎が…ゴホ  
ツ」

「倒したのか…？」

先程のゼロ距離射撃に内臓か骨をやられているのか譲一の吐血が止まらない

足元も覚束なくなつてきているのか何度も足が砂を踏み鳴らしている

流石にこれは早く治療させないと不味いな

だといつのに譲一は俺を見て不敵に笑い

「ああ、続きとこ」「うざ……？」

「馬鹿かお前は？」

「あん？馬鹿とか失礼だな……言つただろーが俺は蒐集してぶん殴つてやるつて」

「お前、そんな状態で戦えるわけないだろ！」

「うるせえッ！！救えた筈の人間を物語だからつて見捨てるような真似しやがつたテメエのその考えは嫌いなんだよ！！ぶつ倒して蒐集してそのあともつかいぶん殴るんだ！！」

「……俺だつて……フュイト達と会つて守りたいものが出来た……だが彼女達の生きる世界に不必要な干渉は、全て歪めてしまう……介入か、物語に沿つていくことしかできない……下手に介入して改变に変われば富出の奴と同じことなんだ」

「だからつて！見てみぬフリは出来ないだろ！？確かにこの世界は物語かも知れないが生きてるんだ！俺も眞もここにいる！俺は……！ ゲフツゴホツ……！」

「……譲一……！」

「ああ！？俺の状態なんか心配してる暇なんて……」

譲一を押し退けてソレに立ちはだかる

斬撃が、深く入る

とつさに張ったバリアは簡単に切り裂かれ、バリアジャケットも破られた

視界に鮮血が飛び散る

これは、不味い…傷が…深すぎる…

立つていられない俺は膝をついてしまった

「ふつ…中々に痛かった…だが、やつぱり無駄だったなあ？」

カオスキャリバーを振り抜いた富出がニヤニヤと、俺を見下ろして  
いた

「亮、お前…ツ…」

「ふんツ！さつきはよくも好き勝手にやつてくれたな？雑魚がバリ  
アを越えただけではしゃぎやがつて…」

「く…何で…」

「は？そりや痛くても軽いからに決まつてんだ、ろつ！」

「ガアツ……！」

蹴りが傷を抉るように入り、更に血が出る

子供の蹴りとは思えない衝撃で、後ろの譲一を巻き込んで砂漠に転がされた

「ぐうあつ……く……なんでだ……」

譲一のスカーサファイアは本気ならバリアジャケットごと人体に穴を開けられるほどの力があるはずだ

手加減していくも相当な打撃が入っているのに、効いてないのだとしたらこいつはどれだけ頑丈なんだ…

「ハハハハハツ！！無様だなあ！？矢口亮！？」

「うう……」

「おい！亮！しつかりしろ！」

「結構綺麗に斬れたからな これは剣の腕が上がったかな？」

「くツー！庵テメエツー！」

「あー、まだお前がいたんだっけね…さっさと始末してなのは達を助けなきゃ」

砂を踏みしめる音が死神の足音のように聞こえる

まずい、俺も譲一も満身創痍だ

せめて、せめて譲一だけでも助けなければ！

「う、アアアアツ…！」

「まだ立ち上がるのか？お前も存外しづといなー」

「ひ、ひ、せえ…！」

足に力が入らない

だが、それでもやるしかない…

「ウザいから消し炭になるといこよ

カオスキャリバーを上に掲げると剣へとなのは張りの魔力が収束している

やがて巨大な刃となつたそれは今か今かとはち切れんばかりに明滅

していった

その光景に悪寒覚えた俺は直ぐに行動に移る

あれを降り下ろされる訳にはいかない…！

「させらかアアアアーツ！…！」

「ぬう…？」

「亮…？」

ブルーブレイズを槍から四つ爪の大型のクローバーと変えて相手をバラゴンと挟む

アンブラの足を踏み台のように出して、俺」と庵を遙か先へと押し出した

譲一の叫びが聞こえるがそれも直ぐに遠くなる  
回りの景色が次々に流れていった

衝撃で体に激痛が走る

「あああああッ！…？その傷でまだそんな力を…？」

「あああああッ…！」

挟み込んだ状態でブルーブレイズに魔力を集中させる

「お前正気か？こんな至近距離でブレイズキャノンを放つたら俺のデバイスに溜まった魔力ごと自爆するぞ！？」

「それでお前に傷を負わせられるなら…！ブルーブレイズ！カートリッジロード…！」

飛び出す薬莢、更に規模が大きくなる魔力塊を見て本気だと分かつたのか、奴の顔に焦りが生まれた

「ま、待て！落ち着、」

「ブレイズ、キャノンッ！！」

魔法が炸裂する

バリアを目前に魔力が稲光のように辺りに散らばっていった

そして視界が極光に包まれる

全身を激痛が襲うと直ぐに意識を失つていった

砂漠に光の柱がそびえ立つ

それは亮が庵もるともアンブリの力で飛び出した方向だった

「あの野郎…！」

自分の命に代えても俺を助けよつとこやがつた！

わざわざ自分で守りたいものが出来たとか言つとこでそれか…？

ふざけんじやねえぞ！

お前、それじやあ守りたいものを結局他人に押し付けてるだけじゃねえか！

俺を一度底つて斬られてるのに勝手に無茶しやがつて！

「死なせねえ…！」

なんである馬鹿にイライラしなきゃなんねえんだよこの俺が

亮の奴蒐集したあと殴るだけじゃ済ませねえからな

体が思うように動かない俺はスカーサファイアに抱えられながら転移していく

(ヴィータ…)

(譲一か!? 無事だつたんだな…!)

(悪い、イレギュラーが発生しやがった…直ぐに長距離転移の準備  
しといてくれ)

(お、おいー待てよ! それよつさつきのあの光は、)

念話を一方的にかけておいてあつさり切る頃には何かの爆心地のよ  
うな場所にいた

じじがわつきの光の場所か…

砂が焦げ付く程の破壊力にゾッとする

「亮何処だ! まだ死ぬんじやねえぞ!」

叫びながら中心に向かつて降りていく

何度も転びそうになるが足を止めるわけにはいかねえ

そんなときには砂に紅い腕を見つける

直ぐにかけより、スカーサファイアで引き抜いた

全身をボロボロの亮が出てくる

自分の血でせりて紅くしたその凄惨な姿に息を飲む

「う……」

「亮……まだ生きてるか……？」

「フフ、イト……サリイ……」

「おこしつかりしる……」

重体の亮をなんとか持ち上げ歩いていく

この近くに落ちていた槍を拾い、ヴィータとの合流地点に急ぐ

だつてこの……

「その死に損ない、抱えて何をしている?」

「そこを……だけよー庵!」

刃が若干かけて、体にほんの少し火傷と裂傷を負った富出庵が立っていた

「譲……俺は今、怒っているんだ……格下も格下な奴にこんな傷を負わされて……ふざけているとは思わないか?」

「さあ? お前が悔つてたのが悪いんだろうが……そもそも見ぬよ

「ふん……譲一、一つ取引しないか?」

取引だあ?

こいつ、一体何を言つてゐるんだいきなり

そんな俺をよそに奴は俺の隣を指差す

「簡単だよ……そのお荷物を置いていけ そしたら命は助けてやる

「……なんだそりや……」

「不愉快なんだ……最強である俺を捨て身の自爆技なんかで傷つけら

れたことが…そいつが虫の息だとしても俺は未だに存在してこるとが許せない」

「……ガキかよお前……」

「何か言つたか?」

「いいや何も……」

亮を差し出せば命は助けるか

俺には家族がいるし、はやて達の事がある

死にたくない言い訳に使うような感じも少しだけあるが死ぬわけにはいかねえ

こんなスタンンドが通用しないような奴と戦いたくないからな

だからって、自分だけのつのつ生き残るのは違うだろ

「…断る」

「何故だ?たかが一撃を庇われた借りか?それとも意地か?」

「俺は、見捨てねえ…ただそれだけだ…」

「そもそも敵対していたうに…意味わからんない…まあいや、結局、一人や二人消すのになんの問題はないし…」

大剣を構える庵をどう抜いてやるか…

確か、バリアは抜けるんだよな…

だったらあの裂傷に直接一撃を叩き込んで見るか?

「死ぬ準備は出来たか?」

「いいや? 遺言がないな」

「」こんな状況で軽口を…

「譲一イイツ…」

張り詰めていたその場を引き裂くような高い声がする

俺はハツとして上を見ると巨大な鉄槌が庵を叩き潰していた

突然の不意討ちに足が砂に埋まっていたのが見えた

「な、ヴィータ! なんで来たんだお前…」

「うるせえッ! いいからお前の転移で離れろ…」

何か…すつじーい怒つてね?

俺が一体何をしたといつんだ

言われるがままに、ヴィータと壳と共に転移を繰り返し、あいつから  
大分離れたところで長距離転移した

それまでいた砂漠の世界ではなく何処かのビルの上に辿り着く  
そのあたりに俺が別の建物に何度も移動してよしやく力を抜く

「何とか離脱出来た… まさかヴィータが乱入してくるとは…」

「お前…なんでそんなボロボロになつてんだよ…心配したんだから  
な…」

?、ヴィータが心配…

そんなこと聞えてるアイゼンでぶん殴られた

凄い痛いんだけど…

「や、それとーはやてもシグナム達も心配するだらつからなー。」

「なんなんだ… 一体… まいいや… 先に帰つてくれ…」

「…そいつを治す氣なんだ… だつたらシャマル」

「一応敵だからな… 友達に直させる… 僕も服とか血塗れになつてる  
しーのまじや不味いだろ」

「…………」

「なんだよその田は…」

「なんで敵を治療するんだよ… 薬集でもするのか?」

「いや、こいつとは一回サシでボ「ボ」にしないと駄目だ… それま  
で許せねえからな… こいつの薬集はーの次だ」

「う、ちゃんと決着をつけなきゃならねえ

「こいつはまじやつといふこと分かる必要があるみたいだからな

ヴィータと別れた後に一度俺の家に向かつた

俺の部屋で亮を寝かせると、ある家の部屋に勝手に転移するのだった



## 俺は見捨てない（後書き）

庵戦、だいたい主人公一人は敗北ですね

スタンドのパンチを軽いですませるとか

そのうちスーパー庵タイムとかやるかもしれん

それはそうとサノブ、この間酔っぱらいに突然ぶん殴られまして

その時の酔っぱらいの意味不明な言動の「俺は見捨てない」をタイトルにいただきました

ネタとしてありがとう酔っぱらい

それにしても、脣が痛い！

あと殴られた跡から血が出て痛い！

酔っぱらいさんから殴りつけられたけどあれって傷害罪で逮捕できただんじや…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9864w/>

---

スタンド使いもリリカルマジカルッ！

2011年11月17日21時21分発行